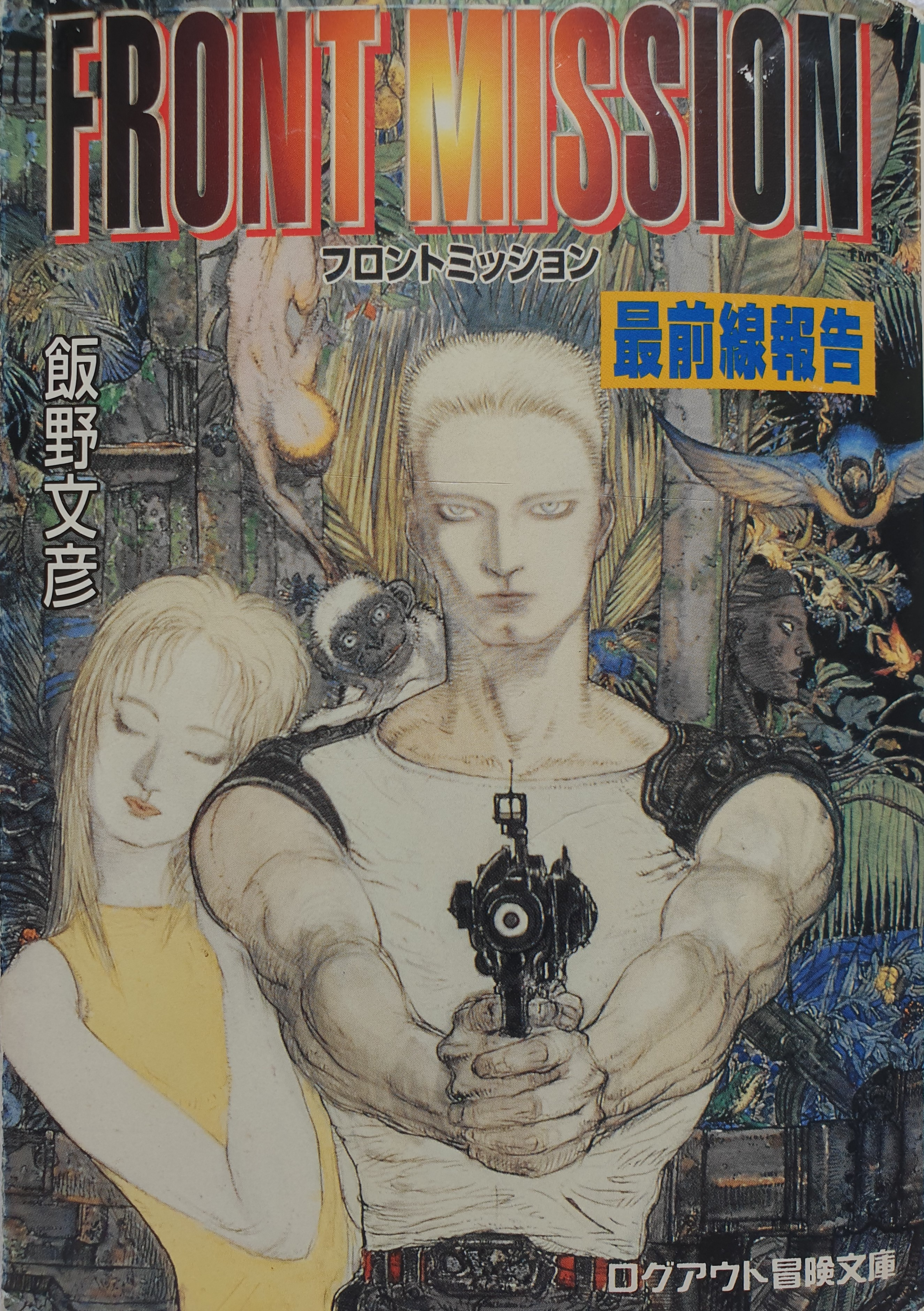


FRONT MISSION
フロントミッション
最前線報告
飯野文彦
ログアウト冒険文庫

フロントミッション

最前線報告

作　飯野文彦
シナリオ　岩崎秀雄

ログアウト冒険文庫

フロントミッション〜最前線報告





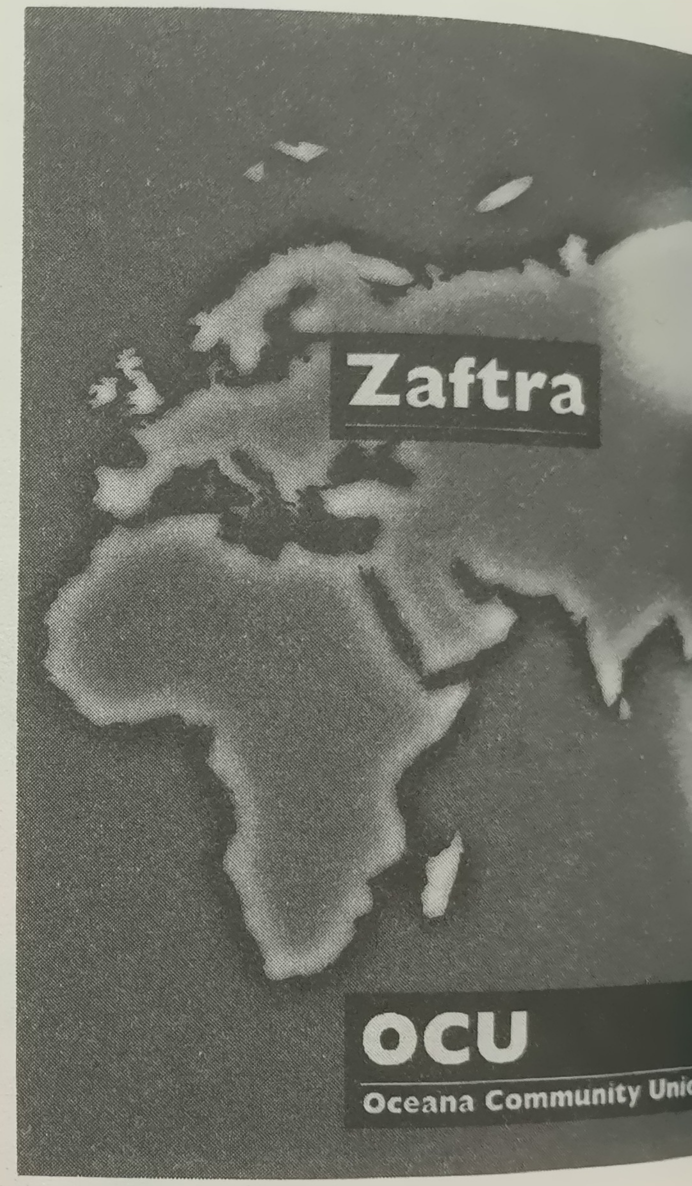
2090年の世界情勢

世界年表

西暦	
1995	ハフマン島隆起 〔国連機発見のため、国連管理下に置かれる〕
2005	ユーロコミュニティー誕生 〔EC統合〕
2015	ザーフトラ共和国（旧ロシア）誕生
2020	ニューコンチネント合衆国（USN）誕生 〔北、南米大陸統合〕同年国連脱退
2021	ザーフトラ共和国が国連平和維持機構設立 〔国連平和維持軍（PMO)〕
2025	ヴァンドルング・ヴァーゲン（WAW） 試作第1号機誕生
2026	オシアナ共同連合（OCU）誕生 ［アジア、オセアニア統合］
2070	第一次ハフマン紛争勃発 ［OCU、USN間］
2071	ハフマン条約締結＊
2072	ザーフトラ指揮のPMOの介入により、約 2年半続いた第一次ハフマン紛争終結
2090	ラーカス事件・第二次ハフマン紛争勃発

＊ハフマン条約：核兵器や科学兵器など、環境を汚染する兵器全般の、ハフマン島内での使用を禁止した条約。

2090年の世界地図は、アメリカ、ヨーロッパ、アジア、アフリカ、ロシアという、5つのコミュニティーによって彩られていた。21世紀初頭より、経済的自立、外交力強化、生産製造力向上、権力維持を主目的とした共同国家計画が各国で推進されたからである。



オシアナ共同連合［OCU］

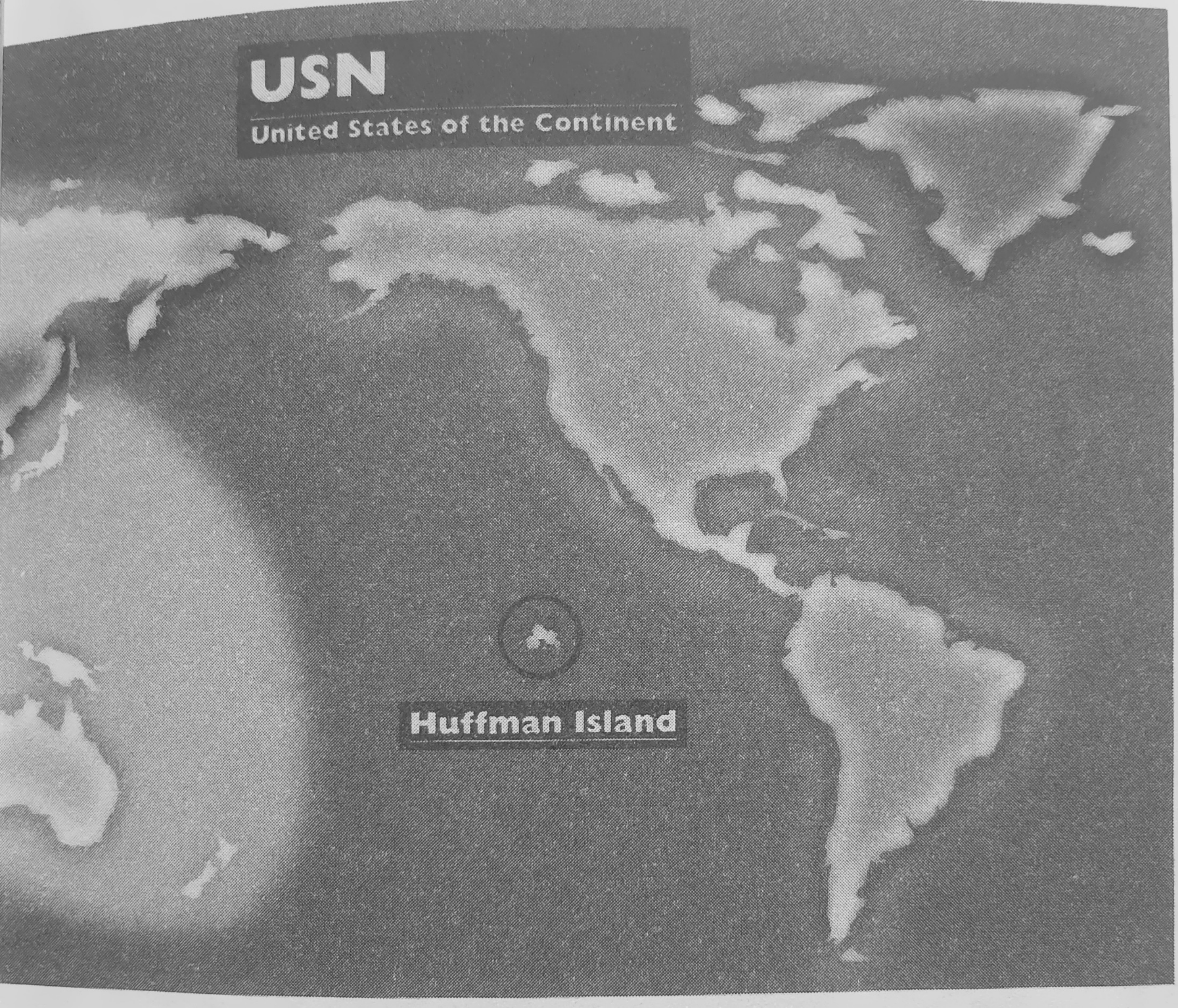
Oceana Community Union

オセアニア及びアジアの経済的自立を主目的とした経済共同連合。西側の経済土壌となることを拒否するためには、資源と対外交渉能力が必要として、豪州の資源と日本の生産技術を包括した経済共同体計画が立てられた。だが、思想対立の根は深く、結成には36年もの歳月が必要とされた。

ニューコンチネント合衆国［USN］

United States of the New Continent

アメリカとカナダが政治面での融合に動き出すと、南米の国々が併合を申し入れてきた。両国はこれを受け、アメリカとカナダに主権がある新国家として再構築を進めた。そしてOCU結成6年前に、新大陸合衆国の誕生を宣言。独立を主張した数国を残し、北南米大陸が統一されたのである。



ハフマン島

Huffman Island

●南緯：12度　東経：269度　面積：79.215平方キロ　人口：約455万人　流通通貨：ハフマン＄　●米生産量：48.2万t　野菜生産量：77.8万t　乳牛：33.5万頭　肉用牛：87.2万頭　養豚：48万頭　漁獲量：93.2万t　原油産出：216,300KL　天然ガス産出：12億5、820、3万立方M

約70年の歳月をかけて隆起した新島。北側に高地が多く、標高944メートルのウェイン山を筆頭に、いくつかの低い山々が連なっている。また、南側にあるロングリバース島には、隆起当初から希少な海鳥が住み付いていた。そのため、国際平和維持機構（PMO）により国際保護区域に指定され、居住と戦闘行為が全面禁止されている。

プロローグ

戦争において、兵士はコマの一つにすぎない。
勝ち戦だろうが、負け戦だろうが、同じことだ。
上官から命令があれば、自分の親兄弟であろうと、その首筋に銃器をつきつけ、トリガーを絞る。
命令とあれば、敵のヴァンツァー百機の中に、一機でだって突入する。
それが仕事だ。ヤナ仕事だ。
だがそれが出来ないなら、兵士になんか志願しないほうがいい。
二十二世紀間近の、この世界。ほとんどの人類が、平和ボケしてる。
好きこのんで、ドンパチやるなんて、変人だけだ。
もっとも俺は、志願して良かったと思っている。
人殺しが、できるから？　はずれだ。
もっともっと、甘っちょろい理由だった。笑わずに、聞いてくれよ。
軍隊に入って俺は、そのイメージから最もかけ離れたモノを得た。

それは……恋人だ。

われながらノロケてると、承知している。

彼女の名はカレン。カレン・ミューア中尉、二十一歳。

俺の部下だ。部下に手をつけるな。そんなことは、俺だって知ってる。

でも、仕方がない。相思相愛（ステディ）の仲に、なってしまったんだから。

知り合って、二年。

はじめは、まだほっぺの赤い小娘だった。少し厳しくすると、目に涙を浮かべたっけ。

〝こんなお嬢様は、使い物にならねえ〟

シゴキはじめて数分で、そう思った。だから、早く目を覚まさせようとした。

——お嬢ちゃん、あんたは間違って、ココへ来たんだ。すぐに荷物をまとめて、やさしいママのところへお帰り。

人一倍、かわいがってやった。

彼女、泣いたね。アズキみたいな涙を、ポロポロこぼして。

でも。辞めないんだな、コレが。

男女合わせて、新兵は百人近くいた。三ヵ月後には、五人に減っていた。

その中に、彼女もいた。

俺を見て、笑顔で敬礼した。

太陽に光る彼女の頬は、もうリンゴ色じゃなかった。白く、まぶしかった。
その笑顔を見て、俺は一目惚れした。
会って、三ヵ月後の一目惚れだ。事実だから、仕方がない。
それから三ヵ月後。
俺たちは……つまり、その……熱い仲になった。俗にいう男と女の関係だ。
そのまた、三ヵ月後。俺はベッドインしてナニをする前に、プロポーズした。
彼女は、泣いた。
「バカ。そういうことを言うなら、ふさわしい場所ってものがあるでしょ」
やはり、大粒の涙だった。
だが俺には、それがアズキではなく、真珠のように輝いてみえた。
俺はムクれた。意を決して、言った言葉だ。
だから、言ってやった。
「知らねえよ。こんなこと言うのも、言う気持ちになったのもカレン、君がはじめてなんだから」
彼女はふたたび、バカ……と言って、涙を流した。
涙の輝きが、真珠から、ダイヤにかわった。
そう感じたのは、涙のせいだけではなかった。彼女自身が、輝きを増したのだ。

その晩。彼女はベッドで俺に寄りそい、俺の胸に顔を乗せたまま、朝までジッとしていた。
俺も、ジッとしていた。
二人とも、何もしゃべらなかった。
けれども、それまで二人で過ごしたどんな夜よりも、素敵な夜だった。
考えれば、この一年。
休日が取れるたび、彼女の実家に、足を運んだ。
カレンのおふくろさんは、笑顔で俺を迎えてくれた。
親父さんも、笑顔だった。だが、真面目な話をしようとすると、矢つぎばやに俺に酒を勧め、話す機会を与えてくれなかった。
彼女の家から基地へ戻るジェットの中で、毎回俺は、二日酔いの頭でカレンの怒鳴り声をきいたもんだ。
「いっそ、パパと結婚して、毎晩二人で飲み明かせば！」
だから、三ヵ月前。
俺は、カレンの実家の門を開ける前に、カレンに背中をむけて、隠し持っていたウイスキーの小瓶を一気飲みした。
酒を勧めるカレンの親父の前に、深々と頭を下げて言った。
「カレンさんと、結婚させてください」

親父さんは、黙って一人酒を飲んだ。
俺は頭を、下げつづけた。
しばらくして……三十分か、一時間かわからないが、鼻をすする音がした。
顔を上げると、親父さんが泣いていた。泣きながら、酒を飲んでいた。
目が合った。
親父さんは、涙を拭いて、笑顔を作った。コクリと頷（うなず）くと、すぐに涙があふれ、笑顔はくしゃくしゃになった。カレンの涙の粒の大きさは、親父さん譲りだった。
その晩、俺は親父さんと結婚はしなかったが、カレンが言ったように、二人で飲み明かした。
翌日、強度の二日酔いで、俺はジェットに乗った。カレンははじめて怒鳴らなかった。怒鳴るどころか、優しく話しかけてきた。
「わたし、超能力があるのよ」
「超能力？」
「といっても、いつでも使えるってわけじゃないの。〝コレッ!!〟って時だけ。一回目は軍に入るとき、パパの説得に使ったの」
「二回目は？」
「きのう」
「それじゃあ、きのう親父さんが了承してくれたのは、その超能力のおかげか？」

カレンは、笑顔でうなずいた。
迎え酒でもしようかと、ジャケットの中に入れていた右手を、何気なく外に出した。
見つからないうちに、ウイスキーの小瓶は、捨てたほうが良さそうだ。
「でも考えれば、二回ともパパのために、使っちゃったってわけね」
カレンは、おかしそうに笑う。
俺は、気になって、尋ねた。
「次は何に、使うんだ？」
「とっておきの時。だって、わたしの超能力は、三回しか使えないんだもの」
「どうして？」
「どうしてって、わたしにもわからないけど……何となく、そんな気がするの」
俺は苦笑して、目を閉じた。
カレンは俺の肩に、頭を乗せた。少ししてから、ぽつりと言った。
「三度目は、あなたのために使うわ。あなたがとっても困ったときのために、大切にとっておくの……」
「こちらラビット1。偵察ポイントに到着しました」
無線から聞こえるカレンの声に、俺は現実に戻った。

いけねえ。任務中だ。
俺はヴァンツァーの中で、背筋を伸ばした。
カレンとの最後の任務。この任務を終えれば、カレンは除隊する。
そして半年後、カレン・ミューアからカレン・クライブになる。
ちなみにクライブというのは、俺のファミリーネームだ。
上官と部下としての関係は、今回まで。それが恋愛ボケした俺の気持ちに、隙をつくったのだろう。
いくら偵察だからといって、気を緩めるとは、我ながら失格だ。
俺は咳払いをし、気持ちを引き締めてから、カレンに尋ねた。
「状況は、どうだ？」
緊張した声が、返ってきた。
「不思議だわ、静かすぎる。……誰もいないみたい」
「油断するな」
俺の声は、彼女に輪をかけて、強張っていた。
それを察したのだろう。カレンは声をやわらげ、からかうように言った。
「大丈夫。こんなところで、死ぬ気はないわ、大尉サマ！」
俺はいちだんと大きく、咳払いしてから、

「勤務中だぞ、カレン中尉」
と、虚勢を張って、怒鳴った。
「わかってますって。ラビット1、偵察を開始します」
レーダーを見る。カレンの乗ったヴァンツァーを現す光点が、USN軍の軍需工場の奥へと進んでいく。
こんなことなら、カレンを待機させて、自分が偵察に行くんだった。
俺は、後悔した。
しかしカレンが、自分から偵察を買って出たのだ。
単なる偵察だ。危険はないだろう。そう思って、彼女の申し出を認めたのは、今回の偵察の指揮に当たっている俺自身だ。
個人的な思惑で、いまさら撤回はできない。
カレンからの報告を、ジッと待つしかない。
ヴァンツァー内部の空気が、ずっしりと重く感じられた。
息苦しいほどの沈黙——
それを盗み見たかのように、
「やっぱり婚約者のことは、気になりますか？」
と、無線から、サカタの声がした。

俺は必要以上に、大げさに、
「作戦中の無駄口は、銃殺だぞ」
と、叱咤（しった）してしまった。
「失礼しました、大尉殿」
サカタは、いかにも軍人口調で、言った。五メートルほど離れたヴァンツァーの中で、俺に向かって、敬礼しているかもしれない。
ふっ。部下のことを言えた義理か。自分だって、センチな感傷に浸っていたくせに。
俺は声色をかえて、明るく言った。
「腹が減った。あと五分したらカレン中尉を呼び戻して、ピウィーのところまで戻って、ハンバーガーでも食おう」
ピウィーというのは、俺たち三人をこの近くまで運んできた補給車のドライバーだ。
「どうですかね。ピウィーのヤツ。食いしん坊だから、俺たちのハンバーガーまで、食べてしまったかもしれませんよ」
サカタも、いくぶん緊張を、解いてくれたようだった。
「あの大食漢のことだ。ありえるな」
「知ってますか、大尉。ピウィーのヤツ、あんなに太ッチョのくせして、超臆病でしょ。しかも一人で心細くなると、よけいお腹がすくらしいですよ」

「それなら、ハンバーガーは絶望だ」

俺は苦笑した。サカタも、ひとしきり笑い声をあげてから、

「しかし、どうしてまた、条約違反をおかしてまで、こんな工場を偵察しなきゃならないんですかね？」

と、質問してきた。

〔ハフマン島オシアナ共同連合領メナサ市を夜間に出発。USN領フォートモーナス市沖合30キロ地点まで移動後、偽装船舶に乗り換えて上陸。

小型潜水艦にて、USN領ラーカス地区にある敵の工場を極秘偵察せよ。

なお、両国間の政治的緊張を考慮し、戦闘行為は厳禁とする〕

これがOCU軍の上層部から与えられた、今回の極秘任務の作戦要項だ。

俺もサカタと、同意見だった。

しかし、コマがマスターに逆らったら、軍隊というゲーム自体が成り立たない。

「さあな、どうせ事務屋たちの考えだ。ろくでもないことだろう」

サカタには、そう返答した。事実それ以上の答えは、俺自身にもわからない。

「こ、この工場は……」

突然、カレンの声が、無線に飛びこんできた。

「どうした？　カレン」

俺は身を乗り出した。

しかし、カレンは俺の声が、聞こえないかのように、

「し、信じられない……こんなことって……」

と、ひとり言のように、つぶやく。

「返事をしろ。カレン、カレン!!」

しかし返ってきたのは、サカタの声だった。

「大尉、敵部隊が現れました！」

「何だって！」

レーダーを見る。

いつの間にか、カレンのまわりに二十、いや三十近い光点が現れていた。しかも、ジワジワとカレンに迫っている。

「こんなバカな。あんなところに、敵が隠れていたなんて……」

サカタが、うめいた。

「カレン機を援護する。突入!!」

俺は、サカタに、叫んだ。

「了解！」

ヴァンツァーを起動させ、躍進させた。

カレン、カレン、すぐに助けに行くぞ。

「た、大尉。目の前に――――！」

サカタが、絶叫した。

突然、俺たちの眼前に、巨大なヴァンツァーが姿を現したのだ。

俺は反射的に、無線に向かって、叫んでいた。

「貴様は、何者だ！」

一瞬、間をおいて……実に、不気味な間をおいてから、

「ＯＣＵのパイロットは、いちいち敵の名前を、尋ねるのかね？」

と、あざ笑う声。

背筋に、寒けが走った。

声に微塵（みじん）も、温（ぬく）もりがない。

機械が、話しているようだ。しかし、それはまぎれもなく、人間のものだった。

機械以上の冷徹さと、残忍さを秘めた声――。

その声は、凍りつくように、静かに言った。

「予定通りにやってきた諸君の勇気を讃えて、自己紹介させていただくとしよう。わたしはドリスコル。ニューコンチネント合衆国大尉」
「ドリスコル……」
「OCUのパイロットが、どこまでやれるか、確かめるとしよう」
言葉が終わるより先に、ドリスコル機の肩に装備されたミサイルランチャーが、火を噴いた。
衝撃、爆音、オレンジと黄色の炎――！
俺のヴァンツァーの左アームが、一撃で消え去っていた。
「ちくしょう！」
今回の任務は、あくまでも偵察だ。行動の迅速(じんそく)さを優先して、まともな武器は装備していない。右アームに装備した軽量ライフル、〝ウィニー〟で応戦した。
エアガンで、巨象に立ち向かうようなものだ。
効き目は、ほとんどない。
「囲まれたわ！」
――カレンの声。緊迫した声！　悲痛な声!!
「カレン!!」
俺は、ウィニーを、連射した。
「フフフ。OCUのパイロットにしては、なかなかやるな。しかし遊びはここまでだ！」

ドリスコルが、つぶやく。
「カレン。はやく逃げろ！　サカタ、救援に向かってくれ」
「ダメです。レッグが吹っ飛ばされて、まともに移動すらできません！」
「ちくしょう。カレン、いま行く！」
「だめ、こっちに来ちゃ!!　きゃあぁぁぁぁぁ！」
「カレン、カレン――!!」
俺は、絶叫した。
カレンの返答がない。
かわりにドリスコルが、乾いた笑いを含ませながら言った。
「もう充分だ。証拠を消すことにしよう」
子供が興味本位に虫を踏みつぶすような、無邪気なまでの残忍さを帯びた声だった。
巨大なドリスコルのヴァンツァーが、光の束を放った。
「隊長。離脱してくださいッ――!!」
最後に、サカタの叫び声をきいた。
足元を揺るがす振動と、灼熱（しゃくねつ）の炎に包まれて、俺は気を失った。
カレン、カレン、カレン、カレン、カレン……。

1

梢の間から、鳥のさえずりが、響いてきた。
公園内のベンチに、すわっていたフレデリックは、顔をあげた。
〝ヒバリ？　メジロ？　それとも、単にスズメか……？〟
フレデリックは、苦笑した。
スズメか違う鳥なのかさえ、区別がつかなくなっている自分に。
ＯＣＵ——オシアナ共同連合——ＴＯＫＹＯ・シティ。
その真ん中に位置する、有栖川公園のベンチだった。
陽は高く、のどかな昼下がりだ。
腕時計に、目をやる。
待ち合わせ時間まで、十分ほどあった。
時間に遅れることはあっても、一分いや一秒だろうと、はやく来ることはない。
それが、現在のサユリの性格だ。
フレデリックは、ため息をもらし、右手で自分のこめかみを揉んだ。

手を離した表情に、疲労の色がうかんでいる。
〝いつから、こんな関係になったんだろう〟
空を見上げ、遠いものを見るような目つきで、フレデリックは思った。
目に見えて、彼女がつめたくなったのは、ここ一年のことだ。
しかし、それ以前から、兆候はあった。
自分が仕事におわれて、気づかなかっただけなのだ。
「わたしと、仕事とどっちが、大事なの？」
そんな古典的なセリフを、サユリの口から聞くなんて、思ってもみなかった。
唐突にフレデリックの頭に、中国の諺が思い浮かんだ。
〝温故知新〟——古きをたずねて、新しきを知る。
男と女、とくに夫婦関係においても、この言葉は当てはまる。
いまさらながら、気がついた。
とりかえしがつかなくなるほど、追いつめられた、いまさらになって。
おろかな男だ。
鳥の鳴き声も、妻の気持ちも、何にも知らずに、自分は自分を一流のジャーナリストと思いこんで、世界を駆けめぐっていた。
自分は才能があると思いこみ、それをサユリも喜んでいると信じていた。

アフリカに半年以上もこもり、政府高官と企業の癒着をスクープした。
鼻高々で戻ったフレデリックを「トキオ・タイムス」本社の連中は、ヒーローとして迎えた。
だがサユリは、ちがった。
社で口にした祝福の美酒に心を弾ませて、フレデリックは懐かしのわが家へと帰った。
彼を迎えたのは〝おかえりなさい〟の言葉ではなかった。
誰もいない部屋と、テーブルの上に置かれた離婚届の用紙だった。
彼女は一人娘のナオミをつれて、実家に帰っていたのだ。
実家に、電話をいれた。
サユリは、ふた言だけで、電話を切った。
「話すことは、ありません」
「近いうちに、話のわかる人を送ります」
氷のような声だった。
フレデリックは、棚からブランデーの瓶をつかみ、喉をならした。
なぜだ、なぜだ、なぜなんだ——！
納得のいかない怒りに、血液が逆流した。
半年前のできごとだ。
まだ離婚届には、サインをしていない。

サユリのことを、頭からふりはらうように、スーツの内ポケットから、一通の手紙をとりだした。
クシャクシャの便箋に、手書きの文字が綴られている。
手紙の主は「トキオ・タイムス」に同期入社した、パク・イルという韓国人(コリアン)からのものだ。
ライバルだった。唯一の親友と、言い換えてもいい。
手紙が届いて、一ヵ月近くになる。
だが手紙が届く、二日前。
フレデリックは上司から、パクの死亡を聞いていた。
取材中、誤って地雷を踏んだらしい。と、上司は言った。
死者からの手紙。パクからもらった、最期の手紙……。
手紙を読んでフレデリックは、パクの本当の死因を知った。
その原因が、手紙に書いてあったからだ。
パクは半年前から、ハフマン島へ従軍記者として赴任していた。
第二次ハフマン紛争の取材のために。
そこで彼は、新聞記者として、超一流の嗅覚を発揮した。
この戦争の影で、行われている陰謀を嗅ぎつけたのだ。
手紙が届いたこと、その内容を、フレデリックは誰にも告げていない。

告げたところで、どうにもならない。何の確証もない。
だからフレデリックは、出発を決意した。
「パパーッ！」
あどけない少女の声。
顔をあげると、ナオミが笑顔で走ってくる。
フレデリックは、パクの手紙をしまい、腰をあげた。
飛びついてきた愛娘を、抱き上げた。
目を閉じ、ナオミの重みを、肌で感じた。
角砂糖が、しっとりとお湯にとけるように、気持ちが安らぐ。
ナオミだけが、与えてくれる安らぎだった。
「三十分……二時半に、迎えにきます」
無感情の声が、安らぎを打ち砕いた。
声の主は、ついこの間まで、もう一人の安らぎだった人物。妻のサユリだった。
「一時間の約束のはずだ」
「ピアノのレッスンがあるの」
「しかし、明日旅立つんだ。今度、いつ会えるか……」
フレデリックは、言葉を飲みこんだ。

——もう会えないかもしれない。
ナオミの前では、口が裂けても言えなかった。
サユリは、いちだんと感情的に言った。
「それは、あなたの都合でしょ」
「ママ……」
ナオミがこわごわと、サユリを見つめる。
サユリは、唇を嚙みしめた。
フレデリックを見ながら、つぶやく。
「弁護士の先生から、離婚が成立するまで、ナオミはあなたに会わせるなと、言われているのに、こうして……」
瞳が、さざ波のように、ふるえている。
「わかった。三十分でいい」
フレデリックは、言った。
サユリは、何かを断ち切るように、背中をむけた。
何かをふり切るように、立ち去っていく。
二人きりになると、ナオミが尋ねた。
「パパ、明日から。ハフマン島へ行くんでしょ？」

「ママに聞いたのかい」
「うん」
「そうか……」
フレデリックはナオミを下ろし、並んでベンチにすわった。
「南太平洋のまん中にあって、できてから、まだ百年もたっていないのよね」
「それも、ママにかい？」
「ううん。自分で、本で、調べたの」
「そうか。えらいな」
ハフマン島が、その姿をはじめて海上にあらわしたのは、一九九五年だった。
七十年の歳月を経た二〇六五年に噴火活動が終わり、現在の形となった。
その後、開発の手がつけられたばかりの新島である。
「大きさは、日本の五分の一くらいで、フェルマータみたいな形をしてるのよね」
「フェルマータ？」
「ピアノのおけいこで、教えてもらったの。音楽の記号で、こんな形——！」
ナオミは、ピョンとベンチから跳ねた。
落ちていた小枝で、地面に図をかいた。
切り口を下にした半円、その下に丸い点。

「これが、フェルマータっていう記号なのかい？」
「そう。このマークがついていたら、その音を伸ばすってことなのよ」
ナオミは、誇らしげに言う。
「フェルマータか。確かに似ている。パパたちは、ハフマン島のことを、豆粒の上にお碗を乗せた形、なんて言ってるんだ」
「えーっ、豆粒に、お碗だって」
ナオミは、声をあげて笑った。
フェルマータの半円、またはお碗の部分が、ハフマン島だ。
正式な位置は、南緯一二度、東経二六九度。
島の総面積、七九二一五平方キロメートル。
「そして、下の点……パパのいう豆粒が、ロングリバース島！」
「ピンポン。正解!!」
しかしナオミは、喜ばない。
心配そうな目で、フレデリックを見上げた。
「でも、戦争ばかりしてるんでしょ？」
「たしかに、二度の戦争が、起きている」
「二度も？」

フレデリックは、ナオミを膝の上にすわらせ、わかりやすく説明する。
「二〇六五年。島の活動がおさまると、すぐにOCUとUSNが、ハフマン島にたくさんの人を送りこんだ。OCUとUSNは、わかるかい？」
「えーと、日本とかオーストラリアとかは、OCUで……USNはアメリカ……ああん、すぐゴッチャになっちゃう！」
ナオミは、頭をかかえた。
無理もない。
二十一世紀になってからの歴史を、正確に説明できるのは、大人でも少ない。
それほど、入り組んでいる。
「いいかい、まずヨーロッパのECをきっかけに統合ブームが起こったんだ」
フレデリックは、できるだけ分かりやすく、説明をはじめた。
きっかけは、二〇〇五年、ヨーロッパで起きたEC統合だった。
その十年後。
ロシアがその名称をかえ、ザーフトラ共和国が成立した。
危機感をもったアメリカとカナダが、政治面での融合に動きだすと、南米諸国が併合を申し入れた。
それによって、二〇二〇年。

北米、南米大陸に渡る巨大国家ニューコンチネント合衆国（通称ＵＳＮ）が誕生。
ＵＳＮは、すぐに国連を脱退し、事実上国連は有名無実となった。
そのため、翌二〇二一年。
ザーフトラ共和国が中心となって、国際平和維持機構（ＰＭＯ）が設立された。
世界各国はＰＭＯの設立に、積極的な賛成も反対もしなかった。
わかりやすくいえば、無視した。
一方。
これらの統合に、危機をおぼえたアジア及びオセアニア地域に残された道はただ一つ。
目には目を、歯に歯を。
統合には、統合をもって対処するしか、道はなかった。
だが、アジア諸国の思想的対立は根深く、オシアナ共同連合（通称ＯＣＵ）が結成されたのは、二〇二六年であった。
「ＯＣＵとＵＳＮが両ヨコズナで、ＥＣがコムスビ。ザーフトラ共和国なんて、やっとマエガシラくらいの力しかないんでしょ！」
ナオミが、言った。
「ヨコズナにコムスビに、マエガシラがやっと……か。なかなか、うまい言い方だ」
「小学校に、おスモウが大好きな先生がいて、教えてくれたの」

ナオミはサユリの希望で、日本人学校に通っている。
日本の国技だったスモウで説明するとは、日本人教師らしい。
もっとも今日のスモウでは、日本人はスモウ界のザーフトラ共和国だ。
日本人のスモウ・レスラーがたまに黒人、白人、他のアジア諸国の上位レスラーを破ってキンボシをあげると、スポーツ新聞の見出しのトップになる。
「でも、どうして両ヨコズナが、ちっちゃなハフマン島で、戦争なんかするの？」
素朴だが、的確な質問だ。
教科書的に答えると、
――豊富な地下資源を求めて。
――二十一世紀のニューリゾートとして。
建前（たてまえ）だ。
本音は、軍事拠点を得るためだった。
ハフマン島は、両国が対峙（たいじ）する太平洋のど真ん中（まんなか）。
喉から手が出るほど、ほしい場所に位置している。
やすやすと相手に奪われては、威信（いしん）にかかわる。
衝突を予測するのは、１＋１より簡単だった。
事実、島の活動がおさまった五年後――二〇七〇年。

領有権の獲得を争い、最初の紛争が起きた。

俗にいう、第一次ハフマン紛争だ。

戦争は、泥沼だった。

両国は、密かにＥＣに調停を依頼した。

だが直前に、ＰＭＯが割りこんだ。

国力のとぼしいザーフトトラ共和国が、このときとばかりシャシャリ出たのだ。

ＯＣＵ、ＵＳＮ、ＥＣともに、ＰＭＯの存在を消極的ながら認めていただけに、この調停を飲まざるをえなかった。

二〇七一年。

ＯＣＵ、ＵＳＮの代表は、ＰＭＯの本部があるモスクワで、ハフマン条約を結んだ。

〈ハフマン島での核兵器や化学兵器、環境を汚染する兵器全般の使用禁止。

島を二分割し、資源は分配。

ロングリバース島は、そこに住む希少な海鳥と豊かな自然を保護するため、国際保護区域に指定し、ＰＭＯが管理。居住と戦闘行為を、全面禁止する。〉

これが、ハフマン条約の主な内容だ。

以来、ハフマン島は、両大国の緊張のもと、何とか平和を維持してきた。

「でも去年、二度目の戦争が、起きたんだ」

「どうして？」

「〝ラーカス事件〟というのが、きっかけでね」

「ラーカス事件？」

「USNは、ハフマン島の自国領ラーカス区の軍需工場が、OCUのヴァンツァー三機に襲われて、工場が破壊されたと発表したんだ。

もちろんOCUは、そんなことはない。USNのウソだと言い返したんだけど……」

両国の言い分は、平行線をたどり、ついに、ハフマン島全土が戦闘状態に突入した。

第二次ハフマン紛争の勃発（ぼっぱつ）である。

「ほんとうは、どっちが悪いの？」

「難しい質問だね」

パクが、ハフマン島へ向かう直前。

フレデリックは、電話で話をした。

そのときの会話の一部が、脳裏に蘇る。

〈OCUの軍部は、USNの追求に対して、ラーカス事件に関与したヴァンツァーパイロットたちを〝戦闘訓練中に行方不明〟と述べたというんだ。つまりラーカスで、戦闘訓練があったことを認めたんだ〉

「ということは、ＯＣＵが、ハフマン条約を破ったと？」

〈それを探るために、ハフマン島へ行く。直接戦闘に参加したＯＣＵのパイロットを捜し出すつもりだ〉

「しかしパク。いくらスクープがほしいからって〝命あっての物種(ものだね)〟だぜ。この平和な世の中で、何もわざわざ数少ない戦場へ向かう必要が……」

〈フレデリック、それはちがう！　君は、根本的にわかっていない‼〉

「何だとッ、おれは心配して……！」

〈私はスクープが欲しくて、ハフマン島へ行くんじゃない〉

「それじゃあ、なぜ、好きこのんで、あんな物騒(ぶっそう)な場所に行くんだ⁉」

〈……オーストラリア生まれの君には、わからないんだ。祖国が分断された哀しみを、知らない君には……〉

「パク……。しかし君は、まだ若い。まだまだ、まだまだ俺といっしょに……」

〈ありがとう、フレデリック。でも、それでも私は行くよ。二度目の紛争が勃発した、ハフマン島へ〉

考えてみれば、パクの声を聞いたのは、あれが最期だった。

そして、フレデリックは今。



あれほどパクに行くなと止めたハフマン島へ、自分自身が旅立とうとしている。
「ねえ、パパ。戦争って、ロボットのオバケに乗ってするんでしょ」
「ロボットのお化け？　ああ、ヴァンツァーのことか」
ナオミの言うとおり、二十一世紀の戦争の主流は、ロボットのお化けだ。
ヴァンドルング・パンツァー――通称、ヴァンツァー。
〈マニュピレーターの搭載はもちろん、化学反応によって高速に硬化・軟化する素材に電流を流すことで、反応速度と耐久性をコントロールできる大小のアクチュエータを六百個以上用い、人間に近い動きを再現した二足歩行型の機動戦闘兵器〉
それが、ヴァンツァーだ。
「ナオミ、知ってたかい。パパは、ヴァンツァーの操縦ができるんだよ」
フレデリックは、自慢げに言った。
ナオミの瞳が、輝いた。
「ほんとッ!?」
「ああ。アフリカに取材に行ったとき、大平原をヴァンツァーに乗って移動したんだ。一度、ライオンに襲われたときは……」
「それじゃあ、逃げられるね」
「えっ？」

「それじゃあ、パパすぐ、逃げられるね」
「逃げられるより、敵をやっつけることだって……」
「やめてッ！　ぜったいに、逃げて。だって攻撃したら、パパだって、攻撃されちゃう。だから……」
ナオミの目から、涙がこぼれた。
「ナオミ――！」
フレデリックは、ナオミを抱きしめた。
「ねえ、パパ。どうして、そんなところへ行くの？」
ナオミが、喉をしゃくりながら、尋ねる。
フレデリックは、答えなかった。
いや、答えられない。
パクの手紙に、書かれた真実を探るため。
大きな原因だ。
だが、それだけではない。
平和なこの世界のなかで、唯一戦火が舞う地で。
もっと、何か根本的なものを。
サユリを。ナオミを。

自分を、探すために……。
人の気配がした。
顔を上げると、サユリが立っていた。
腕時計を見る。
二時半だった。
フレデリックは、ナオミを抱え、立ち上がった。
「わかった、約束する」
フレデリックは、言った。
ナオミは、小指をさしだす。
フレデリックも、小指を伸ばして、からめた。
顔を、上げる。
サユリと、視線が、合う。
サユリの瞳には、感情がなかった。
自分の心以上に、透明だったサユリの心が、今はまったく見えない。
〝探してくる。自分を、そしてこれからを……〟
フレデリックは、無言で背中を向けた。
「パパ、パパ――ッ!」

ナオミの声。
立ち止まらず、ふり返らず、歩いた。
梢から、鳥のさえずりが、響いている。
何度も聞いた、聞きなれたはずの鳴き声だった。
だが、今のフレデリックには、思いだせない。

2

剝（む）き出しのコンクリートに囲まれた、質素な部屋だった。
むさ苦しい汗の臭いが、充満している。
薄暗い電気に照らされて、男が一人。
パイプ椅子に、すわっていた。
両肘を太腿にのせ、うつむいている。
瞳は見開かれ、視線が前方の床に、注がれていた。
焦点が、あっていない。
だが、見る者を思わずゾクリとさせる、冷たい視線だった。

扉が、開いた。

外から響いていた歓声が、いちだんと大きくなった。

でっぷりと太った中年の男が、顔を覗かせる。

「ロイド。そろそろお前さんの出番だ。支度しな」

それだけ言うと、扉を開けたまま、迫り出した腹を揺らして、立ち去っていった。

ロイドと呼ばれた青年は、無言で腰をあげた。

部屋を出る。

歓声が聞こえるのと、逆方向へ通路を進む。

すぐに、だだっぴろい格納庫に出た。

暗いライトに照らされて、いくつものヴァンツァーが置いてある。

壁際では、数人の男たちが、たむろっていた。

ロイドを見て、一人が声をかけた。

「お前、このごろ連勝続きだな。たまには負けた方が、客は喜ぶぜ」

まわりの男たちが、下卑た笑いを浮かべた。

ロイドは、ふり向きもしない。靴音だけを響かせて、歩いてゆく。

一番奥に置かれたヴァンツァーの前で、立ち止まった。

——艶消(つやけ)しの黒に、ペイントされたボディ。

〝カローク〟
オーストラリアのヴァンツァー製造メーカー、ヴァンダム社の製品だ。
防衛力は低いが、耐久力はずば抜けている。
レッグパーツは、〝テラーン〟。
防衛力、耐久力ともにそれほどでもないが、抜群の移動性を持っている。
ライトアームには、不気味な光沢をもったライフル。
まぼろしの銃器と呼ばれる〝ツィーゲライフル〟だった。
どこで手に入れたのか、謎だ。
聞かれても、答えない。
レフトアームは、何も装備していない。
何より目を引くのは、両肩に装備された〝パライナ〟だった。
現在製造されているミサイルランチャーとしては、トップクラスの射程距離と破壊力を持っている。
だが、どれも傷だらけだ。
歴戦の痕を、たっぷりと刻みこんでいる。
「パライナを装備してやがるなんて、野郎まともな人生送ってねえ」
たむろしていた男の一人が、捨てぜりふ。

ロイドが、顔を向けた。
男たちの間に、緊張が走った。
だがロイドは、何もなかったかのように、ヴァンツァーに乗りこむ。
男たちの前を、素通りした。
強烈なライト、地響き、怒号と歓声。
それに向かってロイドは、ヴァンツァーを進めた。
ハフマン島。オシアナ共同連合領、バリンデン市にある闘技場である。
戦うのは、ヴァンツァーとヴァンツァーだ。
戦争中のハフマン島にあって、唯一の娯楽だった。
腕に自信がある者たちが、一攫千金を夢見て、競技に参加する。
真剣勝負だ。
死んでも、文句は言えない。
悲しむ者も、いない。大金をかけた客から、死体に怒号とツバを、浴びせられるのがオチだ。
その闘技場へ続く通路を、ロイドは進んでいる。
通路わきに、先ほどの太った男が、立っている。
ここのオーナーだった。
ロイドの連勝で、小遣いを増やしたのだろう。

ここ数週間で腹の肉が、いちだんと醜くたるんできていた。
「今日も速攻で、勝負をつけるつもりか？」
大声で、尋ねる。
答えない。
「気をつけろよ。今日の相手のアルダーって野郎は、アル中のどうしようもねえジジイだが、ヴァンツァーができたころから操縦している。経験だけは、豊富だ」
ロイドは無言で、男の前を通りすぎる。
だが、すぐに動きを止めた。
正面に、一人の男が、立ちふさがったのだ。
大柄な男だった。
ＯＣＵの軍服を着ている。腕の階級章は、大佐のものだ。
サングラスに隠されて、表情までは読めない。
「ここは選手の通路だ。勝手に入ってもらっちゃ困るよ」
オーナーが、言った。
軍服の男は、その言葉を無視して、ヴァンツァーを見上げて言った。
「ロイド・クライブだな」
フルネームを呼ばれて、ロイドの目が細くなった。

「だれだ、あんた」
　二人の間に、オーナーが割って入った。
「ほら、ロイドの出番だ。客が騒いでる。早く行きな」
　会場中に響く声で、アナウンスが響いた。
〈本日のメインイベント。現在二十五連勝中、地獄の覇者・ロイドの登場です！〉
「行ってこい。話は、その後だ」
　軍服の男は、道を開けた。
　ロイドは、闘技場へ出た。
　客席は、客であふれかえっていた。
　一万人近くいた。
　全員、目が血走っている。
　一触即発の殺気が、充満していた。
〈対しまして挑戦者は、歴戦の強者、アルダー・ワイスです！〉
　正面の通路から、茶褐色のヴァンツァーが、姿を現した。赤錆（あかさび）なのか、塗装なのかわからない。
「若造め、少しばかり運が向いたからって、図に乗るんじゃねえ」
　無線から、しゃがれた声が、響いてきた。

ゴクッと、音が聞こえた。ヴァンツァーの中で、酒を飲んでいるらしい。
「おれは、おめえみてえないきがった若造が、大嫌いだ。そのカラスみてえなヴァンツァーを、ぶちのめして、二度と戦えねえようにしてやる」
アルダーは、盛んに挑発する。
ロイドは、返答しなかった。
〈それでは、戦闘を開始します。レディ……ゴー!!〉
歓声が、爆発した。
アルダーが、動いた。
ライトアームに装備したバズーカ、〝ボア36〟を構える。
ロイドは、動かない。
防御の体勢すらとらず、両アームを広げた。
完全に、無防備状態だ。
「な、何だと!?」
戦闘を放棄したようなロイドの態度に、アルダーのヴァンツァーの動きが止まった。
アルダーが止まったと同時に、ロイドの右腕が動いた。
ツィーゲライフルが二度、閃光を放った。
気がついたら、アルダーのヴァンツァーの両腕が、きれいに消えていた。

開始から、三秒と経っていない。
見事な速攻だった。
瞬時に静まり返った場内が、ふたたび歓声に包まれるまで十秒近くかかった。
〈す、すごい。地獄の覇者ロイド。これで二十六戦全勝です!!〉
ロイドは、戦いが他人事であったかのように、背中をむけた。
歩きだす。
「ま、まて」
アルダーが、呼び止める。
足を止めた。
「お前、死のうとしているな。そうでなければ、こんな無茶な戦いはしない」
アルダーが、言った。
ロイドは、答えない。
「そ、そんなことはおれが許さん！　いいか、おれより若いヤツが、死に急ぐような真似は、絶対に許さんからな!!」
アルダーが、叫ぶ。
ロイドは無言で、格納庫へ戻った。

ロイドが狭い控室に戻ると、軍服の男が待っていた。
「見事な勝ちっぷりだ。苦労して、探したかいがあった」
「俺を、探した!?」
ロイドは、軍服の男を見た。
「私はOCU陸軍のオルソン大佐だ。お前を、スカウトに来た」
男はニヤリと、唇をゆがめる。
「軍に、興味はない」
ロイドは、パイプ椅子にすわった。
オルソンと名乗った男を無視して、手に巻いたバンデージを剝ぐ。
「あわてるな。お前を軍に、呼び戻す気はない」
ロイドは、顔をあげた。
「どうやら、俺のことは、調査済のようだな」
「ラーカス事件から一年。探したぞ、ロイド・クライブ。まさか、こんな場末の闘技場で、日銭をかせいでいるとはな」
ロイドの瞳に、鈍い輝きが浮かんだ。
すぐに隠すように、うつむく。
「戦局はわがOCU軍に、非常に不利な状況にある。しかも正規軍は、プライドばかり高く

て、役にたたんときている。われわれがこの状況を打開するには、本物の兵隊の力が必要なのだ」

「……」

「そのため実戦的な傭兵部隊を結成することとなった。名づけて〝キャニオンクロウ〟。私が司令を担当する」

「渓谷のカラスか……日陰者(ひかげもの)に、ふさわしい名だ」

「その日陰者の隊長を、お前に任せたい」

「隊長を、俺に？」

オルソンは、コクリと頷いた。

ロイドは、オルソンを見つめた。

真意を探るように。

だがサングラスの奥の瞳は、何を見ているのか、何を考えているのか伝わってこない。

「帰ってくれ。戦場に出向く気はない」

ロイドは、腰を上げた。

オルソンに、背中を向ける。シャツを脱ぎ、それで汗を拭く。

「恋人の仇(かたき)を、とる気もない訳か？」

「何だと——！」

凄まじい勢いで、オルソンに接近した。
百八十六センチのロイドの方が、わずかに背が高い。
オルソンも、百八十を越える長身だ。
「なぜ、そのことを知っている？」
目尻や唇を震わせ、オルソンに詰めよる。
〃恋人の仇〃
そうオルソンが口走ってから、ニヒリスティックな冷静さは、姿を消していた。
身体から、熱気がただよっている。
並の人間だったら、それだけで肝を潰される。
それほどの迫力だった。
しかしオルソンは、まったく動揺していない。
変わらぬ冷静ぶりで言った。
「雇い入れる人間の調査ぐらいはするさ。ラーカス事件を引き起こし、恋人を失い、自分自身の存在さえも否定され、闘技場のファイターにまでおちぶれて、ハフマン島をさまよう男、それがお前だ」
ロイドは、オルソンの胸ぐらをつかんだ。
捩じり上げる。

「何か、間違ったことを、言ったかな？」
オルソンは、唇に微笑（ほほえ）みをうかべた。
ロイドは、手を離した。
背中を向け、壁際まで歩く。
拳を、コンクリートの壁に叩きつけた。
「こんなところで、くすぶっていても、何の解決にもならない」
「くすぶってなんかいない。金をためて……」
「その金で、恋人の仇を探す、か？　甘いな」
「……！」
「一年前、お前がこの戦争を引き起こしたときに比べ、事態は深刻さを増しているんだ。今や、個人で何かできるなんて考えるのは、闘技場以外では、皆無だと認識すべきだ」
ロイドの拳が、壁に食いこむ。
肉が裂け、血が吹き出す。
「部隊に入れば、恋人を奪ったヴァンツァーを、探すチャンスもある」
ロイドは、自分の拳から滴（したた）り落ちる赤黒い血糊（ちのり）を、見つめている。
「明日。午後一時に、町外れの軍オフィスまで来い。そこで作戦を指示する。事態に猶予はないのだ」

オルソンは一方的に話すと、部屋を出ていった。

「くそッ――！」

左拳を、壁に叩きつけた。

痛みは拳よりも、心に響く。

3

頭が、ズキズキと、痛んだ。

昨晩。なじみの酒場、〝ワイルドキャッツ〟で、しこたま飲んだ。

木賃宿（きちんやど）に戻ったのは、明け方近くだった。

正午の時報で、目が覚めた。

汗と酒の臭い、湿気った室内。

ベッドに横たわったまま、三十分近く、天井を見ていた。

ぼんやりと何も考えずに、ロイドは立ち上がった。

部屋を出た。

宿の入口で、頭にカールをまいた中年女が、ブツブツ小言を言いながら、新聞を読んでいた。

「もう戻らない」
　ロイドは、言った。
　女は顔を上げるなり、
「もらった前金は、返せないよ。あんたが数カ月いるって、言ったんだからね」
と、甲高く、がなりたてた。
　頭に響く声だった。
「金は、返さなくていい」
　ロイドは、手で女を制した。
　狡猾な笑みが、女の頬にうかぶ。
　ロイドに見られる前に笑みを隠し、不機嫌を装った声で言った。
「気がかわって戻っても、ダメだよ。また前金で、もらうからね」
　戦争は人々の心を殺伐と、そして強欲にさせる。
　彼女の場合、原因は戦争だけではなさそうだが。
　ロイドは、外へ出た。
　照りつける太陽が、まぶしい。
　何も考えずに、歩いた。
　十分後。

町外れのＯＣＵ軍オフィス前に、立っていた。
「ロイド隊長。ロイド隊長――！」
後ろから、声がした。
ふりむく。ロイドの顔に、驚きが走った。
「サカタ！　お前どうして、ここに？」
一年ぶりの再会だった。
ラーカス事件以来である。
かつての自分の部下であり、また命の恩人でもあるサカタ・リュウジが、目の前に立っている。
「隊長、お元気でしたか？」
サカタは、人なつっこい笑顔を、ロイドに向けた。
「よせ。一年前に、軍隊を追ん出されたんだ。もう隊長なんかじゃない」
「いいえ、また隊長ですよ。あなたの下で働けると言われたから、今回の話を引き受けたんですから」
「何だって。まさか!?」
「数日前に、オルソン大佐から、スカウトされたんです」
「サカタ……」

サカタは、ニコッと微笑んだ。青空を見上げながら、
「おれは軍をおいだされてからも、この島にいたんです。故郷にも帰りづらくて」
「……」
「探したんですよ、隊長。黙って先に病院を、退院しちゃうから」
「すまん」
「やだな、冗談ですよ。でも、こうしてまた会えたんですから。さあ、もう一時です。オフィスへ入りましょう」
「しかし……」
「時間厳守。隊長が、教えてくれたんじゃないですか」
サカタに押されて、ロイドは軍オフィスのドアをくぐっていた。

案内された会議室へ、ロイドはサカタに促されて入る。
オルソンの姿はない。
女がいた。
二十代前半だろう。
長く伸びた金髪。肌は透き通るほど白い。
ファッション雑誌のグラビアから、抜け出てきたような美人だった。

スレンダーな足を組んで、椅子にすわり、細い指先にタバコを挟んでいた。
メントールの煙が、鼻をくすぐる。
ロイドたちを見た女は、タバコを消して、立ち上がった。
「ナタリー。ロイド隊長を、お連れした」
サカタが、女に言う。すでに面識が、あるようだ。
女は、サッと背筋を伸ばして、敬礼した。
「はじめまして。わたしはナタリー・ブレイクウッド。〝キャニオンクロウ〟で、あなたの副官を務めさせていただくことになりました。よろしくお願いします」
「俺は……」
ロイドは、口ごもった。
すでに自分が、引き受けたことになっているらしい。
「キースとジョイナスは？」
サカタが、ナタリーに、尋ねた。
「緊急の要請があって、先に現場に向かったわ」
「何だって、結成と同時に、出撃かい？」
「事態は、切迫してるのよ。のんびりしている暇はないわ。現在、ＯＣＵが制圧権を握っているのは、ここバリンデンとニューミルガン、メナサの三都市しかないの」

ナタリーは、毅然して言った。
美貌に似合わず、根っから軍人教育を施されている。
そんな様子だ。
「そんなに旗色が、悪いのか」
サカタが、顔色を曇らせた。
「しかもさっき、OCUの輸送トラックがメナサからニューミルガンに物資を輸送中に、襲われたって無線が入って、キースたちが出動したの」
奥に通じる扉が、開いた。
オルソンが、姿をあらわす。
「事態は、説明したか？」
ナタリーに訊く。
「はい。大佐」
ナタリーは、敬礼した。
「よし、ならばさっそく作戦行動に移ってくれ。飛行場で輸送機が待機している」
「ま、待ってくれ。俺はまだ……」
ロイドが、言った。
ナタリーとサカタの視線が集まる。

オルソンが、ロイドに近づいた。
ほかの二人に聞こえないように、つぶやいた。
「部下は、ここにいるナタリーとサカタ。それに現場に向かったキースとジョイナスの四人だ。部隊の権限は、お前にある。四人は、お前のコマとして使え。また今回の救出を無事遂行すれば、契約金として、千ハフマンドル支給する」
満員の闘技場で勝利しても、五十ハフフマンドル稼ぐのが精一杯だ。
「この任務の後で、続けるか辞めるか、決めればいい。契約金を手にしてからでも、遅くはないはずだ」
ロイドは、オルソンを見つめた。
例によって唇に、謎めいた微笑を浮かべている。
ロイドは、オルソンに答えるかわりに、サカタを見た。
「出発だ」
「はい、ロイド隊長！」
サカタとナタリーは、同時に筋を伸ばし敬礼した。
「ヴァンツァーは何を使う？　武器は？　敵の状況は？」
ロイドは歩きながら、質問をあびせた。
一つ一つ的確な返答が、ナタリーの口から返ってきた。

いつの間にか、二日酔いの頭痛は、消えていた。
ロイドの全身を、凍りつくような緊張感がつつむ。
一年ぶりに味わう、独特の緊張感だ。

4

「まいったな。囲まれちまった。どうするＪＪ」
キースが、無線につぶやく。
「おまえが退屈だからって、前進したのが悪い」
ジョイナス――通称〝ＪＪ〟が、返答した。
「何言ってやがる。敵を全滅させて、賞金を山分けだって言ったのは、お前だろうが」
「仕送りのために、少しでも稼ぎたいと言っただけだ」
「てめえってヤツは」
二人のヴァンツァーは、八機ものＵＳＮのヴァンツァーに、取り囲まれている。
状況的には、絶対不利だ。
しかし。

話の内容ほど、二人は、緊迫していない。

むしろ、逆だ。

その声には、笑いが含まれている。

状況を楽しんでいるのだ。

「お前ら、おとなしく捕虜になった方が、身のためだぜ」

敵のコマンダーから、無線が入った。

キースとＪＪは、同時に吹き出した。

「おい、どうする？」

キースが、腹を抱えて、笑っている。

「怖いヤツだね。おれは、こうする！」

ＪＪの銀色に輝くヴァンツァーが、動いた。

舞った。

巨大なヴァンツァーが、蝶の舞うがごとく、移動していく。

アフリカン特有のバネを持つＪＪだけにできる戦術だった。

「し、信じられない。こんなことが……」

絶句したコマンダーの眼前に、ＪＪがしなやかに舞い降りた。

着地する寸前。

腕が、炸裂した。
レフトアームのグレネード、〝サンダーボルト〟が、硝煙を噴いた。
JJが、音もなく着地したとき。
コマンダーのボディには、胸から背中にかけて、ぽっかり穴があいていた。
一撃で、コマンダーは、絶命していた。
「即死か。あいかわらず、面白みのねえ戦い方だ。オレだったら、こうする」
緑色のキースのヴァンツァーが、身をかがめた。
地を張った。
火花を散らしながら、敵ヴァンツァーの間を、走り抜ける。
ネズミ花火のようだ。
「と、こんなもんだ」
動きを止めて、キースがつぶやく。
立ち尽くす敵ヴァンツァーの両アームが、すべて破壊されている。
右アームにもった打撃用ウエポン、〝F―1ロングトンファ〟で、叩き落としたのだ。
それでいて、レッグとボディには、傷ひとつあたえていない。だが、武器を装備した両アームを失っては、反撃不能だ。
「た、退却！」

敵ヴァンツァーが、脱兎のごとく、駆けだす。
「おっと、そうはさせねえ」
キースは、楽しそうに、つぶやく。
左アームが連射――
マシンガン、〝ダークホッグ〟だ。
七機のヴァンツァーのレッグが、完璧に破壊された。
それでいて全機とも、ボディはまったく無傷だ。
「五秒もかかっちまった。一機あたり〇・五秒を切りたかった」
時計を確認して、キースは舌打ちした。
「こ、降伏する。ヴァンツァーを下りるから、攻撃するな」
敵から、無線が入った。
両アームの武器を奪われ、レッグは破壊されては、攻撃も退却もできない。
「その必要はないぜ。オレたちゃ傭兵だ。おめえたちを捕虜にしろなんて、命令は受けてねえ。受けてるのは、殺せって命令だけだ」
キースは、ニヤリと笑う。
ゆっくりと、敵ヴァンツァーに、近づく。
「な、何をする気だ……」

「何を、だって？　こうするのさ」

Ｆ―１ロングトンファを、ボディに突き刺した。

無線から、悲鳴。すぐに静寂。

ボディから、ハンドロッドを抜く。

赤い液体が、べっとりと付着している。

「クリーンヒットだ」

キースは、無邪気な笑い声をあげた。

となりのヴァンツァーに、ゆっくりと近づく。

「や、やめてくれ。こっちには、もう何も武器がないんだ」

「どうして、もっと警戒しないんだ。ドンパチやりにきたんだから、もっと武器くれえ、もってくりゃ良かっただろうが」

「ＯＣＵに、貴様ら見たいなヤツが……」

言葉が、とだえた。

キースのマシンガンの爆音。

「ＵＳＮの猿に〝貴様〟呼ばわりされる筋合いはねえ」

ゆっくりと、別のヴァンツァーに移動する。

「た、助けてくれ……」

敵は、おびえきっていた。
「おやおや、素直なヤツは大好きだ。じっくり時間をかけて、料理してやる」
ハンドロッドで、ボディを叩く。
破壊せず、変形させる程度に、力を加減しながら。
敵の悲鳴が、とどろいた。
「おお、ちゃんと生きてるな。まだ死ぬなよ」
曲がったボディが、兵士の身体を圧迫するのを、楽しんでいるのだ。
「いいかげんにしろよ。相変わらず悪趣味だな」
ＪＪが、言った。
「人の戦闘の趣味に、干渉し合うのはヤメようぜ」
「そうも言ってられん。上を見な」
ＯＣＵ陸防軍の輸送機だ。
三機のヴァンツァーが、パラシュートで落下してくる。
「チッ。ジャマが入った」
キースが、悔しそうに言う。
「賞金を五等分する気はない。悪いが、カタをつけるぞ」
ＪＪのバニッシュが、火を噴いた。

「仕方ねえ、またのお楽しみだ」
キースが、ダークホッグのトリガーを絞る。
三機が、落下してきたとき。
敵ヴァンツァーは、全機、鉄くずと化していた。
「ここまでやるなんて……。敵の降伏の無線が聞こえたぞ。キース、なぜだ？」
惨劇を見て、サカタが言った。
「しょうがねえだろ。いきがかり上、こうなっちまったんだから」
キースは、微塵も悪びれていない。
「しかし、敵意のない相手を捕獲もせず、なぶり殺しにすることはないだろう」
サカタは、激昂している。
キースは、うんざりした様子で、
「だから、軍人崩れはイヤなんだ。オレたちゃ、傭兵だぜ。死ねば何の保証もねえ。生き残るには、敵を全滅させるしかねえんだ」
「いくら傭兵だからって、戦いにはルールがある」
「ルールが、オレの命を救ってくれんのか？」
「そんなことを、言ってるんじゃない」
「二人とも、やめなさい。今は、そんな場合じゃないでしょ」



ナタリーが、真紅のヴァンツァーを操作しながら叫んだ。ロイドに向かって、
「隊長、指揮をお願いします」
だがロイドは、状況を見て、言った。
「どうやら俺たちが、来るまでもなかったようだ」
キースが、歓声をあげた。
「さすが、わかってるぜ」
クソッ……サカタの声が、無線から響く。
ナタリーは、無視して、
「とにかく作戦は、成功のようね。ちょっと手順は逆になりましたが、ロイド隊長、キース・カラベルとジョイナス・ジュリアスカ。二人とも、キャニオンクロウの隊員です」
と、紹介した。
「よろしく。JJでいい」
右手をあげて、ジョイナスが挨拶した。
キースは、素っ気なく、言った。
「傭兵は、あくまで個人部隊だ。オレに武器をむけるようなことがあったら、事のいかんに拘わらず、殺す。そのつもりでな」
「キース。隊長に向かって、その口の聞き方はなんだ!」

サカタが、詰めよる。
「サカタ、よせ。退却だ。ナタリー、迎えを呼んでくれ」
「隊長。オルソン大佐から、作戦完了後は本隊と共に、ニューミルガンへ移動するようにとの指示が出ています」
「おっと、ナタリー。今回の作戦はオレとＪＪの二人で遂行したんだ。それを抜かりなく報告してくれよ」
キースが、言う。
「どういうこと？」
「今回の報酬金は、キースと、おれで山分けさせてもらうってことさ」
ＪＪが、説明した。
「お前ら……」
サカタが、うなる。
ロイドは、サカタを黙らせ、
「わかった。俺からも、そう報告しておく」
「さすが、隊長。話がわかる。青いおぼっちゃんも、早くオトナになりな」
ブルーに輝くサカタのヴァンツァーを、キースはロングトンファでコツッと叩き、一足早く駆けだす。

すさまじい速さだ。
「こいつめッ！」
サカタが起動したとき、キースは百メートル前方にいた。

5

「隊長、キースとＪＪの二人。どう思いますか？」
サカタが、尋ねた。
呂律(ろれつ)が、まわっていない。
ニューミルガンの街中。
〝ジイラ〟という酒場のカウンターだった。
二人の前には、シーバスリーガルのボトルが、置かれている。
琥珀色の液体は、三分の一も残っていない。
サカタはピッチが、早かった。
「ねえ、隊長。あいつら狂人ですよ。特にキースのやつ。そう思いませんか？」
ロイドは、質問には答えず、逆に、

「サカタ。軍を辞めて、この一年。何をしていた？」
と、訊いた。
「何って、言われても……」
「戦ってたか？」
「いえ。ヴァンツァーに乗ったのは、一年ぶりです」
「俺はずっと、乗ってた。ずっと、戦ってた」
「戦うって、どこでです？」
ロイドは、答えずに、グラスを傾ける。
「ねえ、隊長。今の戦争を引き起こしたのは、本当におれたちなんですか？　おれたちはただ偵察に行っただけなのに、敵に待ち伏せられて、おまけにカレン……」
「サカタ！」
グラスを、カウンターに叩きつけた。
店が静まり、視線が集まる。
ロイドは、グラスにウイスキーを注ぐ。
すみません、と言って、サカタは口をつぐんだ。
すぐに客たちの視線はとぎれ、喧騒（けんそう）がもどった。
「実戦は、一年ぶり、二度目なわけだな」

ロイドが、尋ねた。
サカタは、はい、と答えた。
「実戦は、思考じゃない。行動だ。情け深さより、無情が生き残る。善悪とは別にな」
「善悪とは、別に……」
サカタは、神妙な顔で、グラスを見つめる。
「ダメなら。辞めたほうがいい」
カウンターに五ハフマンドル札を置き、ロイドは腰をあげた。
「隊長。せっかくまた会えたのに。おれは、おれは隊長に会いたくて……」
「お前の人生だ。お前が決めろ」
歩きだす。
サカタの呼ぶ声が、聞こえた。
ふり返らなかった。
酒場を出た。
夜風が、冷たかった。
少しも、酔っていなかった。

携帯電話が、鳴っている。

ロイドは、枕元の時計を見た。

〈AM 5:21〉

カーテン越しに差しこむ光も、まだそれほど強くない。

電話をとる。

オルソンだった。

「北東30マイルの場所にある山腹に、わが軍の小型輸送機が墜落した。すぐにヘリで現場へ飛び、輸送機の積み荷を回収しろ。わが国の領内だが、すでにＵＳＮの部隊が向かっているらしい」

「わかった」

ロイドは、飛び起きた。

手早く着替えをすませ、軍オフィスへ向かう。

また考える暇もなく、行動していた。

昨晩、酒場でサカタに、言ったこと。

それを自分自身の問題として、考えようと思っていた。

――ダメなら。辞めたほうがいい。

辞めたほうがいいのは、サカタではなく、自分かもしれない。

その結論を出すよりも早く、任務がロイドを追い立てる。

オフィス裏では、大型ヘリがプロペラを回転させつつ、待機していた。
すでにナタリーは、ヘリ内でヴァンツァーに搭乗している。
ロイドと前後して、キースとＪＪがヘリに乗った。
三人が、ヴァンツァーに乗りおえても、サカタが来ない。
「呼び出してから、十分もたっている。やる気があるのか、アイツは」
オルソンが、顔を歪めた。
「置いてこうぜ。日本のおぼっちゃんはよ」
欠伸(あくび)をしながら、キースが言った。
「いい考えだ。報酬金がふえる」
ＪＪが、同意する。
「どうしますか？」
ナタリーが、尋ねた。
「仕方ない。行け」
オルソンが、命令した。
「待て」
ロイドが、言った。
「時間が、ないぞ」

オルソンの口調が、険(けわ)しさをます。
「実戦については、俺が判断する。あと一分待つ」
ロイドは、断言した。
「やれやれ。これだから、元軍人は……」
キースの呆れた声。
ロイドは、無人でたたずむサカタのヴァンツァーを見た。
全体がブルーで、統一されている。
『子供のころは、親父や兄貴とよく海に釣りに行ったんですよ。青い海、青い空にかこまれて……。青色を見ると、今でもあの時のことを思い出すんです』
以前、サカタの言った言葉が、脳裏に蘇る。
「三十秒経過。いまごろＵＳＮ軍は、ＯＣＵの輸送機の積み荷を、回収中だろうな」
ＪＪが、言う。
「隊長。行きましょう」
ナタリーが、うながす。
「ロイド、時間だ！」
オルソンが、叫ぶ。
「……」

ハッチが、閉まる。
隙間が一メートルを、切った。
頭から、サカタが飛びこんできた。
「おやおや、人間ロケットを打ちこまれたぜ」
キースが、笑う。
「笑ってる場合か。報酬金五等分だぜ」
そう言うＪＪの声も、どことなく弾んでいる。
「サカタ、遅すぎるわ。何をしていたの」
ナタリーが、叫ぶ。
鞭で打ちつけるような口調だ。
サカタは、悪びれた様子もなく、
「あわてて起きたら、二日酔いでゲロッた」
と、舌を出した。
ヴァンツァーに乗りこみ、ロイドの方を見る。
目が、合った。
サカタが、笑った。
不敵に見える笑みだった。

ロイドも、笑みを返した。
頬が、強張った。
サカタは、何かを見つけた笑顔だ。
見つけないまでも、気持ちに区切りをつけている。
だから不敵にも、見える。
だが自分のは、作り笑いだ。
答えを出せないまま、ここに来た。
ロイドは、自分から顔を逸らした。
ヴァンツァー内に、身を静めた。
目を閉じて、ヘリの揺れに身を任せた。

「隊長。現場に到着しました。USN部隊が、接近しています！」
ナタリーが、報告がする。
「よし。敵に見つかる前に、回収を行う。全機発進！」
五機のヴァンツァーは、ヘリから落下した。
木々の中に、着地。
敵には、まだ発見されていない。

「おい。あんな所に、誰かいるぜ！」

キースが、墜落した輸送機の方を指さす。

輸送機のすぐ側を、オレンジ色のヴァンツァーが一機、よろけながら歩いていた。

「民間機だな。アタ～ッ、あんなとこフラついてたら、敵から丸見えだぜ」

ＪＪが、頭を抱えた。

「そこの民間機。至急後退しなさい。ここは危険よ！」

ナタリーが、無線を送った。

返答がない。

ナタリーは、緊迫した声で、くり返す。

三度、くり返したとき、

「おれは今、取材中なんだ。邪魔はよしてくれ」

と、返答があった。

「取材中って、ここは戦場よ」

「それを承知で、わざわざ日本から来たんだ」

「誰なの、あなたは？」

「今は自己紹介より、取材が先だ」

横柄な応答だ。

ナタリーは、カリカリしながら、
「名乗りなさい！」
と、叫ぶ。
相手は、渋々と、
「フレデリック・ランカスター。トキオ・タイムスの記者だ。以上！」
「敵が来るのよ。早く……」
「ムダだよ、ナタリー。あいつ、無線のスイッチを、切っちまってる」
キースが、言った。
「バカ野郎。戦争をナメやがって！」
サカタが、怒鳴る。
「隊長、どうしますか？」
「とにかく、われわれも急ごう。全機前進！」

6

「こんな特ダネを、邪魔されてたまるか」

フレデリックは、無線を切った。
懸命に、ヴァンツァーを操作する。
墜落した輸送機に、接近した。
ハフマン島へ着いて、一週間。
ニューミルガンのホテルで、明け方、何気なくトイレに立った。
眠れなくなった。何気なく、無線傍受機をつけた。
この島へ来てからの、癖だ。
それで偶然、ＯＣＵ輸送機の墜落を知った。
あわててヴァンツァーに飛び乗り、駆けつけた。
ヴァンツァーは、島に来てから買った中古品だ。
あちこちガタが来ている。動きもぎこちない。
だが、ないよりマシだ。
無線の内容から判断すると、輸送機は何者かに、撃墜されたらしい。
しかも何か、重要な荷物を、積んでいたようだ。
地図、コンパスと首っ引きで、ここまで来た。
どうやら、一番乗りだった。
「こりゃ、ひどい」

輸送機は棒を折るように、まん中からまっ二つになっていた。
生存者は、まずいないだろう。
炎上しないのが、不思議なくらいだ。
輸送機の折れたところへ、近づく。
壊れた機体がじゃまして、中には入れない。
隙間から、中を覗いた。
積み荷が、見える。
大型の木箱だ。
横に文字が、書いてある。
〝……ミサイ……ンチ……、サカ……ン……ト……〟
箱が崩れて、ところどころしか読めない。
「ちくしょう。何て書いてあるんだ」
身を乗り出す。
衝撃が、走った。
フワッ、と無重力状態。
ヴァンツァーが、浮いた。
地面に、叩きつけられる。

顔を上げる。
ＵＳＮ軍のヴァンツァーだ。
二機、三機……八機もいる。
先頭のヴァンツァーのバズーカから、煙が上がっている。
どうやら、それに撃たれたらしい。
「冗談じゃないよ」
フレデリックは、あわてて無線を入れた。
「おい、聞こえるか。攻撃するな。おれは民間人だ」
「民間人？　何をしてる？」
ＵＳＮ軍のコマンダーから、応答があった。
「取材だ。新聞記者なんだ。敵意はない。だから、攻撃はするな」
フレデリックは、両手を大きく上げた。
だが、ＵＳＮ軍の兵士が、叫んだ。
「隊長。あいつは敵です。後ろから、仲間が迫ってきています」
「おのれ、騙したな。攻撃開始！」
ＵＳＮのヴァンツァーが、いっせいに戦闘状態に入った。
「ち、違う。おれは、あいつらとは無関係だ。止せ！」

しかしＵＳＮ軍の銃器は、しっかりとフレデリックにも、向けられている。
「クソッ。話が通じやしねえ。しかし、ここで死ぬわけにはいかない……」
フレデリックは、ＵＳＮに背中を向け、駆けだした。
キャニオンクロウに、接近。
「さっきは、悪かった。救援頼む」
無線に、向かって、叫んだ。

「隊長、どうしますか？」
ナタリーが、尋ねる。
「民間人を、見殺しにはできん。援護しろ」
「しかし、あの民間人。敵のスパイでは……」
「たしかに、ちょっと臭うな」
キースも、疑った。
「いまどき、あんな古臭いヴァンツァーに、乗ってるのも怪しいぜ」
ＪＪも、同意した。
サカタが、緊迫した声で、
「ＵＳＮ軍が、民間機を狙い撃ちしてます。あっ、両アームが吹っ飛んだ」

「かわいそうに。たった一人で、包囲されてるぜ」
キースは、事態を楽しんでいるような口調だった。
ロイドは、民間機に向けて、叫んだ。
「地面に身を伏せて、攻撃を避けろ!」
「わ、わかった」
フレデリックのヴァンツァーが、前のめりに、地に伏した。
ロイドは、キャニオンクロウの面々に向かって、叫んだ。
「全機、戦闘態勢!!」
「ラジャー!」
待ってましたとばかり、キースのヴァンツァーが、地を這った。
「おれは三機はいただくぜ。何機、倒したか、歩合制にしてほしいもんだ」
JJが、宙に舞った。
二機が動きはじめて、一分としないうちに、敵ヴァンツァーの半数が壊滅していた。
的確に、一撃で、ボディを破壊するJJ。
キースは例によって、アームとレッグを破壊。
おびえる相手の反応を、じっくり楽しみながら、とどめを刺す。
「なんて奴らだ。これじゃ、おれたちの出る幕がない」

　サカタが、唖然として、言った。
「これが、傭兵の戦いだ。殺した相手の数だけ、金になる」
　ロイドは、敵ミサイラーの打ちこんできたランチャーを、ミサイルで迎撃。
　駆けよりざま、ツィーゲライフルで、仕留める。
「し、信じられん、ＯＣＵがこんなに強いとは」
　敵のコマンダーの驚愕が、無線越しに聞こえた。
「すでにキースにやられて、ボディしか残っていない。
「おっと、冥土のみやげだ。オレたちゃ、ＯＣＵの正規軍じゃねえ」
　キースが、ニヤけた声で言った。
「そ、それじゃあ、何者だ!?」
「キャニオンクロウ。ＯＣＵの傭兵部隊だ。先に冥土へ行ったお友だちにも、ちゃんと教えといてくれよ」
　そう言うなり、右アームのＦ—１ロングトンファが、コマンダーのボディを貫く。
「キャ、キャニオンクロウか……」
　敵の無線が、とだえた。
「隊長。敵機を全て、撃破しました」
　ナタリーが、報告する。

「USN正規軍のヴァンツァー八機相手に、三分かかっていない。信じられない……」
サカタが、驚きの声をあげた。
「驚くな、おぼっちゃん。体力の無駄遣いは、腹が減るだけだからな」
JJが、ハミングを口ずさむ。
笑い声で同意しながら、キースが言った。
「そういえば、あのバカ野郎は、生きているのか？　お～い、バカものーッ！」
返事がない。
「やっぱり、死ななきゃ直らねえって、わけか」
「ん、んんんン！」
大げさな咳払いに続いて、フレデリックが言った。
「バカバカというバカは、己のバカを知らぬバカ」
「あれ、幽霊か!?」
「残念ながら、生きてる」
「無事か？」
サカタが、訊く。
フレデリックは、少しも悪びれずに、
「おかげで、凄い戦闘をスクープできた」

と、強がった。
「あなた本当に、トキオ・タイムスの記者なの？」
ナタリーが、尋ねた。
「ウソなんかつくものか」
「トキオ・タイムスって言やぁ、販売部数世界一の日本の新聞だろ」
「日本に本社をおく、世界一の新聞と、言ってほしいね」
「そんな一流新聞社に、おめえみてえなオマヌケさんもいるわけだ」
キースが、からかう。
フレデリックは、ひるまない。
「これくらいの行動力がないと、スクープなんてとれないからな」
「あきれたわ。もう少しで、死ぬとこだったのに」
ナタリーが、言った。
「ひえ～ッ、ピカピカのロケットランチャーだぜ」
ＪＪが声をあげた。
いつの間にか、墜落機の中に、進んでいる。
「そうか。ミサイルランチャーと、書いてあったのか。どこの製品か、わかるか？」

フレデリックが、ぎこちない動きで、懸命に駆けつけた。
「こりゃあ、サカタインダストリイ製だ」
「製品名は？」
「知らないな。見たこともない」
JJは首を傾けた。
「サカタインダストリイか。最近、ヤケに武器をばらまいてるな」
キースが、言った。
すぐに、フレデリックが、口を挟む。
「そんなにサカタインダストリイの製品が、流れこんでいるのか？」
「武器屋に行きゃ、腐るほどある」
「評判は？」
「飛び抜けてイイやつもあるが、とんでもねえスカもある。オレは使わねえ」
「なぜ？」
「いざ敵と向かって、その武器がスカだとわかったら、おめえ以上のバカになる」
フレデリックは、興味深そうに、
「しかし、サカタインダストリイ製の最新ミサイルランチャーを、両軍で奪い合っていたってわけか……」

と、つぶやく。
「あなた。これは軍事上の機密事項です。勝手な真似は、許されません」
ナタリーが、叱りつけた。
「おっと、報道の自由は、認めてもらいたいね」
「そもそも民間人が、戦闘の邪魔をしたら、罪になるのを知らないの？」
「おれだって、命がけだ。命がけで、取材している。……譲れないね」
「まったく、何て人なの。隊長……」
ナタリーが、ロイドに判断を仰ぐ。
成り行きを黙ってみていたロイドが、口を開いた。
「キース、ＪＪ、サカタ。積み荷を回収しろ。ナタリー、その男をメナサの軍オフィスまで連行する」
「メナサへ、いくのか!?」
キースが、訊いた。
「出撃時に、大佐から指令を受けた。積み荷はメナサに運べとな」
「メナサには、ＯＣＵの軍本部があるからな」
「しかし、まわりはどっちゃりＵＳＮに、囲まれてるってウワサだぜ」
ＪＪが言う。

キースは、うれしそうに、
「だから、オレたちの出番があるんだろ」
「違いない。戦火のあるところに、金（カネ）が埋まってるってね」
「ムダロは、それくらいにして、作業にかかれ」
「オーケー、ボス！」
キースとＪＪが、壊れた輸送機に入る。
ナタリーは、捕獲用ロープを取り出した。
フレデリックのヴァンツァーの足に巻きつける。
「ま、待ってくれ。連行なんて……」
「あなたは、罪を犯したのよ。裁きを受けるのは、当然でしょ」
「だから、何度も言うように、おれは取材を……」
「言いたいことがあったら、軍オフィスでしゃべって。不満なら、弁護士を呼んだっていいのよ」
「！　……弁護士、弁護士って、女はすぐに、それだ……」
「どういうこと？」
「いや、こっちの話だ。あっ、引っ張るな。これじゃあ、動きがとれない」
「心配しないで、わたしが連れていきます」

ナタリーは、軽々とフレデリックのヴァンツァーを担ぎ上げた。
事後の確認のため、ロイドは、あたりを見回す。
サカタは、無言で、立ち尽くしていた。
「サカタ。どうした？」
返答がない。
「サカタ！」
ふたたびロイドが、呼びかけて、やっと返事をした。
「は、はい。何ですか、隊長」
「怪我でもしたのか？」
「いいえ。ただ、ちょっと……」
と、言葉をにごす。
「無事なら、キースとＪＪを手伝え」
「わかりました」
サカタは、輸送機へ進む。
ちょうどキースとＪＪが、積み荷を降ろすところだった。
「すげえな。こんなのまともに食らったら、ひとたまりもねえ」
「しかしメーカーがメーカーだけに、見かけ倒しってこともある」

「ありうる」
積み荷を見たサカタは、ふたたび足をとめた。
「おい、おぼっちゃん。ぼやぼやしてないで、ヘルプヘルプ！」
キースが、サカタに言う。
突然、サカタが、怒鳴った。
「おれは、おぼっちゃんじゃない！」
「……！」
「……？」
唖然とするJJとキースを尻目に、一人黙々と任務にあたる。

7

ハフマン島の中央より、やや南西に位置する港町・メナサ。
その街中だった。
バー〝ミストラル〟の店内は、人でごった返していた。
片隅。

キャニオンクロウの五人が、テーブルを囲んでいた。
会話が、弾んでいるわけではない。
キースとJJは、タバコをふかし、酒を食らいながら、賭けオセロに夢中だ。
「オセロとは、良く言ったもんだ」
JJが、白いコマを黒に、ひっくり返しながら言った。
「どういう意味だ？」
すぐにキースが、それを白に戻す。
「語源を知ってるか？」
「知らねえ」
「シェークスピアだ」
JJが、言った。
キースは、笑いながら、
「おまえの口から、シェークスピアなんて、名前を聞くとはな。あんがい、インテリじゃねえか」
しかし、JJは、笑わない。
「どんな話だ？」
キースは、訊いた。

ＪＪは、まじめな顔で答えた。
「黒人の将軍が、白人に騙される話だ」
「……白と黒のだましあいってわけか」
キースが、なげやりに、コマを置く。
ＪＪが、コーナーを取り、盤上は黒いコマで染まった。
「シェークスピアは知らねえが、二十一世紀じゃあ、将軍の勝ちだ」
キースは、グラスをつかみ、ウイスキーに喉をならした。
ＪＪは、無表情で、賭け金を胸ポケットにおさめた。
気だるい沈黙が、流れた。
「ここにいたのか」
五人が、顔を上げた。
フレデリックだった。
「おやおや。罪人が牢から、トンズラしてきたぜ」
キースが、言った。
「牢になんか、入れられるものか。逆に報道の自由を主張して、ＯＣＵ軍から今後の取材許可をいただいた」
となりのテーブルから、椅子を取りよせ、腰を下ろす。

「報道の自由ね。何を好きこのんで、インテリがこんなところに……」
JJが、皮肉を言う。
フレデリックは、曖昧に微笑み、ロイドに尋ねた。
「君が、隊長のロイド・クライブだね？」
ロイドは、無言で目を閉じた。
「頼みがある。君たちと行動を、共にしたいんだ」
「ちょっと、あなた。いいかげんにしなさい」
ナタリーは、メントールのタバコを、トレイに押しつけた。
「ここハフマン島は、戦時中なのよ。しかもわたしたち傭兵部隊は、一番危険な任務を任されるんだから」
フレデリックは、ナタリーを無視して、ロイドに、
「頼む、おれはこの戦争の真相を追求したいんだ」
「何のために？」
ロイドが、尋ねた。
「何のためって……」
フレデリックは、一瞬口ごもってから、
「世界のため。そして……」

「そして？」
「……とにかく、足手まといにはならない。だから従軍を許可してくれ」
「任務中、危機に陥っても、救出できない。見捨てることもある」
「構わない。ヴァンツァーの操縦には、自信がある」
「あれでね」
ＪＪは、両手を広げ、首をふった。
「あのときは、ヴァンツァーがボロだったんだ。今、セットアップに出してきた。レッグは高速移動が可能なヤツに、アームも新調してきた」
「それで、足手まといにならないって訳か」
ＪＪが、笑った。
フレデリックは、強気に言い返す。
「君たちは戦うのが商売だから、武器に金をつかう。おれは報道が商売だから、移動性に金をつかう。わかりやすい方程式さ」
ＪＪとキースは、顔を見合わせた。
――レッグを変えた程度で、逃げられるほど甘くない。
二人の目に、書いてある。
だが、二人とも口に出さなかった。

「お願いだ。オルソン大佐の許可も取ってある」
「信じられないわ。そんなことを、オルソン大佐が、許可するなんて……」
ナタリーは、首をふる。
「好きにしろ」
ロイドが、言った。
「ありがとう。それじゃあ、次の任務が決まったら連絡してくれ。おれは、ホテルで、今日の事件を記事にしてくる」
フレデリックは早足で、店を出ていった。
「いいんですか？」
ナタリーが、不平そうに言う。
ロイドは聞こえないかのように、無言でグラスを口に運んだ。
「ロイド隊……」
ナタリーは、言葉を止めた。タバコに手を伸ばす。
空だ。
握りつぶす。
「ほら」
キースは、胸ポケットから、タバコを取り出した。ナタリーに、勧める。

正規に販売されている銘柄ではない。

ヤミタバコだ。

ニコチン、タールとも、市販品とは比べ物にならないほど強烈なヤツだ。

ナタリーも、それは知っている。

苦笑して、遠慮した。

キースは、自分でくわえ、

「明日の予定は？」

と、ナタリーに、尋ねる。

「予定なんて……」

「何して遊ぶの？　って意味」

「考えてないわ」

「なら、つきあわねえか。車を小一時間ほど飛ばしたところに、ムードのいい秘密スポットがあるんだ」

「ダメよ」

ナタリーは、即座に言った。

キースは、ムッとして、

「何で!?」

「オルソン大佐から、厳命されたでしょ。命令が下るまで、メナサの町から出るなって」
「あ、そういう意味。それなら街中で、楽しもうぜ。ふたりっきりで」
ナタリーは、食い下がるキースを無視して、ロイドに尋ねた。
「ロイド。あなたは、何か予定でも？」
隊長と呼ばず、名前を呼んだ。
「いいや」
「じゃあ、案内しますわ。わたし以前、この町にいたことがあるんです。だから」
「せっかくだが……」
ロイドは、断る。
「ケッ。もう一勝負やるか？」
キースは、ＪＪに向かって、言った。
「もういい。金儲けは、戦場でする主義だ」
「おい、おぼっちゃん。黙って飲んでねえで、一勝負やらねえか？」
サカタに、声をかけた。
サカタは、答えない。無言で、グラスを口に運ぶ。
「何だよ。今日は、えらくブルーだな。男だから、メンスってわけでもねえだろうに」
キースが、からかう。

それでもサカタは、無反応だ。
思い詰めたような顔。
テーブルを見つめ、グラスを持った右手だけを、上下に動かしている。
「ケッ、どいつもこいつも、ノリが悪いぜ」
キースは、テーブルに両足を投げ出した。椅子にもたれて、タバコをふかす。
気だるく、そして決して心地よくない沈黙……。
女が、テーブルに、近づいてきた。
さっきから、こちらに視線を走らせていた女だ。
ロイドの前に立って、口を開いた。
「ねえ。あんた、ロイドじゃない？」
黒髪、切れ長の目。チャイニーズらしい。
東洋人（オリエンタル）独特の美人だった。
ロイドより早く、ナタリーが返事をした。
「あなたは？」
黒髪の女は、答えずに、ロイドを見つめ、
「ロイド・クライブでしょ。写真で見たことがあるもの」
「写真って、どこで彼の写真を？」

ナタリーが、尋ねた。
答えない。
切れ長の目は、ロイドにだけ注がれている。視界に、ナタリーは、入っていない。
「なぜ、俺を知っている？」
ロイドは、女を見上げた。
目が、合った。
女は確信を得たように、
「やっぱり。ロイドなのね。カレンの持ってた写真のとおりだもの」
ロイドの表情が、一変した。
とっさに立ち上がり、
「カレンを、知っているのか？」
と、言った。叫んだ、といった方が近い。
「え、ええ」
「どこで、どこで会った――！」
「どこって……」
ロイドの剣幕（けんまく）に、驚いた様子だ。
女は圧倒されたように、目を見開きながら、

「同じ病院に、入院してて、隣のベッドだったの」

「いつ？」

「二ヵ月ほど前よ。わたし、訳ありでこの島のアチコチを回ってるんだけど、ドジって足を折ったの。そのときに」

「カレン……、カレンは……」

「元気だったわ。『どこが悪いの？』って聞いても、教えてくれなかったけど、見た目はふつうとかわらなかった。ちょっとボンヤリしていたけど、きっと薬のせいだと思う」

「カレンが、カレンが、生きている……」

ぼうぜんと、つぶやく。

隊員たちの前で、それほど当惑した姿を見せるのは、はじめてだ。

ナタリーも、キースやＪＪさえも、声をかけられない。

やがて。

ロイドは、唐突に、立ち上がった。

弾みで、椅子が、倒れる。

女の両腕をつかみ、

「今でも、カレンは、そこに？」

と、詰めよった。

「さ……さあ。わたし、一週間くらいで、抜け出しちゃったから……」
「どこだ！　どこにあるんだ、その病院は？」
「グレイロックだよ」
グレイロックは、メナサの三百キロほど北に位置する都市である。
「病院の名は？」
「何だったっけ……場所は、覚えてるんだけど」
「頼む。思い出してくれ」
「隊長……」
ナタリーが、目を見開いた。
「わかった。連れてって、あげるよ。わたしも、調べたいことがあるし」
女は、頷いた。
「すまない。君は……？」
「わたしはヤン。ヤン・メイファァ」
女は、右手を差し出す。
「ありがとう、ヤン」
ロイドは、その手を握りかえして、礼を言った。

8

湿り気を帯びた空気が、ひんやりと冷たい。
西の空で、最後まで輝いていた星が、明るさにまぎれた。
陽はまだ、顔を出していない。
早朝だ。
メナサのメインストリートに、人影はない。
割れた酒瓶や嘔吐のあとが、昨晩の喧騒を想像させる。
起きやらない街に、ひとつの靴音が響いた。
両手をジャケットに収め、背中を丸めた男が歩いてくる。
ロイドだ。
一睡もしていない。
できなかった。
まんじりともせず、密かに部屋を出てきた。
表情が、険しい。

だが瞳に、一点の灯火があった。
昨日まで、見られなかった輝きだ。
かすかだが、絶対に消したくはない、希望の灯火である。
「モーニン！」
脇から、女の声。
ヤンだ。
「すまない。朝早くから」
ロイドが、頭を下げる。
「気にしないで」
ヤンは、笑みを浮かべた。
ロイドと並んで、歩きだした。
「隊長」
サカタだった。
「よければ、お供させてください」
「これは、任務じゃない」
ロイドは、歩きつづける。
サカタが、前に立ちふさがった。

「隊長、お忘れですか。カレンはあなたのフィアンセだっただけでなく、おれに取っても戦友だったことを」
「サカタ……」
ロイドの目が、震えた。
サカタの唇が、震えた。
ロイドに、背中を向ける。
先頭を切って、歩きだした。
「あ～あ」
大きな欠伸。
ダストボックスの影に、キースがしゃがんでいる。
「昨日、おめえらが帰ったあと、いい女に誘われてよ。あ～腰がイテえ」
立ち上がり、顔を歪めて、背中を伸ばす。
「本当だ。傭兵部隊隊長の密かな出撃。これはネタになる」
フレデリックだ。
「なあ。ガセネタじゃないだろ」
ＪＪが言った。
右手を差し出す。

フレデリックは、その手にハフマンドル札を、握らせた。
「こいつ、とことん金に、執着しやがって」
キースが、JJの腕をついた。
「おまえだって、金の匂いがするから、早起きしたんだろうが」
「ケッ。オレは、おめえと違って、金だけに執着してねえ」
キースが、言った。
すぐにフレデリックが、
「どういうことだ。金だけじゃないって?」
と、尋ねる。
キースは、フレデリックを睨む。
険しい目だ。
思わずフレデリックが、身をすくませるほどだった。
それを確認したキースは、
「血さ。血の匂いがする」
ニヤリと、唇を歪めて、JJといっしょに歩きだした。
「血の匂いか……」
フレデリックは、ネクタイを緩めて、ため息をついた。

早朝の街を、五人の男と一人の女が、歩く。
角を曲がると、もう一人の女が、立っていた。
「これは、命令違反よ」
ナタリーが、言った。
ロイドは、無言で、その脇を通りすぎた。
「ちょ、ちょっと、ロイド！」
「二人きりで、街案内をしてくれるってなら、オレは残るぜ？」
キースが、立ち止まった。
ナタリーは、キースを見た。
愛らしく唇から、ため息をつく。
ロイドたちを追って、歩きだした。
「あ～あ、腰がイテえ……」
キースは、欠伸をしながら、しんがりを歩く。

9

「街が、襲われてる！」
ヤンが、叫んだ。
グレイロックの街から、火の気が上がっている。
「ＵＳＮ軍よ。気をつけて！」
ナタリーが、緊張した声で言う。
「キャッホー、金だ」
ＪＪのヴァンツァーが、飛躍した。
ビルの合間を、巨大な一匹のムササビのように、舞う。
敵を求めて――。
ビルを破壊していた、敵アタッカーの前に、着地した。
「な、何だ貴様は⁉」
無線から、敵アタッカーの動揺した声がする。
答えるより先。

ＪＪの左アームで、サンダーボルトが、火を噴いた。
一撃で、敵アタッカーのボディが、粉砕した。
ロイドは、大通りに出た。
民間のヴァンツァーが、一機。
逃げまどう人々の楯になっている。
ＵＳＮ軍の容赦ない攻撃を浴びながら。
「どうした、何があったんだ」
ロイドは、尋ねた。
「オー、ジーザス。いきなりＵＳＮの野蛮人どもが、街を襲い、市民に無差別攻撃をしてきたんです」
「何だって！」
ロイドの頭に、不安がよぎる。
「あなたは、誰？」
ナタリーが、尋ねた。
「わたしはポール・Ｃ・グリバー。牧師です。それより、どうか、援護してください！」
「しかし、わたしたちは……」

ナタリーは、戸惑う。
かわりに、ロイドが叫んだ。
「わかった」
疾走する。
ツィーゲライフルが、火を吹く。
ミサイル発射準備をしていた敵ミサイラーのボディが、四散した。
「隊長、これは命令違反です。オルソン大佐に知られたら、まずいことになります！」
ナタリーが、言った。
ロイドは、無視した。
「サカタ、民間ヴァンツァーを援護しろ」
「はい！」
サカタが、臨戦体勢に入った。
「そ、そんな……。キース、お願い、皆を止めて」
ナタリーが、すがるように、言った。
「ムダだぜ、ナタリー。今のオレは、女よりすてきなご馳走を、目の前にしてるんだ」
そう言うなり、血に飢えた狼のようにビルの間を滑走。
敵のアタッカーに、迫る。

〝F―2ロングトンファ〟を構える。
瞬時に両アームだけを、破壊した。
アタッカーは、あわてて、背中を向けた。
すぐに回りこみ、レッグを殴り壊す。
無事なのは、ボディだけだ。
「わ、わかった。おれの負けだ」
敵アタッカーが、降伏した。
「そんなこと言うなよ。まだはじまったばかりだぜ。こちとら、目をつけた女に無視されっぱなしなもんで、ちいとばかり、虫の居所が悪くてね。楽しませてもらうぜ」
ねちっこい口調で言い、なぶるような目で、アタッカーを見回す。

「ドストエフスキー……。世界一の文豪だ」
恍惚（こうこつ）とした声で、つぶやく。
自機ヴァンツァーの内部。
ドリスコルは『罪と罰』のページをめくっていた。
「大尉。敵の増援が、現れました！」
突然、無線が叫んだ。

しかし、ドリスコルは、平然としている。
本に目を落としたまま、
「予定通り、マテリアルの荷物を、輸送車に積め」
「しかし、手ごわい奴らで、どんどんこちらに……」
端正な唇が、歪んだ。
不快そうに、本から顔を上げ、
「同じことを、二度言わせる気か？」
押し殺した声だった。
有無をも言わせぬ、冷たさを持っている。
「わ……わかりました」
「三分以内に、すませ」
「は、はい！」
無線は、切れた。
爆音、振動が、ヴァンツァー越しに伝わってくる。
静かに本に、目を落とす。
すぐに、険しさは消えた。
文字を追う目に、陶酔の色が漂う。

四分後。
無線がなった。
「大尉、積み込み完了しました」
息のあがった、取り乱した声だった。
ドリスコルは、丁寧に本を閉じた。
「一分遅れたな」
「しかし、これでも精一杯……」
「処分は、後で決める。輸送機、至急退却しろ」
「は、はい」
ドリスコルは、モニターを見た。
USN軍のヴァンツァーが、ことごとくやられている。
しかし表情に、取り乱したところは見られない。
部下の死など、何とも思っていないかのようだ。
むしろ、相手のヴァンツァーを見て、
「あいつは、ラーカス事件のときの……たしか、ロイド……。そういえば、〝キャニオンクロウ〟とかいう、傭兵部隊になったと、うわさを聞いた……」
ロイドが、ドリスコル指揮下のヴァンツァーを、破壊。



「ほう。なかなかの実力だ」
唇に笑みさえ、浮かんでいる。
部下の死を、楽しむかのように。
モニターに写る負け戦を見ながら、
「輸送機、どこだ？」
と、無線に向かって、訊く。
「ハッ、街を抜けました。もうすぐ本隊と合流します」
「よし。退却するとしよう」
ヴァンツァーのバズーカを、眼前の建物に向けた。
火を噴く。
建物が、炎上する。
「キャニオンクロウか。悪趣味な名前だ」
ぽつりとつぶやき、移動を、開始した。
戦闘が続く方向に、背中を向けて。
苦戦する部下たちを、援護しようともせず。
それまで読んでいた『罪と罰』の主人公、ラスコーリニコフのように。
冷たい態度で、見捨ててゆく。

「ヤン、病院はどこだ？」
「あの奥の建物が、そうだよ！」
敵ヴァンツァーをなぎ倒し、ロイドが病院へたどり着いたとき。
病院は、炎に包まれていた。
ツィーゲライフを、放り捨てる。
「カレン、カレン！」
炎の中に、飛びこむ。
「ロイド！　危なすぎるよ。それに、もう、みんな燃えちゃってる……」
ヤンの声を、無視して。
十分後。
病院の前には、ヤン以外にキャニオンクロウのヴァンツァーも集まっていた。
敵は全滅している。
「隊長は？」
ナタリーが、訊く。
ヤンは、病院を指さした。
「そ、そんな！」
炎はすでに、峠を越えていた。

燃え落ちた建物から、ロイドが、姿を現した。
ヴァンツァーは、熱を浴びたアメ細工みたいだった。
すぐに膝をついて、動きをとめた。
サカタが、駆けよる。
「隊長。ロイド隊長！」
必死に、呼びかけた。
「ダメだ……何も、ない……わからな……」
ロイドの声が、とぎれた。
ヴァンツァーが、倒れる。
「隊長。しっかりしてください！」
サカタのヴァンツァーに抱えられて、動きを止めた。
「オー・ジーザス。こんなことが、許されていいのでしょうか。神は何を、ごらんになっていたのでしょうか」
一人で市民救出に当たっていた、ポールのヴァンツァーだった。
ゆっくりと、重い足取りで、近づいてくる。
その腕には、幼い子供たちの遺体が、抱かれていた。

１０

「なんでもいい。彼女と……カレンと話したことを、教えてくれないか？」
「なに？」
「ヤン」
ロイドが、言った。
ヤンは、ロイドを見た。
ロイドは、目を合わせない。ヤンに、背中を、向けている。
ビルの屋上。
広がるグレイロックの街を、見下ろしている。
ＵＳＮ軍の攻撃の傷痕が、生々しい。
街の復興には、しばらく時間が、かかるだろう。
ヤンは、ロイドに並んだ。横顔を見る。
無言の横顔から、熱い気持ちが、伝わってくる。
カレンに対する……。

「ああ、いいよ」
手すりに、寄りかかる。
「カレンが話すのは、いつもあんたのことだった」
「俺のこと!?」
ロイドの横顔が、震えた。
「うん。彼女は軍に入ったことは、後悔していたけど……」
たしかにカレンは、軍に入隊したことを、後悔していた。
ロイドも、耳にしたことがある。
そう。あのときも。
カレンは、言っていたっけ……。
ロイドは、ヤンの話を聞きながら、心はカレンとの思い出に飛んでいた。

「わたし、軍に入ったこと、後悔している」
カレンは、言った。
「どうして、自分で選んだ道だろ?」
ロイドが、尋ねる。
「たしかに、国を守ることは大切だわ。

でもこの島で、こうして敵とにらみ合うことは、何かおかしい。そんな気がするの。そうは思わない？」

「思わないことはないが……」

「でも、いいこともあったわ。友だちもたくさん出来たし、それにあなたにも会えた」

「カレン」

カレンは、まぶしい笑顔を、ロイドに向けた。

「ねえ。結婚したら、この島に家を建てましょう」

「でも、この島の緊張関係が、いつ終わるか……」

「だいじょうぶよ。わたし、この島が好き。ここには二十年前の戦争の傷を、消し去ってしまうほどの生命力があるもの」

「カレン……」

心の中のカレンは、輝いていた。

以前と同じように。以前、以上に。

「カレン……」

ロイドが、つぶやいた。

孤独な目で、街をながめている。

「あ〜あ！」
ヤンは、大きく伸びをした。
腕時計に、目をやる。
「もうこんな時間。わたし、ちょっと用事をすませてくる」
「用事？」
「ええ。この街に、知り合いの情報屋がいるの。
ハンスっていう、まだ十八くらいのガキなんだけど。十二歳でマサチューセッツ工科大学に入学した天才」
「……」
「でも在学中に、軍の中枢コンピュータに侵入して、プログラムを全部破壊して、退学になったって、困ったヤツなの。それで、ＵＳＮを追われて、ハフマン島に逃れてきているの。彼にちょっと、用があるから。先に行くね」
「何かトラブルでも、あるのか？」
「トラブルってほどじゃないけど……まあ、個人的問題」
「おれにできることがあったら、何でも言ってくれ」
「ロイドったら、大げさなんだから」
「いや本気だ。君には言葉で言いあらわせないほど、感謝している」

「ありがと。そのときは、よろしく！　……じゃあ、また」
ヤンは、つとめて明るく振る舞い、その場を離れた。
ロイドに、見えなくなったところで。
大きく、息をついた。
階段のところへ、歩く。
そこに人影が——。
「あなたは！」
ナタリーだった。
「あんなにも、愛されてみたいものだわ」
ナタリーは、ポツリと、言った。
独り言のように。
「あなた……」
ナタリーは、話題をかえた。
「軍オフィスから、連絡が入って。ロイドに教えにきたの」
「勝手に出かけてきちゃったから、大目玉なんじゃない？」
ヤンは、首をすくませる。
ナタリーは、咳払いした。

オルソンの口真似で、おどけたように話す。

「本来なら軍法会議ものだが、この部隊の最高責任者であるブレイクウッド将軍から、寛大な処置をとるよう命令された。だから、今回は見逃してやるが、今後一切の命令違反は認めないから覚悟しておけ！」

ナタリーが、おどけることなど、滅多にない。

ヤンは、平然としていた。

キャニオンクロウの面々が聞いたら、何度も目をこすり、耳をほじったことだろう。

「よかったね。軍が、おめこぼししてくれるなんて、まずないもの。でも勝手なことしたのに、将軍に温情をかけられるなんて、ロイドって、すごいのね」

ヤンの言葉を、ナタリーは複雑な表情で聞く。

「早く、知らせてあげたら」

ヤンは、ナタリーを促した。

ナタリーは、ええ……と、つぶやく。

だが、ロイドの方に、歩きださない。

「やめておくわ。あの人の気持ちは、今、ここにはないみたいだし……」

ヤンを見て、微笑んだ。

階段を引き返し、下りていく。

ヤンは、その後ろ姿を、見送った。
ナタリーの背中は、今うかべた作り笑顔と同様、さみし気だった。

１１

黴臭い、暗い室内だった。
狭い部屋の中いっぱいに、コンピュータが並んでいる。
部屋の真ん中。
男が一人、ディスプレーを見つめ、キーボードを操作している。
まだ若い。二十歳まえだろう。
少年といってもいい、童顔をしている。
ドアが、ノックされた。
「開いてるよ！」
ディスプレーから、顔をそらさず言った。
ドアが開く。
それでも、振り返らない。

「この事務所は、無事だったみたいね」
女の声。
ピクッと、少年の背筋が伸びた。
サッと、振り返る。
パッと、顔が輝いた。
「ヤン！　戻ってきてたのか!!」
「ええ。ちょうど、あの戦闘の最中に」
「ひでー連中だぜ。市民に、無差別攻撃だったからな。オレももう少しで、大事な情報の山を、ぶっ壊されるとこだった」
少年の名前は、ハンス。
ヤンが、ロイドに話した情報屋だ。
ビルの地下にあるハンスの事務所だった。
使われてない地下室を、安く借りている。
「それで、弟の……イーヒンの情報は？」
ヤンが、尋ねた。
表情が、真剣さをおびていた。
ハンスはゆっくりと、ヤンに背中を向けながら、

「いまのところは、何も……」
そっと、デスクの下に、手を伸ばす。
突然、動きを早めた。
ふり返り、立つ。
両手を、突き出す。
手には、拳銃が握られていた。
しかし、銃口は、ヤンからずれている。
いきなり銃を向けられて、ヤンの顔色が変わった。
「ハンス！」
「誰だ、お前は？」
トリガーにかかったハンスの指に、力がこもる。
ヤンは、ふりかえった。
事務所の入口に、長身の男が立っていた。
「ロイド！　いつの間に？」
「すまん。後を追ってきた」
「知り合いか？」
ハンスは、銃を持ったまま、ヤンに訊く。

「ええ。OCUの傭兵部隊の隊長をしているロイド・クライブ。この街を救ってくれたのは、彼らよ」

「傭兵部隊の隊長さんか。さすがに、音もなく忍びこんできた。もっとも機械の目は、ごまかせないけどね」

ハンスは、耳に当てたイヤホンを叩いた。

誇らしげに、

「無断侵入者があると、密かにアラームがなるように、セットしてあるんだ」

と、笑う。

その表情は、オモチャを自慢する子供のようだった。

「ね。若いけど、抜かりがないヤツなのよ、ハンスって」

ヤンが、苦笑した。

ロイドが、頷いた。ハンスを、認めたように。

そして、尋ねた。

「人捜しをしてほしいんだが、できるか？」

ハンスは、胸を張った。

「もちろん。この天才ハッカー、ハンス様に、探せないものなんてないよ」

「この女性を、捜してほしい」



ロイドは、ハンスに、一枚の写真を差し出す。
「カレン……」
ヤンが、つぶやいた。
ロイドは、ハンスを見つめて、言った。
「名前はカレン・ミューア、二十一歳になる。元ＯＣＵ軍の中尉だ。二ヵ月まえまで、ヤンといっしょに、この街の病院にいた」
「アソコに、いたのか！」
ハンスが、声をあげた。
「どういうことだ？」
「仕事がら、いろんな情報を聞くもんでね。ちょっと待って……」
ハンスは、壁際の棚へと歩く。
箱からディスクの一枚を取り出し、デッキにかけた。
再生音が流れる。
しゃがれた女の声だった。老人のものだろう。
〈わたしゃね、軍の病院に入院してたんですよ。でもアソコで寝てると、悪い夢ばかり見るんですよ。火事の夢とかね。だから思わず、抜け出してきてしまいましたよ。一般病棟と研究施設のある軍病棟に分かれていて、本当に落ちつけない病院ですよ〉

「これは？」
「ぐうぜん傍受した電話の一部さ」
「ヤン、あの病院には、こんなウワサがあったのか？」
「そういえば、異様な病院だったわ。軍病棟には、近づくことさえできなかったし。でもカレンは、治療だといって、行っていたみたいだけど」
「カレンが？」
ロイドの声が、ワンオクターブ上がった。
「確かなことは、知らないんだけど……」
「……」
「ご、ごめんなさい」
「いや、俺のほうこそ、すまない。声をあらげたりして」
ロイドは、うつむいた。
「この女性は、あんたの恋人ってわけか？」
ハンスが、言った。
ロイドは、かい摘(つま)んで、これまでの事情を話した。
「そいつは、臭うな……うん、臭う。何か、裏がありそうだ」
ハンスは、腕を組み、目を閉じた。

「生きているか、死んでいるか。それをはっきりさせるだけでもいい。頼む、情報がほしいんだ！」

ロイドが、頭を下げる。

今にも、土下座せんばかりの勢いだった。

「ロイド……」

ヤンが、唖然とするほどだった。

「Ｏ・Ｋ。引き受けよう」

ハンスが、言った。

「すまない」

「ヤンの知り合いだから、料金は後払いでいいよ。そうとなったら、早速……」

ハンスは、コンピュータに向かった。

ディスプレーを凝視(ぎょうし)。十本の指が、キーボードの上を、凄まじい速さで飛び回る。

他のすべてを忘れたかのように、熱中している。

「行きましょう。どこかのコンピュータに潜入して。調査中なのよ。どうせしばらくは、このままだから」

ヤンが、言った。

ロイドは、ヤンと共にハンスの事務所を後にした。

「あきらめてないんだね。カレンのこと」
ヤンが、ぽつりと言った。
ロイドは、答えない。
逆に、質問した。
「弟を捜していたのか？」
「ええ。……あいつ、二年前に故郷をとびだしたんだ。風のうわさで、ハフマン島にいるって聞いて、それで……」
ロイドが、言った。
「見つかるといいな」
やさしい声だった。
ヤンは、思わずロイドを見た。
横顔は、ビルの屋上で見たときと同様に、険しい。
しかし。さっきは、見えなかったものが、見える気がする。
思わず、足を止めた。
魅力——と、いう言葉が、近いかもしれない。
だが、すべてを表していない。
何か、もっと奥深いものがある。

そんな気がする。
「ねえ、ロイド」
ロイドに、追いつく。前に回りこんだ。
足止めを食らったロイドは、ヤンを見つめた。
「お願いが、あるの」
「俺にできることか？」
「わたしを、あなたたちキャニオンクロウといっしょに、連れてって」
「それは、危険すぎる」
「でも、そうしたいの。おねがい」
「しかし……」
ロイドは、言葉をにごす。
ヤンは、訴えるような、探るような目で、言った。
「あなたが傭兵になった本当の目的は、カレンを捜すためじゃ？」
ロイドの目に、動揺が走る。
ヤンは、見逃さない。
「ねっ。わたしも、弟を捜したいの。だから、お願い。迷惑はかけないから」
視線が、合う。

二人の目には、同質の光があった。
失った者を、必死に求めようとする、共通の光が。
それを確認したロイドは、静かに頷いた。
「ありがとう！」
ヤンの瞳が、輝いた。
すぐにロイドは、険しい口調で言った。
「ただし、命の保証はしない」
「だいじょうぶ。わたし、これまで女手ひとつで、この島でやってきたのよ。ヤバい橋もかなり渡ってるわ。ヘタな兵隊崩れより、ずっと頼りになるよ」
と、笑顔で、敬礼。
ロイドも、ニヤリと微笑み、敬礼を返す。

１２

——フリーダム市。
ハフマン島、中央部に位置している。

先日までUSN軍に、占拠されていた都市だ。
だが、戦争開始以来、実に一年ぶりに、OCU軍が奪回に、成功を収めた。
街には、OCU軍が、あふれている。
「何とも、殺伐とした雰囲気だな」
フレデリックが、街を見回す。
建物は壊れ、人々の顔も依然として暗い。
「仕方ねえだろ。戦いの余韻が残ってるんだ」
キースが、言った。
「しかし、OCUが奪回に成功したっていうのに……」
「関係ねえよ。街のひとつやふたつ奪っても、まだ半分近くは敵に占領されてるんだ。しばらくは、勝っても負けても、こういうもんさ」
「隊長。あれを見てください」
サカタが、前方を指さす。
街角に、人だかりができている。
その向こうで、二機のヴァンツァーが、戦っていた。
「おい、マジかよ」
キースが、身を乗り出した。

「野外闘技場か？」
　ＪＪも、呆れ顔だ。
「野外の闘技場なんて、許可されるわけがないわ」
　ナタリーが、言った。
「それなら、ヴァンツァー同士が、ケンカをしてるってわけか？」
　フレデリックが、尋ねる。
「信じられんが、そういうことになるな」
　ＪＪが言う。
「これは、見物しない手はねえ」
　キースは、ヴァンツァーを操作。
　人ごみの中に、割り込んでいく。
　二機のヴァンツァーが、殴り合いをしていた。
　どちらも、手加減がない。
　だが、殺しあいではなさそうだ。
　装備した武器は、用いていない。
　ヴァンツァーの拳と拳。
　さながらボクシングだ。

「イケーッ！　ジャブ、ジャブ。右ストレート！」
キースが、奇声をあげた。
「あきれた。こいつら、ＯＣＵの正規軍じゃないか」
サカタが、言う。
「占領したばかりのフリーダムの街中で、ＯＣＵ正規軍同士がヴァンツァーでケンカか。これは特ダネだ」
フレデリックは、喜々としてカメラを構えた。
「隊長、どうしましょうか？」
ナタリーが、尋ねた。
「ほっとけ！　一文にもなりゃしない。おい、キース、賭けねえか。おれはシルバーのヴァンツァーに百ハフマンドルだ」
「よし、ＪＪ、ノッたぜ。オレはレッドの方に百五十だ！」
「お前ら、いいかげんにしろ」
ロイドの声。
キースとＪＪは、自分たちが言われたと思い、ふり返った。
だがロイドは、二人の間をすり抜ける。
ケンカしているヴァンツァーに、近づく。

「おやまあ、ご親切なこって」
キースが、言う。
「せっかくの賭けがパーだ」
ＪＪが、言う。
すぐに、サカタが言った。
「いや。おれは隊長に、二百賭ける！」
キースとＪＪは、顔を見合わせた。
「おぼっちゃん、手堅い賭け方をするな」
「まったくだ」
お互い苦笑して、ケンカの成り行きを見守る。
「よせ、お前たち！」
ロイドのヴァンツァーが、二機の間に入った。
お互い興奮している。
「関係ないヤツは、引っこんでろ」
シルバーのヴァンツァーが、ロイドにパンチ。
手のひらで、受け止めた。
「ジャマすんな」

今度はレッドのパンチ。

バックして、避ける。

ロイドが離れると、二機は、すぐに殴り合いだ。

レッドのパンチが決まり、シルバーが倒れた。

「よしッ、それとどめを刺せ！」

キースは、絶叫する。

レッドは、踏みつけようと、右足をふりあげた。

振り下ろす前。右足が破壊した。

バランスを崩して、倒れる。

シルバーが、立つ。

反対に、踏みつける。

だがその前に、やはり脚部が吹っ飛ばされ、尻餅をついてしまった。

倒れた二機の真ん中。

ツィーゲライフルを、構えたロイドがいた。

「ケンカは、お終いだ」

集まっていた群衆が、散らばっていく。

「ちくしょう。儲けそこなったぜ」

キースが、頭をかかえる。
「それは、おれのセリフだ」
ＪＪも、悔しそうだ。
「と、いうわけで……」
サカタはニッコリと笑いながら、二人に手を差し出した。

ケンカをしていた二人は、ヴァンツァーを下り、路上でロイドを挟んで、向かい合っている。
一人は、三十代半ばとみえる、金髪の白人だった。
もう一人は、それよりやや若い。茶褐色の肌。肩まで伸ばした髪。彫りの深い独特の顔をしている。オーストラリア原住民・アボリジニの血を、引いているようだ。
互いに睨みあっているものの、だいぶ落ち着きを、取り戻していた。
「ケンカの原因は、何なんだ？」
ロイドが、年長らしい金髪の男に、尋ねた。
「迷惑かけた。おれはボビー・ホプキンスってもんだ」
男は、頭を下げた。
もう一人の若いほうを指さし、

「こいつは俺の相棒のポルンガって言うんだが、ときどき訳の判らないことを言っては、暴れ出すんだ」
「ワケ、わからなくない！」
ポルンガが、叫ぶ。
ふたたび、殴りかかりそうな勢いだ。
ロイドは、あわてて押し止めた。
「この調子さ」
ボビーが言う。
ポルンガは、なお興奮したようすで、
「おれは、この島の自然守りたいだけ。だから、戦争を早く終わらせるため、義勇軍に志願しただけ！
でも、ＯＣＵもＵＳＮも、戦争終わらせたくないみたいだ！
おれ、それに、腹立ててる!!」
と、たどたどしい言葉で、まくしたてる。
「この島が、好きなのか？」
ロイドが、尋ねる。
ポルンガは、頷いた。

「この島の自然、おれたちの宝だ。おれたちのオーストラリア大地、汚された。もう、元には、もどらない。でも、この島は、まだ間に合う。
おれ、この島を、故郷オーストラリアの二の舞に、したくない。
だから、だから、だから……」
瞳から、涙がこぼれている。
ポルンガは、ボビーを見た。
「ボビー。おまえ、本当は、おれの気持ち、わかってるはず。そうだろッ！」
「しかし、おれたちだけの力じゃ……」
ボビーは、言葉をとめた。
苦い汁でも、啜（すす）ったかのように、顔を歪める。
「おれ、戦う。ひとりになっても、あきらめない！」
フラッシュ――。
フレデリックがカメラを、ポルンガに向けていた。
「やめろ。行くぞ！」
ロイドは、フレデリックの肩に、腕をまわした。
強引に促して、歩きだした。
ポルンガの絶叫は、止まない。

「島を守る。おれ、そのため、命を投げ出して、戦う！　戦うぞ、うおー――ッ‼」
叫びが、ロイドたちの背中に、突き刺さる。
キャニオンクロウの面々の、表情が硬い。
皮肉り屋のキース、ＪＪまで、神妙な顔つきだ。
ポルンガの叫びが、彼らの何かを、代弁しているかのように。
フレデリックは、やっと彼らの変化に気づいた。
「すまなかった、つい……」
フレデリックは、ロイドに詫びた。
カメラをしまい、キャニオンクロウの面々と、その場を立ち去った。

１３

ロイドたちは、その足を、フリーダム市の軍オフィスへ向けた。
召集が、かかっている。
案内された部屋のドアを開けた。
「ひゃっ！」

中から、悲鳴。部屋の中に、太った男が、おびえた表情で、こちらを見ている。
すぐに、表情が、ゆるんだ。
「ロイド隊長ッ！」
「……ピウィー。ピウィーじゃないか！」
思わず、ロイドが、声を上げた。
「な、何ですって――！」
後ろにいたサカタが、あわてて、部屋に割りこんだ。
太った男を見て、
「ピウィー!!」
と、叫ぶ。
「サ、サカやん。サカやん……！」
サカタと太った男が、抱き合った。
男は、ピウィー。OCU軍の上等兵だ。
超がつく臆病者。食いしん坊。だが、運転技術は、卓越したものをもつ。
そのため、補給車のドライバーとして、ロイドの部隊で働いていたのだ。
一年前、あのラーカス事件の時も……。
「サカやん、会いたかった、会いたかった」

　ピウィーは、サカタに抱きつき、涙をポロポロ流している。
「ピウィー、おまえまた、太ったんじゃないか」
「もう、サカやん。感動の再会の場面で、気にしてること、言わないでくれよ。ああ、サカやん、サカやん……！」
　ひとしきり泣いてから、
「隊長！　ロイド隊長……！」
と、ロイドに抱きつく。
　やはり、ひとしきり泣いた。
「皆、席についてくれ」
　オルソンだった。
「大佐、こちらへ、いらっしゃってたんですか」
　ナタリーが、言う。
　オルソンは、ナタリーを意味ありげに見て、言った。
「私だけではない。たったいま、ブレイクウッド将軍も、到着されたところだ」
「えっ！」
　ナタリーは、息を飲んだ。
「へーッ、将軍に会えるなんて〝光栄〟ってとこですかね」

キースは、テーブルを囲むいちばん奥の椅子に、腰を下ろした。
「直接、賃金アップでも、お願いするか」
JJが、キースのとなりにすわる。
各自が、勝手に席についた。
「ピウィー、すわろう」
サカタは、ロイドに抱きつくピウィーを、自分のとなりに、すわらせた。
靴音――。背筋の伸びた男が、部屋に入ってきた。
瞬時に、室内が、シンとした。
歳は、五十前後だろうか。
糊の効いた軍服姿。口のまわりに、赤い髭をたたえている。
オルソンが、口を開いた。
「将軍、彼らが〝キャニオンクロウ〟の隊員たちです」
将軍は、険しい目で、室内を一望した。やがて。おもむろに、口を開く。
「この中には、私と初対面の者もいるようだから、自己紹介しておこう。私が諸君の部隊の最高責任者であるウィラス・ブレイクウッドだ」
「ナイスミドルって感じかね」
キースが、ささやく。

「お前の方が、ずっといい男だぜ」
JJが、つぶやいた。
「よせよ。お前に言われても、ちっともうれしかねえ」
ブレイクウッドは、キースを一瞥。
キースは、口を噤む。
ゆっくりと、全員を見回し、
「諸君の活躍は、オルソン大佐から、いつも聞いている。すべてをな」
と、皮肉るように、ロイドで視線を止めてから、言葉を続けた。
「さて。諸君のおかげもあって、わがOCU軍はUSN軍に奪われていた都市を、ことごとく奪還に成功している。もはや敵が占拠している都市はソレイト、フォートモーナス、ルーピディスの三つにすぎん。しかも先ほど、ソレイトは奪還間近との報告が入った」
「ヒュ～ッ、オレたちの稼ぎが減るぜ」
キースが、口笛を吹いた。
ふたたび将軍が、睨む。
キースは両手を広げて、ソーリー……と詫びた。
「諸君には、早急に参戦してもらうことになる。だが、決戦にそなえて、しばし休養してよろしい」

「休養もいいけど、金もくださいよ、将軍」
JJが、言った。
「口を慎め」
オルソンが、叱る。
だが、JJは悪びれずに、
「おれたちゃ正規軍と違って、休養手当てなんて、気のきいたものもないんでね」
将軍は、それを受けて、
「わかった。ここに滞在している間、一人千ハフマンドルを支給しよう」
と、言った。
「ビバ、ブレイクウッド将軍！」
キースとJJは、同時に歓声をあげた。
オルソンが、苦々しい目で、二人を見やる。だが文句は言わず、
「よし、解散だ」
「ハ〜アッ。闘技場にでも行って、千ハフマンドルに、利子をつけるとするか」
キースは立ち上がり、おおきくアクビをした。
「つきあうぜ」
JJも、腰をあげる。

「あのぉ……」
ピウィーが、手を上げた。
「ぼくは、どうすればいいんでしょう?」
それを見たオルソンが、
「おお、そうだったな。こいつは、ピウィー・リッチバーグJr.。今後、補給車のドライバーとして、おまえたちと行動することになった」
と、紹介した。
「何だって。ピウィーは、正規軍の軍人でしょうが」
サカタが、尋ねた。
オルソンは、顔をゆがめて、説明した。
「こいつ、この間の戦闘時、ビビッて脱走しようとしたんだ」
「ピウィー、本当か?」
「サカやん、面目ない」
「軍法会議寸前のところを、私がこの部隊に入れることで話をつけた」
「だいじょうぶなのか、こいつ?」
キースが、ピウィーに近づく。
ふくらんだ頬を、指でついた。

「プヨプヨで、風船みたいだ」
ＪＪが笑う。
ピウィーは、泣きそうな顔で、うつむくだけだ。
「心配ない。ピウィーのドライビングテクニックは、超一流だ。そうですよね、隊長」
サカタは、ロイドを見た。
「俺が、保証する」
ロイドが、言った。
「ロイド隊長、サカやん！」
ピウィーが、感激の声をあげた。早くも涙が、こぼれている。
「まあ、補給車がいると、何かと楽だから。頼むぜ、デブちん」
キースが、手を差し出す。
「えへへ。よろしく」
ピウィーが、手を握り返す。
すぐに、
「いてて。放してくれよ〜ッ！」
と、泣いた。
「キース！」

ナタリーが、怒る。
「ケケケ。冗談だって」
キースは、手を放し、部屋を出ていく。
「補給しようとしたら、逃げていた、なんてことはないようにな」
JJは、身をかがめて、肘でピウィーのお腹をついた。
「う、うん。がんばるよ」
「わたしは、ナタリー。よろしくね」
ナタリーが、手を差し出す。
ピウィーは、服で拭いてから、右手を差し出した。
「えへへ。こちらこそ」
ナタリーの手を握ったとたん、色白の頬がポーッとピンクに染まった。
「さあ、ピウィー。再会を祝して、乾杯に行こうぜ」
サカタが、言った。
「うん！　でもぼく、お酒より食べ物のほうがいいな。フライとかピザとかハンバーガーとか……テンプラなんてのも、いいねえ！」
「こいつ、あいかわらずだな」
サカタは、笑った。

ピウィーは、舌なめずりしながら、
「隊長も、どうですか？　こってりした揚げ物でも、いっしょに？」
「付き合うよ」
ロイドは、苦笑い。
ピウィーがいると、自然と場がなごむ。
「さあ、行きましょう！」
サカタが、ロイドをうながして、部屋を出ていく。
「あっサカやん、ちょっと待ってて……。あの～良かったら、一緒に行かないかい？」
ピウィーはもじもじしながら、ナタリーを誘った。
「ええ、よろこんで」
ナタリーが、頷く。
「やったあ。今日はパーッと、行こうよ」
「ナタリー」
オルソンが、呼び止めた。
「何でしょう？」
「将軍が話があるそうだ。残ってくれ」
ナタリーの笑顔が消えた。

神妙な顔つきで、
「わかりました……」
「それじゃあ、後からお出でよ。店が決まったら、オフィスに伝言をいれとくから」
「ええ、ありがとう」
ナタリーは、うなずいた。
「きっとだよ、待ってるから」
ピウィーは、うれしそうに微笑み、ドアを閉めた。
とたんに部屋が、静かになった。
「オルソン大佐。すまないが、君も外してくれ」
ブレイクウッドが、言った。
「それでは」
オルソンは、敬礼して、部屋を後にした。
あとに残ったのは、ブレイクウッド将軍とナタリーの二人きりだ。
「久しぶりだな」
ブレイクウッドが、言った。
やわらかい声。先ほどまでの緊張した口調とは、別人のようだった。
目からも険しさが、抜けている。暖かい眼差(まなざ)しだ。

しかし、ナタリーは、逆だ。
それまで以上に、緊張した様子だった。
「ご用はなんです？　用事がありますので、お早くお願いします」
上官に対する礼儀と節度を持った口調で言った。
「ナタリー。そんな言い方は、やめてくれ」
温情に訴えかけるように言う。
それでもナタリーは、態度も声も硬く、
「部隊を抜けろ、とおっしゃるおつもりでしたら、拒否します」
と、断言した。
「強情だな」
ブレイクウッドの口許から、ふっ、と笑みがこぼれた。
それが移ったかのように、ナタリーの頬にも、微笑みがもどる。
「そうね。わたしも傭兵部隊で、鍛えられたんですもの」
「命知らずの傭兵部隊だけに、私の心配も……」
「だいじょうぶ。あなたの娘は、そう簡単に死んだりしませんわ。お父さま」
ナタリーの表情が、やわらかくなっていた。
けっして人前では、見せたことのない柔和（にゅうわ）さで、微笑む。

「ナタリー。しかし、お前は傭兵部隊の副官として戦うだけでなく、もうひとつ過酷な任務も……」

「将軍！」

ナタリーが、叫ぶ。顔に、厳しさが戻ってた。

足を揃え、背筋を伸ばす。敬礼――

険しい目で、ブレイクウッドを見つめて、

「ナタリー・ブレイクウッド、任務に戻ります」

クルッと、背を向ける。

規則正しい足取りで、部屋を後にした。

１４

「あんた、まだ食べるの？」

ヤンが、あきれたように言う。

「そんなこと、言わないでくれよ。ぼくって食べるのだけが、楽しみなんだから」

はずかしそうにうつむきながらも、ピウィーはひとかけら残ったピザに手を伸ばす。

フリーダム市にあるレストランだった。
軍オフィスから出たロイド、サカタ、ピウィー。
外で待っていたヤンが合流。ナタリーが、遅れて参加した。
キースとＪＪは、闘技場へ。フレデリックの姿は見えない。
ピウィーが、最後のピザを食べたので、テーブルに置かれた皿は、すべて空となっていた。
「もう、なくなっちゃった。ボーイさん、エビフライと鳥の唐揚げ追加。あとコーラもＬサイズで、持ってきて！」
ピウィーが、追加注文する。
「あ、あ、あんた。一人でピザ二枚に、ハンバーガー五つ、それに天丼を二杯も、食べてんだよッ!!」
ヤンが、叫ぶ。
「よせよ、ヤン。こいつの胃袋は、底なしなんだから」
サカタが、言った。
「まったく、信じられない」
ヤンは、頭を抱えこんでしまった。
ロイドとナタリーは、顔を見合わせて、苦笑する。
「ヤン。ここにいたのか。アチコチ探したぜ」

声――。ハンスだった。
「ハンス！　どうしたの、あわてて」
「やばいことになったんだ。カレンのことを探ろうとして、軍のコンピューターに侵入したら逆探知に引っかかった。それで軍から追われてる」
「何だって」
ハンスは、ロイドを見つめて言った。
「なあ、頼むよ。オレをあんたの部隊に、入れてくれよ」
「俺の部隊も、軍隊にはかわりはない」
「でも傭兵部隊だろ。ヘタに逃げ回るより、安全なんだ」
「安全？」
「ほら、昔からいうだろ。木を隠すなら、森のなか。小石を隠すにゃ、砂利の中って。おっ、ありがたい！」
ハンスは、ボーイが持ってきた、コーラを取り、喉をならして飲む。
「あっ、それ、ぼくのコーラだぞ！」
ピウィーが、怒った顔で、コーラを奪い取る。
「いいじゃないか、喉がカラカラなんだから」
「ダメッ。自分で頼めよ」

ピウィーはコーラを、両手でしっかりと抱える。
「何だ、この、ケチデブ」
「ハンス。それで、カレンの情報は？」
ロイドが、尋ねた。
「だめだ。ガードの堅さは、尋常じゃねえ。ニルバーナ機関っていう軍研究所に行き着いたんだけど」
「ニルバーナ機関？　何だ、それは？」
ハンスは両手を、広げて、
「その研究所が、なんであるかも、わからないんだ」
「……」
「それより、おれを部隊に入れてくれるだろ」
「しかし……」
「こんなデブより、ずっと役に立つぜ。カレンのことも、つづけて調査するからさ」
「何だよ。会ったばかりで、人のコーラを取ったり、デブなんて言ったり」
ピウィーが、むくれる。サカタが、なぐさめた。
「ねえロイド。わたしからも、お願い。入れてあげて」
ヤンが、両手を合わせた。

「いくら傭兵部隊だからって、そんなに勝手に……」
ナタリーが、言う。
ロイドは、それを押し止めて、
「ハンスは、情報のプロだ。きっとプラスになる」
「ありがとう！　恩に切るよ」
ハンスは、歳にふさわしい無邪気な笑顔になった。
だがすぐに、顔を曇らせて、
「そういえば、この男、たしかこの部隊のメンバーだろ？」
と、写真を取り出す。
インスタント写真だった。キースが写っている。
「ここへ来る途中、闘技場の前で撮ったんだけど、人相の悪い大男にからまれて、何やら危ない雰囲気だったけど」
「ＪＪが、いっしょじゃなかったのか？」
「いや、こいつ一人だった」
「ヴァンツァーにも、乗ってなかったんだな」
「ああ」
「まずい！」

ロイドが、立ち上がった。
「ほっときなさいよ。あのケンカ好きのことなんか」
ヤンが、言った。
ロイドは、血相を変えて、飛び出していく。

この日、闘技場でのキースとJJは、対照的だった。
JJは、賭ける相手が、連戦連勝。
逆にキースの賭ける相手は、全滅だ。
「ちくしょう、おもしろくねえ。小便してくらあ」
キースは、一人トイレへ向かった。
酒を飲んでいたせいもある。もちろん負けた腹いせもあった。
「こんなの八百長だぜ。何だって、あのグレゴリオって能無しが、勝ちつづけやがんだ。あんなのオレのハンドロッドにかかりゃ、一撃でお陀仏だぜ」
トイレで、愚痴りつづけていた。
「ほう。お前さんなら、あのグレゴリオに、勝てるってのか？」
となりにいた大男が、尋ねた。
「あったりめえよ。あんなのイカサマなしで勝負したら、一秒ともたねえ……」

キースの身体が、宙に浮いた。

大男に、首根っこをつかまれて、持ち上げられたのだ。

「な、何すんだ。放せ！」

「本当に、一秒もたねえか。試してみようじゃねえか」

「な、何だと」

「おれが、グレゴリオ・マイアスだ。ここらへんじゃ〝コング〟で通ってる」

大男が言った。

キースの顔が、青ざめた。すぐに、それを隠して、

「よし。すぐに、ヴァンツァーに乗って……」

「イヤ、素手でいい」

グレゴリオは、片手でキースを持ち上げたまま、外へと出た。

路上に、キースを放り出す。

キースは、背中から地面に落ちて、顔を歪めた。

「ち、ちくしょう。すぐ、そこにヴァンツァーが置いてあるんだ。ま、待ってろ」

キースは、後ずさる。

「ダメだ。おれは、人にバカにされると、ちっとばっかしもガマンできねえんだ」

いきなり右足を、蹴り上げた。

キースの脇腹にのめり込む。
一撃でキースは、動けなくなった。
「まだ、寝るのは、はやいぜ」
グレゴリオは、左手でキースの胸ぐらをつかみ、引きずり起こした。
右手で、顔に往復ビンタを飛ばす。
「や、やめてくれ。やめてくれ……」
キースは、反撃ひとつしない。いや出来ない。
「さっきの大口は、どうしたんだ？　えっ!?」
巨大な拳が、キースの腹にのめりこむ。
口から吐瀉物が、散った。
「グレゴリオを怒らせるなんて、大バカだ」
「ああ。〝コング〟はヴァンツァーに乗っても強えが、降りるともっと強えんだからな」
野次馬の声が、聞こえた。
「わ、悪かった。謝る。金なら、やるから許してくれ」
キースは、頭を下げた。
「ダメだ。おれをおちょくるとどうなるか、見せしめにしてやる」
グレゴリオは、右拳を振り上げた。

キースの顔面に、狙いを合わる。
唸りをあげて、たたきこむ。
その寸前――。
ロイドだった。
グレゴリオの右腕が、止まった。顔が、歪む。
大木のような右腕が、背中へねじり上げられている。
「俺が相手をしてやる。その男を放せ。そうしないと……」
怒りに口から泡を吹きながら、グレゴリオが唸った。
「きさま、おれ様にこんなことをして、ただで済むと、思っているのか」
ロイドが、力をこめた。
グレゴリオの口から、巨熊のような悲鳴がもれた。
左手を放す。キースが、落ちた。
キースは腰で地面を這い、逃げた。
ロイドは、グレゴリオの腕を放した。
向かい合う。
「小僧。名前は？」
「ロイド」

平然と言った。
グレゴリオは、仁王のような顔を、ニヤリと歪めた。
「ロイドか。成仏しろよ」
巨体に似合わぬ速さで、突進してきた。
ロイドは、動かない。両手を下げ、ノーガードで立っている。
グレゴリオが、体当たりする寸前。
スッと身を屈めた。
次の瞬間。大木が倒れるように、グレゴリオは前のめりに倒れていた。
ロイドが、足に足をからませたのだ。
すぐに馬乗りになる。
足を、胴に巻きつけ固定。両腕を首に巻きつけ、締め上げた。
「ググググ……」
グレゴリオは、身動きすらできない。
「負けを認めるなら、地面を叩け」
ロイドが言った。
グレゴリオは、泡を吹きながらも、耐えている。
泡に、血の色が混じる。

それでも、耐えている。
ロイドは、さらに両腕に、力をこめた。
太い首が、直角に近く曲がった。
「ぐ、ぐぐ、グググッ……」
グレゴリオの右手が、力なく、地を叩いた。
ロイドは、力を緩めた。
グレゴリオは、ぐったりと伏した。
ロイドは、立ち上がった。汗ひとつかいていない。
「は、はじめて負けた……」
グレゴリオが、呻いた。
「ロ……ロイド……何ていう……？」
「ロイド・クライブ」
「……ロイド・クライブか……。立派だぜ」
グレゴリオは、ロイドを見上げて微笑んだ。微笑んだまま、気絶した。
ロイドは、辺りを見回す。
集まっていた野次馬が、あわてて、散った。
路上の暗闇に、キースがうずくまっていた。

「だいじょうぶか?」
ロイドは、手をさしのべた。
「知ってたのか?」
キースはうずくまったまま、訊く。
「知ってた」
ロイドは、認めた。
「なぜ、わかった?」
「筋肉を見て、わかった。お前の筋肉は、マシーンを操作するだけのものだ。徒手格闘向きの筋肉になってない」
キースは、黙りこんだ。
ロイドは、手を差し出したまま、待った。
やがて。
「ちいせえときから腕力は、からっきしでな。いつも、いじめられてた……。今でも、怖えんだ。ヴァンツァーに乗ってねえと、怖え。だから、酒ばかり飲んでる……。でも、ヴァンツァーに乗ってれば、オレは、負けねえ。だからヴァンツァーで、じわじわと復讐しているんだ……」

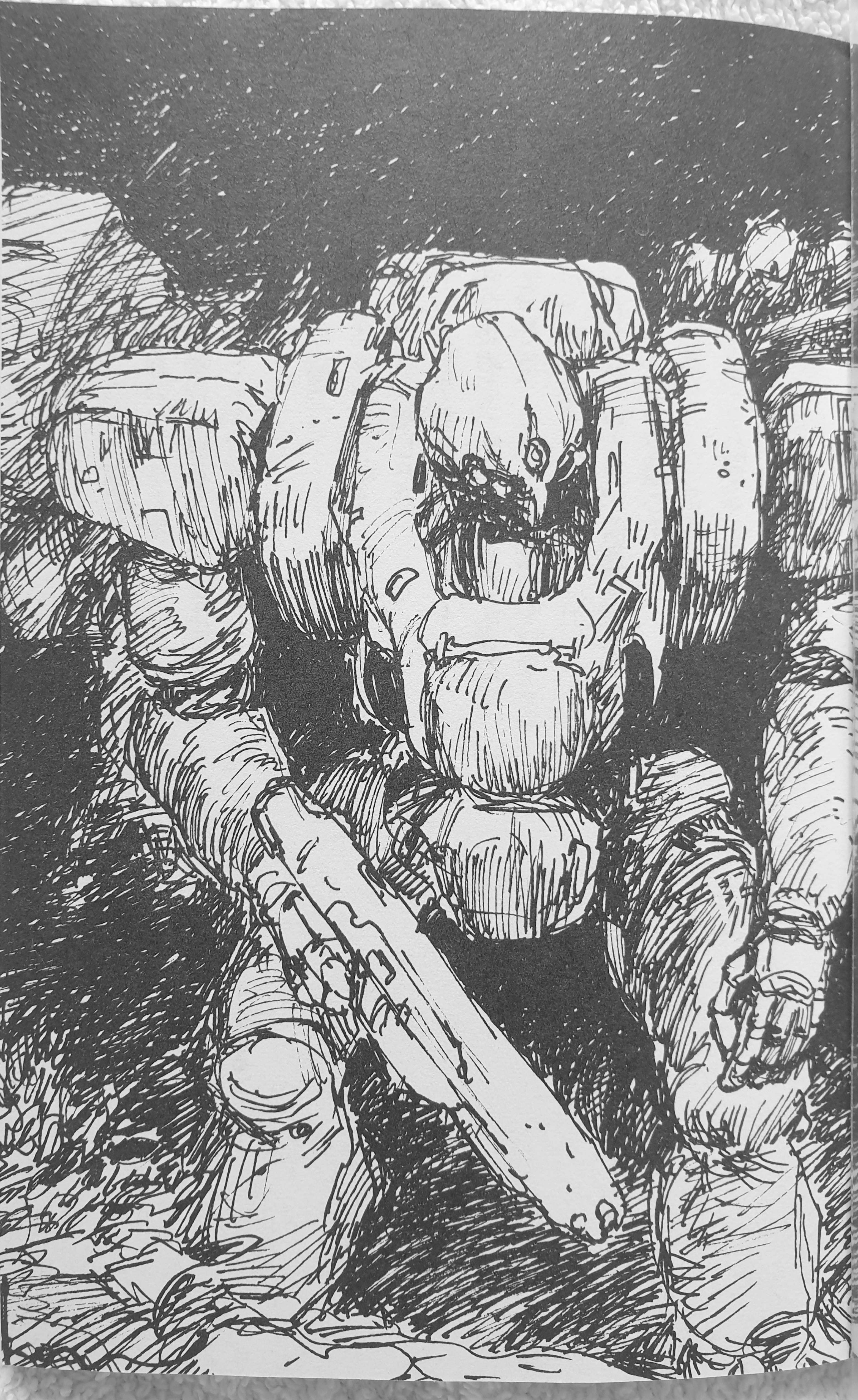
キースは、ハッとして、顔をあげた。
身体の痛みも忘れたかのように、立ち上がる。
「言わないでくれ。このことは、誰にも……」
すがるような目で、ロイドを見た。
ロイドは、頷いた。
「約束する。俺は、何も見なかった」
「あ、ありがとう。ロイド隊長……」
キースははじめて、ロイドに隊長をつけて、呼んだ。
「いっしょに、飯でも食おう」
ロイドは、キースをうながす。
「JJのヤツが中に……いいか、どうせアイツは、今日はツキっぱなしだ。疫病神が消えたほうが、アイツも喜ぶ」
キースは、ニヤリと、笑った。ロイドといっしょに歩く。
二人は、気がつかなった。
二人が去ったあと。
物陰から、一人の男が、姿を現したことを。
男は、偶然通りかかった路上で起こった出来事を、一部始終見ていた。

フレデリックだった。
瞳が、涙で潤んでいる。
何の涙かは、彼自身にもわからない。
ただ。不思議なほど、熱い涙だ。
フレデリックは無言で、ロイドとキースの背中を見送った。

１５

闇夜の草原を、極度の緊張が、支配していた。
前方に点在する光。
ＵＳＮ軍の施設の明かりだ。
草や木の下に、ヴァンツァーを隠し、様子をうかがう。
オルソンから指令を受けたのは、陽の暮れたあとだった。
〈フォートモーナス市近郊のＵＳＮ軍施設を脱走した兵士から、保護および応援の通信があった。至急現地に向かい、この脱走兵を保護しろ。なお敵の策略とも考えられるので、充分に注意すること〉

真偽すら、確かでない。
まさしく傭兵部隊向けの、仕事だ。
そのぶん、報酬は高いが……。
時刻は、深夜零時をまわっていた。
「どうだ、ハンス？」
サカタが、尋ねた。
ハンスは、無線機を慎重に操作。ＵＳＮ軍の無線を、傍受しているのだ。
「まちがいない。連中、必死で脱走兵を追いかけてるみたいだ。確認の通信が、飛び交ってる」
「脱走兵と、コンタクトできないのか？」
ロイドが、訊く。
「できるけど、敵にも発見されるよ」
「いいんじゃねえのか。遅かれ早かれ、見つかっちまうことだし。ここでジ〜ッとしてるだけじゃ、腕がうずいて仕方がねえ」
キースが、言った。
「右に同じ」
ＪＪが同意する。
「よし。ハンス。通信しろ」



「了解。えーっ、こちらOCU軍傭兵部隊。正体不明機、応答せよ」
ハンスは、無線のツマミを操作しながら、言った。
砂嵐のような雑音に混じって、正体不明機から、応答があった。
〈こち……SN……バーナ機関隊…………だ。貴隊に応援を……する〉
「こ、この声は！」
ヤンが、叫んだ。
隠れていた茂みから、ヴァンツァーを起こす。
一機だけで、駆けだした。
「おい、ヤン。どうする気だ。おい！」
JJが呼び止める。聞こうとしなかった。
「いっちまったぜ、どうする、隊長？」
キースが、言った。
「よし。われわれもいくぞ。前進！」
全機いっせいに、身を起こす。
ヤンを追う。
前方で、光が動く。敵ヴァンツァーだ。
「ヤン。戻って。先走ると、危険よ」

ナタリーが、呼びかけた。
だが、ヤンは必死で、無線に呼びかけている。
「正体不明機。応答して。応答して！」
「ヤン。狙われるわ。危ない」
ミサイルが、ヤンのヴァンツァーの目前で爆発した。
ヤンは、身を隠そうとしない。
「ヤンのヤツ、わざと自分が標的になってるぜ」
「正体不明機から、敵の関心を逸らす気だな」
「何をしている。やられるぞ、ヤン！」
サカタが、叫ぶ。
それでもヤンは、立ち尽くし、通信を続けた。
「正体不明機、応答して……。イーヒン。あなたイーヒンでしょう⁉」
「何だって！」
キャニオンクロウに、驚きが走る。
「あたしよ。メイファよ！　答えて、イーヒン」
〈ね、姉さん⁉〉
「やっぱりイーヒン！　よかった、生きてたのね……」

ヤンの声が、涙にむせぶ。

身を隠していたイーヒンが、ヤンのヴァンツァーに駆け寄った。

「ヤン。戦列に加わって。敵が、迫っているわ」

ナタリーが、指示を飛ばす。

「了解。イーヒン、あんたは、ここに隠れていなさい」

「でも……」

「黙って、じっとしているの！」

「わかった」

ヤンは、イーヒンのヴァンツァーを隠す。

即座に、戦う女豹と化した。

闇を這い、敵に迫る。そして破壊した。

敵の無線が、キャニオンクロウ全機に、流れた。

〈本部。脱走兵が、ＯＣＵ軍と合流した模様です。指示をお願いします〉

〈指示だと〉

冷たい口調。聞き覚えのある声。

「あれは、ドリスコル――！　どこだ。ドリスコルは、どこに⁉」

ロイドが、叫んだ。

「敵の指令は、目の前の基地からではなく、ルーピディス方面からの無線です」

ハンスが、報告した。

「クソッ、一人だけ、安全地帯にいるわけか」

ロイドは、拳を握った。

ドリスコルまでは、ロイドの声は、聞こえていないようだ。部下に向かって、

〈いまさら指示を仰ぐとは、おめでたい部下を持ったものだ〉

と、見下したように、あざ笑っている。

〈しかし……〉

ドリスコルは、部下の話は聞かず、冷静に、威圧的に、

〈両方とも、始末しろ〉

しかし。

〈了解……ワーッ！〉

受信する部下の声が、途中でとぎれた。

キースの叫び声が、かき消した。

「ケッ、キャニオンクロウ参上」

「カッコつけてんじゃねえ、もうこっちは、全滅させせたぜ」

ＪＪが、声を弾ませる。

ドリスコルの指令が飛ぶ。

〈基地に残るヴァンツァー。全機出撃せよ〉

部下は取り乱した声で、応答した。

〈ダメです。基地が破壊されました。残りわずか。退却命令を！〉

ドリスコルは、フッ……と、息をもらしてから、

〈戦え。逃げたら処刑する〉

〈そ、そんな……う、うわーッ！〉

爆音と、閃光が、ＵＳＮ軍施設を包む。

キャニオンクロウのヴァンツァーが、炎の間を跋扈（ばっこ）する。

カーニバルを、楽しむように。殺戮を楽しむ。

「じ、地獄だ……」

フレデリックは、唖然として、戦いを見つめた。

容赦なくつづく戦闘を。無慈悲なまでの攻撃を。

十分たらずで、戦闘は終わった。

戦火が、メラメラと立ちのぼる。戦闘の余韻を、しのぶかのように。

空からは月が照り、どこからか虫の鳴く声が、響いてきた。

「ハンス、敵は？」

　ロイドが、訊いた。
「ちょっと、待って。確認します」
　しばらくして、ハンスが、言った。
「敵部隊の反応ナシ。全滅！」
「イヤッホー!!」
　キースが、奇声を上げた。
〈雑魚（ざこ）の整理が、できた。お礼を言っておこう、ＯＣＵの精鋭諸君に……〉
　その声に、部下の死を悼む響きは、皆無だった。
「貴様、部下を見殺しにして、それでも上官といえるのか！」
　ロイドが、叫ぶ。
〈……フフフ、人間は凡人と天才にわかれ、天才はあらゆる規範を踏み越えることが許される……〉
「な、何だと……ドリスコル。ドリスコル！」
「ダメだよ、ロイド。電波の関係で、こっちの声は向こうまで、聞こえないはずだ。それにもう、ヤツの無線は切れてるよ」
　ハンスが、説明した。
「隊長。脱走兵も無事保護。全滅。任務完了しました」

ナタリーが、報告。
いらだつ気持ちを押さえて、ロイドは叫んだ。
「全機、帰還！」

１６

――フリーダム市のＯＣＵ軍オフィス。
戦闘を終えたキャニオンクロウの面々が、帰還していた。
フレデリックにハンス、ヤンとイーヒンの姉弟も一緒だ。
もちろん、正式隊員ではない。
戦闘に参加したため、オルソンに同行を要請されたのだ。
まだオルソンは、姿を現していない。
「彼が、弟なのか？」
フレデリックが、ヤンの隣にすわる少年を見て、尋ねた。
長身だが、痩せた身体。
頬が赤く、表情もあどけない。少年と呼んだほうが、ふさわしい。

「そうよ。あらためて紹介するわ。弟のイーヒン」
ヤンが、誇らしげに、言った。
イーヒンは、ぼんやりと立っているだけだ。
「ほら。挨拶！」
ヤンが、無理やり頭を、押さえつける。
「ど、どうも……」
イーヒンは、しどろもどろに、つぶやく。
「姉と弟ってより、過保護なカーチャンと、気弱なボーヤって感じだな」
キースが、言った。
ヤンは、キースを睨んだ。
「確かに、まだ十七歳だけど。十二の頃から、わたしがヴァンツァーの操縦を教えてたから、そこらへんの兵士なんて目じゃない実力をもっているわ」
「ぼ、ぼくは闘技場に通って自分で覚えたんだけど……」
「えっ！　何!?　わたしが教えたのよね!!」
「う、うん……」
キースは、両手を広げて、
「はいはい、そうですか。ご優秀な弟さんで、さぞかしお姉様も鼻が高いでしょうよ」

「ちょっと、弟をバカにすると、わたしが承知しないわよ」
ヤンは、身を乗り出した。
今にも、殴りかからん勢いだ。
「ね、姉さん。やめてよ……」
あわててイーヒンが、ヤンの身体を押さえた。
場のムードを変えるように、ロイドが尋ねた。
「でも、どうしてUSN軍に、いたんだ？」
「USNに、スカウトされたんです」
「スカウトだって!?」
フレデリックが、手帳を取り出し、メモの用意をする。
「ええ。ソレイトの闘技場で戦ってたときに、ヴァンツァーパイロットとして、素質があるって」
「ほらね、聞いた!?」
ヤンが、自慢げに微笑む。
イーヒンは、はずかしそうに、うつむき、
「それで、ニルバーナ機関っていう特殊部隊で、訓練を受けて……」
「ニルバーナ機関！」

ハンスが、声をあげた。
「知ってるの？」
ピウィーが、尋ねる。
いつの間に、仕入れたのだろう。一人でチーズバーガーを、頬張っている。
「ロイドには、前に話したけど、カレンさんの足どりを追うため、軍のコンピューターに侵入したときに、突き当たった名前だ」
「それじゃあ、カレンは、そこに？」
「USN軍のコンピュータの極秘データに、カレンさんが〝ニルバーナ機関移送候補〟って書いてあった」
「じゃあ、そこにいるんだね!?」
「でも、その直後に、ハッキングがばれて……」
ハンスは、口をつぐんだ。
「イーヒン。君のいた機関に、カレンという女性は、いなかったか？」
ロイドが、尋ねた。
「いいえ。女性は、誰も……」
「だから、女が恋しくて、逃げたってわけか？」
「キース。まだイーヒンは、子供なのよ！」

ヤンが、テーブルを叩く。
「そうかねえ」
キースは、ニヤニヤと顎をなでた。
イーヒンは、真面目な顔つきで、
「別に女性が、いなかったからじゃありません。ぼくの同僚が、つぎつぎと行方不明になって……」
「行方不明？」
「とつぜん消えて、それっきりなんです。上官に訊いても『配属がかわった』って言ってたけど、荷物を全部置いたまま、着の身着のままで配属がえなんて信じられなくて」
「……」
「しかも消えたのは、全員、ぼくみたいにスカウトされたヤツばかりで。それで、恐くなって……」
「いいのよ、イーヒン。そんなところ、逃げだして大正解だわ」
「USNめ、何を企んでいるんだ」
フレデリックの眉間の皺が、いちだんと深くなった。
「でも彼は、事実上わが軍の捕虜よ。大丈夫かしら」
ナタリーが、言った。
奥へ通じる扉が、開いた。オルソンが、姿を現す。

緊張が、走った。
オルソンは、イーヒンを一瞥するなり、
「そいつが、脱走兵か。すぐに収容所に送る手配をしろ」
と、言った。
ヤンが、サッと腰をあげた。
「イーヒンは、渡さないよ！」
イーヒンの前に、立ちふさがり、身構える。
突然の敵対行為に、オルソンも声を荒らげた。
「私に、楯突く気か！」
「わたしは、あんたに雇われてるわけじゃない」
「何だと」
「あんたを殺してでも、弟は守る！」
ヤンの目が、鋭く光る。これほど険しい表情を見せるのは、はじめてだ。
ロイドが、おもむろに、腰をあげた。
ヤンとオルソンの間に、割って入る。
オルソンと、向かい合って言った。
「イーヒンは、俺の部隊で、管理する」

「ロイド。お前……」
オルソンは、サングラス越しに、ロイドを睨んだ。
「構わないだろう」
ロイドは、断言するように言い、オルソンを睨み返す。
息づまる緊張。静寂――。
ゴクッ。ピウィーの喉が、鳴る。
オルソンは、あきらめたように、
「好きにしろ」
ヤンが、微笑み、イーヒンの肩を叩いた。
「ただし」
オルソンが、叫ぶ。
ロイドを見つめたまま、
「もしヤツが、お前の部隊からも脱走するようなことがあったら、迷わず殺せ。それが、条件だ」
緊張と静寂が、さきほどの二倍以上にふくらむ。
それを押し破るように、ロイドが言った。
「わかった」

「話は、それだけだ。解散」
オルソンは、靴音をあらげて、奥の部屋へと姿を消した。
「ロイド、ありがとう。イーヒンは、わたしが責任持って管理する。決して、あんたに迷惑はかけないわ」
ヤンが、言った。
「わかってる」
ロイドは、ニヤリと微笑み、部屋を出ていった。
「よろしく頼むぜ。相棒！」
キースとJJが、イーヒンの肩を叩き、部屋を出ていく。
「わたしはナタリー。〝キャニオンクロウ〟の副官を勤めているわ。何かあったら、遠慮なく相談してね」
ナタリーは、笑顔でイーヒンに、右手を差し延べた。
「あ、あの……どーも。よろしく、お願いします」
イーヒンは、その白く細い手を、握り返した。
手が離れ、ナタリーが、立ち去る。
イーヒンは、ぼうぜんとしている。
「あんた、なに照れてんの？」

ヤンが、チェックするように、言った。
「べ、別に、照れてなんか……」
「ぼく、ピウィー。よかったら、何か食べにいかないか？　おいしい店知ってるし」
イーヒンが、答える前に、フレデリックが言った。
「そうしよう。イーヒン、君にいろいろ話を聞いておきたい」
「いいですけど……」
「ラッキー。フレデリックのおごりだね」
ピウィーが、歓声をあげた。
「おいおい、待ってくれよ。おれはイーヒンにUSNの話を……」
「だって、それって取材でしょ。領収書もらって、取材費で落とせばいいだろ」
ふだんはお人好しのピウィーだが、食べ物がからむと、なかなか挫けない。
さすがのフレデリックも、降参せざるをえない。
「わかった。わかったよ。おれがおごるから」
「やったあ、決まり！　さあイーヒン行こう。君は何が好き？」
「えっ。誰が好きなんて、いきなり言われても……」
イーヒンの頬が、ふたたび赤くなる。
「違うよ。人じゃなくて食べ物のこと。ぼくは洋食なら、フライとかハンバーガーとかピザ

とか。日本食ならテンプラ。中華なら酢豚とかハルマキとか……油で揚げた揚餃子なんてのも、いいねえ」
ピウィーは唾を飲みながら、イーヒンの肩を抱いて、部屋を出ていく。
後に残ったヤンは、腕まくり。
「わたしも、今日は飲むわッ！」
弾む足取りで、ピウィーたちの後につづいた。

１７

司令室に戻ったオルソンは、大きくため息をつき、椅子に腰を下ろした。
デスクの上の葉巻をとり、火をつける。
「新聞記者、ハッカーに、逃亡兵か……。やっかい者ばかり、増やしおって」
デスクに、両足を乗せる。ゆっくりと、葉巻をくゆらせた。
電話の呼び出し音が、響いた。
デスクの上の電話機を、ぼんやりと見やる。
外線からの送信を示すライトが、ついている。

表情が、険しくなった。

ふつう交換手経由で、つながるはずだ。直接かかってくることなど、滅多にない。

デスクから、足を下ろした。葉巻をトレーに、押しつける。

緊張した表情で、受話器を取った。

〈オルソンか〉

受話器の向こうから、男の声――。

冷たく、不気味なまでに落ちついた、聞き覚えのある声だった。

オルソンは、室内に誰もいないのを承知で、あたりを見回した。

誰もいないのを、確認してから、

「やっぱり、お前か」

〈わたしの部下が、おまえのところにいるそうだな〉

「今、会った」

〈どうする気だ〉

「キャニオンクロウで、管理するそうだ」

〈お前が、決めたのか〉

「ロイドだ」

沈黙。そして、嘲(あざけ)りとも欺(あざむ)きともとれる笑いが、電話の向こうでした。

やがて。
〈わかった〉
と、つぶやく。
「何、心配いらんさ。何かあったら、抹殺指令を出す」
オルソンの頬に、微笑みが浮かぶ。
キャニオンクロウの面々と対峙したときとは、微妙に違った笑みだった。
心の奥から、滲（にじ）んでくるような微笑み。
残忍な香りを、ともなっている。
しかし、電話の向こうから聞こえる声は、いちだんと無慈悲だ。
剃刀のような切れ味と、氷のような冷たさで言う。
〈ところで、おまえのところのマテリアルどもの調子はどうだ？〉
すかさず、オルソンは言った。
「それは、さっきも見てたんじゃないか？」
一本、取った。頬の微笑を、そんな風に変化させ、
「あの通り優秀な連中だよ。他人の心配をしている場合ではなかろう？」
と、追い打ちをかける。
けれども電話の声は、まったく動揺しない。

それどころか、反対に冷酷さを増し、押し殺した声で、

〈また、連絡する〉

と、だけ言って、一方的に電話を切ってしまった。

「クソッ」

オルソンは、受話器を叩きつけた。

手のひらを見て、顔を歪める。

いつの間にか、汗がびっしょりと、浮かんでいた。

１８

フォートモーナスの街中にある〝クリスタル〟というバーの店内だった。

カウンターの片隅に、フレデリックが、すわっている。

酒にはほとんど手をつけず、ノート型パソコンに向かっていた。

ＯＣＵ軍が、ことごとく勝利をおさめ、すでにほとんどの都市を制圧した。

ＵＳＮ軍の手にあるのは、もはや南東の港町ルーピディス市くらいのものだ。

ＯＣＵの上官からつかんだ情報では、ＯＣＵはまもなくＵＳＮに対して、ハフマン島からの即時武装解除及び撤退を、ワシントンのＵＳＮ国防省に打電するそうだ。
兵士やヴァンツァーの数で、圧倒的に不利だったＯＣＵ軍が、これだけ短期間のうちに連戦連勝を重ねたのは、様々な原因があり一概には言えない。
けれども私には、ひとつの確信がある。
それは傭兵部隊〝キャニオンクロウ〟の活躍だ。
戦闘時の彼、彼女たちを一言で現すと、まさに〝クレージー〟である。
相手の命を、虫けらほどにも思わず、殺害する。
個々によって、その殺戮の方法は、違っているが、残忍さはかわらない。
自分から従軍を申し出たものの、あまりの酷さに、心の底で後悔したことは、一度や二度ではない。
戦闘時、私は敵を助けようとしたことも、多々ある。
私自身、隙を見て逃げだそうとしたことも、幾度となくある。
しかし、そうしなかったのは、私の中にある〝記者魂〟。
そして、もう一つ……〝家族〟との問題だ。
逃げるのは、簡単だ。
たんに記者としてだけだったら、とうに尻尾をまいていたかもしれない。

しかし、ここから逃げたら、私は何者なのだ。
離婚問題からも、目の前の戦闘からも逃げてしまう。
それは結局、自分自身から逃げることに、他ならないではないか。
だから、足の震えを隠し、キャニオンクロウの面々に対しても、虚勢を張ってきた。
彼らと会う前、戦闘に行く前には、必ずウイスキーを口にした。
はずかしながら、一日で一本、ボトルを空にしたこともあった。
ところが、酒量もここ数週間、減る傾向にある。
それとともに、キャニオンクロウの面々に対する考えも、変化してきた。
彼らが単に〝クレージー〟でないと、気づいてきたからだ。
別れた恋人を、捜し求めるロイド。
虚弱な肉体を隠して戦うキース。
単なる金の亡者に思えるＪＪも、一人でいるときに見せる底のない悲しい表情をみると、
何か訳がありそうな気がする。
副官のナタリーについては、これはキャニオンクロウの連中にも、また彼女自身にも問いただしていないが、ブレイクウッド将軍の一人娘なのだ。
それなのに、なぜ彼女が、危険極まりない傭兵部隊にいるのか？
もし自分がブレイクウッドで、ナタリーがナオミだったら……。

そう考えると、私などの理解を越えた何かあるように思える。
またサカタについては、確証はないものの、その驚くべき出身をつかみかけている。
もしサカタが、本当にそうだとしたら、これまた一大スクープといえる……。
今、私は、この島へ来たことを、後悔していない。
それどころか、キャニオンクロウに従軍できて、幸運だったと思っている。
記者としても、人間としても。
一緒でなかったら、見えなかっただろう戦争の裏面、そして人間の裏面が、おぼろげながら見えてきたような気がするからだ。
戦争終結は、近いかもしれない。
しかし。私の仕事は、これからだ。
この戦争に仕組まれた罠を、パクが命がけでつかみかけた陰謀を探り出すため、全力を傾けるつもりだ。

「お客さん。熱心だね。マスコミの人かい？」
バーテンの声に、フレデリックは、我に返った。
「まあね」
「やっぱりそうか。記事を打ってるのかい？」

「いや、単なる記憶のメモってところさ。……それより、何か記事になりそうな話はないかい？」
フレデリックは、ノートパソコンを閉じながら、尋ねた。
酒場は、情報を得るかっこうの場所なのだ。
それを証明するかのように、バーテンはしばらく思案してから、
「そうそう。お客さん〝ハフマンの魂(スピリッツ・オブ・ハフマン)〟って、知ってるかい？」
「〝ハフマンの魂(スピリッツ・オブ・ハフマン)〟……初耳だな」
「この辺りに出没するテロリスト集団さ」
「テロリストだって。OCU軍の勝利を恨むUSN軍の奴らか何かかい？」
「それが、違うらしいんだ。連中は絶対に、民間を狙わない。狙うのは軍隊ばかりで、しかもOCU軍、USN軍の見境(みさかい)なく襲うってウワサだよ」
「両軍を、見境なくだって」
「な、妙な話だろ？」
「ああ……」
たしかに、不思議な話だった。
だが、そのとき。
フレデリックの脳裏に、パクの手紙の一節が思い浮かんだ。

〝私はS・Hという組織と接触し、この戦争に仕組まれたカラクリの一端を知った〟
という一節が。
S・Hというのは、もしかしてSpirits of Huffman（スピリッツ オブ ハフマン）の略だったのでは。
フレデリックは、立ち上がり、身を乗り出した。
「もっと知ってることがあったら、教えてくれ」
「あ、ああ……」
バーテンは、戸惑っている。
視線が、フレデリックの後ろに、注がれていた。
フレデリックは、振り返った。
ロイドが、立っていた。
「オルソンから、召集がかかった」
「わざわざ、それをおれに知らせるために？」
「外を通ったら、あんたが見えた。あとは気まぐれだ」
ロイドは、それだけ言って、背中を向けた。
歩きだす。店から出ていく。
「ごちそうになった」
フレデリックは、バーテンに十ハフマンドル札を握らせた。

「あっ、こんなに……」
「いいから。他にも何か情報があったら、また教えてくれ」
礼を言うバーテンを手で制し、あわててロイドの後を追った。

１９

「彼は、民間人だ。この場は、退席してもらいたい」
ロイドと共に、軍オフィスを訪れたフレデリックを見て、オルソンが言った。
すでに他のメンバーは、集合している。
「他のメンバー同様、俺の指揮下にある以上、同席は当然だ」
ロイドは、オルソンを見つめて、言った。
睨み合う。
ロイドは、譲らない。
五秒ほどで、オルソンが、折れた。苦笑して、話をはじめた。
「ＵＳＮの降伏は、目前に迫った。分散した敵部隊の追撃を行うまえに、臨時の仕事を引き受けてもらいたい」

「金さえいただけるなら、何でも引き受けますよ」

JJが、言った。

「サカタインダストリイの会長である坂田玲二氏が、工場の現地視察のため、フォートモーナス市に、訪れることになった。その出迎えをやってもらいたい」

フレデリックは、サカタの顔を、盗み見る。

表情が、硬い。異常といって、いいほど、硬くなっている。

「しかし、サカタインダストリイって言えば、OCUだけじゃなくて、USNにも武器を流してるっていうじゃねえか」

キースが、言う。

それを証明するかのように、イーヒンが言った。

「ええ。ぼくたちの使わされていたヴァンツァーは、すべてサカタインダストリイのものでした。もっとも、故障が多くて『試作品を使わされてるんじゃねえのか』なんて文句が絶えませんでしたが」

「それならOCUもUSNも、襲う心配はねえだろう。故障品をつかまされた消費者の抗議運動くれえは、起こるかもしれないけど」

「オレたちの出る幕は、ねえんじゃねえの？」

「たしかに」

キースの言葉に、ヤンが同意した。それを受けて、オルソンが説明する。
「この付近に〝ハフマンの魂〟と名乗るテロリストグループが、出没するというウワサがある。武装した凶悪集団だ」
「テロリストか。それなら、はじめから言えば、いいのに」
「まあＵＳＮだろうと、テロリストだろうと、金のなる木にゃかわりない」
キースとＪＪは、オルソンを無視して、勝手に、腰をあげた。
他のメンバーたちも、同様だ。
自分が司令官であることを、再確認させるかのように、オルソンが怒鳴った。
「全員、大至急フォートモーナス市郊外の仮設へリポートへ向かえ」

まだ、夜が明けきってはいない。
東の空が、漆黒から紫に変化しはじめたばかりだ。
天空のあちらこちらで、星々が最後の輝きを見せつけるように、光っていた。
フォートモーナス市郊外。
なだらかな草原に、設置された仮設へリポートが、その影を投げかけている。
キャニオンクロウのメンバーは、各自のヴァンツァーを、茂みや草の下に隠して、待機している。

動きがあるまで、会話は厳禁だ。皆、無言で、無線に耳をすます。
何か通信が入ると、ハンスがキャッチ。すぐに全機に、流すことになっている。
そうやって待機して、かれこれ二時間近く。そろそろヘリが着いても、いい頃だ。
と、そのとき。沈黙が破られた。
〈こちら、SI―1号機。もうまもなく到着します〉
ヘリのパイロットの通信らしい。
すぐに、別の声が飛んだ。
〈見つけたぞ。あのヘリに坂田が乗っている。攻撃開始！〉
各機ヴァンツァーのレーダーに、仲間以外を現す光点が現れた。
その数、十四。
もう沈黙を、守る必要はない。
「正体不明のヴァンツァー発見！」
ナタリーが、叫んだ。
「USNか？」
と、キースが訊く。
「いや、ちがうな。動き方に統制がない」
JJが、光点を見据えて、言った。

「じゃ、じゃあ。テロリスト？」
ピウィーが、声を震わせた。
と同時に、敵の一機が、火を吹いた。
花火のように飛んだ火の筋が、薄暗い上空で弾けた。
宙に大きな火炎の華が咲いた。
ミサイルランチャーが、ヘリに直撃だ。
ヘリは、大きくバランスを崩した。しかし、撃墜まではいたらない。
「戦闘開始。まず敵ミサイラーから、倒せ」
ロイドが、指令を飛ばす。
キャニオンクロウが、躍動した。
宙を舞う、地を這う。
サカタの動きが、いつもより数段速い。
真っ先に、ミサイラーに駆けより、無情に破壊。
「ケッ、サカタ、燃えてるな」
「オレにも、譲ってくれよ」
キースとＪＪが、つぶやいたとき。すでにサカタは、別のミサイラー目がけて、突進していた。



敵のあわてふためく無線を傍受したのは、それから一分ほどのことであった。
〈隊長。待ち伏せです。われらのミサイラー四機、すべてがやられました！〉
〈ちっ、作戦は失敗だ。全機撤退。オレも機を捨てて、離脱する〉
「まて、逃げるな」
サカタが、叫ぶ。
しかしテロリストたちの、行動は迅速をきわめた。
即座にヴァンツァーから、離脱。闇夜にまぎれて、姿を消した。
サカタは、目を見開いて、レーザーを見つめる。
だが、敵らしい光は、一点たりとも発見できない。
「ハンス、敵は？」
「お手上げ！　ヴァンツァーや武器を捨てて、とんずらされたら、闇夜でネズミを探すより、難しいもの」
「くそッ」
サカタは、悔しそうに、捨てぜりふ。滅多にないことだ。
「えらく張り切ってたな」
ＪＪが、サカタに言う。
「何かテロリストに、恨みでもあるの？」

ヤンまでもが、真剣な口調で、尋ねた。
サカタは、無言で、空を見上げた。
ヘリは何とか無事に下降。仮設ヘリポートに、着陸しようとしている。
その傷ついた機体に、東の空から現れた太陽が、光をなげかけた。

２０

重装備の護衛たちに囲まれて、初老の男が、ヘリから下りた。
薄く白くなった頭髪を、後ろで一本に束ねている。
顔の皺が、深い。目を引くのは、眼光の鋭さだ。
目だけは、少しも老いていない。
いまだに、ダイヤのような輝きを、秘めている。
背筋の伸びた身体に、特注のＥＣ製のスーツが、見事にフィットしていた。
坂田玲二——。サカタインダストリイの創立者だ。
スタートは、父から譲りうけた日本の零細製薬会社だった。
玲二が社長になった時点で、多角的経営に着手。一代で、世界のトップ企業ベストテンに

リストアップされる大企業に育て上げた。
現在は息子の浩一に社長の座を譲り、会長に退いている。
だが、まだまだ老いこむ気配は、微塵も見られなかった。
護衛に守られて、ヘリポート脇の鉄階段を下りる。
正面に設置されたエレベーターに乗った。はじめから中にいた社員が、深々と頭を垂れて、玲二を迎えた。
エレベーターは、どんどん下降していく。地の底に、落下していくかのように。
耳が圧迫されて、キーンという音が響くころ。止まった。
扉が、開く。
玲二は平然と、エレベーターを、降りた。
メタルフレームでおおわれた通路が、続いている。
フォートモーナス市郊外に、つくられたサカタインダストリイの地下工場だった。
「お待ちしておりましたよ。会長」
エレベーターの脇に、立っていた男が、声をかけた。
三十代、前半だろう。
ゆったりとしたスーツ越しに見ても、その痩せ方は病的といえる。
こけた頬、とがった鼻、細い目から、神経質な雰囲気が漂っていた。

「来ていたのか、浩一」
玲二が、言った。
坂田浩一。
玲二の長男、そして、現サカタインダストリイの社長である。
五年前。二十代の若さで、社長に就任した。
玲二が着手していた武器製造を、メイン業務に切り換えた。
――何と言っても、武器ほど儲かるビジネスはありません。それは歴史が、証明していますからね。
社長就任直後。業務の大幅な入替えに対して、玲二が真意を尋ねたところ、浩一から返ってきた答えが、これだった。
〝キレる〟
浩一に対する、玲二の評価だ。
たしかに自分も、一代で弱小製薬会社を、世界的な企業にした男だ。あぶない橋も、数えきれないほど、渡ってきた。
贈った賄賂（わいろ）の額も、闇に葬（ほうむ）った者の数も、数えきれない。
だが、その玲二以上に、浩一は〝キレる〟。
いい意味で、大胆。

悪い意味で、世間知らずの面がある。それは苦労しらずで、育った者の特権でもあるのだが……。

浩一の〝キレ〟の鋭さが、頼もしくもあり、また怖くもあった。

だから、会長に就任してからも、できるだけ目を光らせている。

それが、浩一には、うっとうしいのだろう。最近では、意識的に、玲二を避けるようになっていた。

また、言葉つきも、変化した。

水入らずになっても、人前同様に、敬語を使うのだ。

「会長の身が、心配だったものですから」

二人きりで通路を歩きながら、浩一が言った。

本当に、心配なのか。

厄介者を始末するため、浩一がヘリを襲わせたのでは……。

一瞬だったが、玲二の脳裏に、そんな思いすら浮かぶほどだった。

すぐにそんな思いを、ふり払うよう言った。

「いそがしいのか」

「はい。しかし、この危険な時期に、なぜ現地視察になどいらっしゃったのですか？」

「おまえが、勝手をせぬよう見張るためだ」

玲二は、正直に言った。
浩一は、立ち止まって、玲二を見た。
「私が？」
と言って、とつぜん、笑いだした。腹を抱えて、大笑いした。
玲二は、笑わない。憮然と浩一を、見つめる。
「し、失礼。会長が、あまりに面白いジョークを、おっしゃるものですから」
「わしはジョークも、面白いことも言ってはおらん。真実を言ったまでだ」
それを聞いた浩一は、さらに大声で笑った。
「それで、仕事の具合は、どうなんだ？」
いつまでも笑いを止めない浩一に対して、玲二はいらだたしそうに尋ねる。
「ククク……。心配には、及びません。メタルワーカープロジェクトは、順調に進んでおります。それより――」
浩一は、唐突に笑いを止めた。
今まで、笑っていたのが嘘のように、冷めた目で、玲二を見つめて言った。
「あのテロリストどもを、始末する必要がありますね」
さっき考えたことを見透かされたような気がして、玲二は目を逸らし、
「あ、ああ。そろそろ方針を、転じねばならんかもしれん。わしからも、両国の首脳に相談

しておこう」
　と、つぶやく。
「そうしていただけると、ありがたい。首脳クラスになると、私のような若造では、足元を見られるので、どうしても会長のご援助が必要なのです。ところで……」
　ひとつの物事の終わりに、必ず余韻を残し、相手を探るように見つめる。浩一の癖だった。
「気がつかれましたか、会長？」
「な、何にだね？」
「さっきテロリストから、会長のヘリを守った連中のことですよ」
「ＯＣＵの傭兵部隊だろう？」
「ええ」
「あの二人から、前後して電話があった。テロリスト対策に派遣したと」
「他には？」
　探るような目で、玲二を見る。
　猜疑心(さいぎしん)に満ちた瞳。何か隠しごとをしていないか、決して見逃そうとしない瞳……。
　とても息子が、親に向ける目つきではなかった。
　玲二は、威圧を込めた目で、見つめ返した。視線に、非難をこめて。

浩一は、唇をニヤリと歪めて、うつむき、
「本当に、知らないようですね」
「だから、何のことだ！」
「竜二ですよ」
浩一は、ぽつりと言った。
「りゅ、竜二だと……」
予想だにしていなかった言葉に、玲二は二の句が告げなかった。
「そうです。あの傭兵部隊に、竜二がいたんです」
「竜二が、あの中に……」
「会長が乗っていると知って、夢中で戦ったようです。親思いのアイツらしいとは、思いませんか？」
あざ笑うような目を、玲二に向ける。
しかし玲二は、睨み返せなかった。それほど動揺が、激しい。
「さて、会長。すぐに視察をされますか？　それとも、ご休憩されますか？」
浩一は、唇に笑みを浮かべたまま、馬鹿丁寧に尋ねた。
「す、少し、休みたい……」
玲二は、取り出したハンカチで、額の汗を拭う。

「そうですか。そう思いました」
浩一は、立ち止まり、近くのドアを開けた。
中は、寝室になっていた。
ゆったりとした広さ。高級ホテル、VIPルーム並のコーディネートが施されている。「さあ、どうぞ。長旅で、さぞお疲れのことでしょう。ごゆっくりお休みください」
浩一は、ドアの脇に立って、玲二をうながす。無理やり、押しこむかのように。
ふだんの玲二だったら、睨み返し、何事か毒づいているところだ。
しかし、玲二は黙って、部屋へ入った。
「横になって、ごゆっくりと……」
ドアが締まり、一人になった。
ほうぜんと、たたずむ。
ぽつりと、つぶやいた。
「竜二が、この島で、傭兵部隊にいたとは」
わずかな間に、実際の年齢以上に、老いたかのようだった。

眼下にハフマン島の山々が、続いている。
美しい南半球の自然に覆われた、南国の楽園。
とても戦火に、包まれているとは、思えない。
だが、それも、終わりに近づこうとしている。
「クッ。今頃になって……」
ブレイクウッドは、島の風景を見下ろしながら、舌打ちをした。
隣にすわった、オルソンが言う。
「ご機嫌ななめのようですな」
ＯＣＵ軍のヘリの中。ルーピディス市へ、移動中である。
「当然だ。完全勝利を目前に、停戦合意だと。政治家どもは、何を考えているんだ」
ブレイクウッドは、吐き出すように言った。
オルソンは、苦笑しながら、
「停戦は、国際平和維持機構の調停に、基づくものです。われわれには、どうすることもで

きません」

と、取りなすように言う。

ブレイクウッドの表情が、いちだんと険しくなった。オルソンを睨みつけて、

「ザーフトラ共和国のいいなりになれ、というわけか」

と、怒鳴る。

「仕方ありません」

「仕方がないものか。ザーフトラ共和国など、ハイエナだ。ろくに力などないくせに、過去の大国ソ連、ロシアという幻影にすがりついているだけにすぎん」

ブレイクウッドの言葉に、オルソンの表情が強張った。

だがすぐに悟られないように、曖昧な笑みを浮かべ、

「われわれにできることは、これ以上無駄な犠牲者が出るまえに、若者達を戦場から引き上げさせることだけです」

今度はブレイクウッドが、苦笑する番だった。

「君の口から、そんな言葉がでるとは、信じられんな」

ふたたび視線を、窓の外へと戻す。

目を凝らす。山岳の間に、様々な光に輝く点。

ヴァンツァーだ。戦闘に、備えている。
無理もない。彼らはまだ、停戦の決定を知らないのだから。
反対側の窓から、オルソンが、外を見た。
地上にヴァンツァーを、確認したのだろう。
「そろそろ指令を、伝える時間ですね」
懐から、携帯電話を取り出す。
番号をプッシュ。
「き、君は……」
ブレイクウッドは、懸命に言葉を飲みこむ。
「仕方ありませんよ。これが私の任務ですから……ああ、私だ」
オルソンはサングラス越しに、ブレイクウッドを見ながら、彼の娘に話しかけた。
「指揮系統を破壊されたＵＳＮは、退却を繰り返している。
われわれは、この勝利を確実なものとするべく、追撃作戦を行うことになった。君たちも、作戦行動を開始してくれ」
――何が〝これ以上無駄な犠牲者が出るまえに〟だ。平気で矛盾を犯しておる。
ブレイクウッドの顔の皺が、憎々しげに歪む。
わかっている。承知している。

これが戦争だ。これが、コマを動かす上層部のやることなのだ。
自分を、はじめとして……。
受話器を奪い取りたい衝動を、必死にこらえた。娘に真実を伝えたい衝動を……。
島を、見下ろす。
まだ火の気は、あがっていない。爆音も、聞こえない。今なら、間に合う。
オルソンの指令を横で聞きながら、ブレイクウッドは、無言で耐えた。
握りしめた拳が、白く血の気を失っている。

「了解。ただちに敵部隊の追撃を開始します」
オルソンから指令を受けた、ナタリーが叫んだ。
すぐに、ハンスの声が飛ぶ。
「敵部隊発見！　南南東3・4キロ地点を、退却中。数、十五機――」
「よっしゃ。逃がさねえぜ」
キースが、ダッシュ。
「十機ほど、おれがいただく」
JJが、並んで、飛び出す。
「おい。慎重にしろ！　敵も死にものぐるいだろうからな」

ロイドが、叫んだとき。既に二機は、敵部隊の間近に移動していた。
ヤン、イーヒン、サカタたちも、同様だった。
砲煙が上がり、大地にオレンジの炎が咲く。
すぐに、敵部隊からの無線が響いた。
〈た、隊長！　追いつめられました〉
聞いているだけで、怯えが伝わってくる。痛々しい声だ。
〈ひるむな。全機突撃準備！　われわれはかつて二十世紀、世界を斡旋したＵ・Ｓアーミーの血を引く部隊だ。ＵＳＮの誇りを、連中に見せてやれ！〉
〈りょ、了解！〉
だが士気に、大人と子供以上の違いがあった。
完全に、キャニオンクロウは、敵を飲んでいる。
それでも逃げださず、懸命に立ち向かうＵＳＮ軍。最後まで、軍人としての誇りを失わない姿は、立派である。
「おい、いいんだぜ。今回だけは、白旗をあげても」
キースが、言った。敵に聞こえるのを、意識して。戦闘中、彼がそんな言葉を口にするのは、初めてだった。
「どうせもうすぐ国に帰るなら、生きて帰った方が、いい」

ＪＪまでもが、そんなセリフをつぶやく。

何かふだんとは違ったムードが、漂いはじめた。

そんな雰囲気を、察したかのようなタイミングで。

無線が、鳴った。

〈ＯＣＵ及びＵＳＮ両軍の兵士に告げる。

両国は本日16時、停戦を決定した。両軍ともすみやかに、最寄りの自軍基地まで撤退せよ。

繰り返す。両国は、本日停戦を決定……〉

「戦闘中止！」

〈いったい、どういうことなのです！〉

ロイドが、叫ぶ。

敵の兵士が、上官に尋ねた。

〈どうもこうもない。戦争は終わったのだ。すぐ戻ってこい〉

〈ばかな。それでは、何のためにわれわれは、戦ってきたのですか――！〉

敵の兵士は、だいぶ激昂している。

〈それが、戦争というものだ〉

〈ぐぅぅ……〉

〈至急、撤退せよ〉

〈い、嫌です！〉
〈何だと？〉
〈こ、このままでは、死んでいった者たちに、顔向けができません！〉
敵部隊が、戦闘態勢に入った。
ナタリーが、叫ぶ。
「隊長。敵は後退しません。こちらへ、向かってきます！」
「まだ、やる気なの！」
ヤンが、叫ぶ。
「どうするんだ？」
キースが、尋ねる。
「そ、そんなバカな……」
サカタが、つぶやく。
どの声も、悲痛な響きをもっていた。
「ウワーッ！」
イーヒンの右アームが、敵の砲撃で飛ばされた。
「た、助けて〜ッ。狙い撃ちされてるよ〜っ」
ピウィーが、悲鳴をあげる。

ロイドが、決断した。
「やるしかない。全機、戦闘再開！」
「ま、まて。もう戦争は、終わったんだぞ」
フレデリックが、言った。
すぐにフレデリックの、ヴァンツァーに衝撃。砲弾が食いこむ。
ロイドは無言で、その相手にツィーゲライフルを打ちこむ。
一分とかからず、戦火は止んだ。
「敵部隊……全滅です」
ナタリーが、唇を噛んだ。
見回す。敵ヴァンツァーの残骸が、無残な姿で点在している。
「ばかな。どうして……。戦争は終わったのに……」
フレデリックが、目を見開いた。
「後味の悪い戦いに、なっちまったな」
キースが、苦々しげに、言った。
沈黙。無言で、立ち尽くす。
ぽつりと、ＪＪが言った。
「戦争が、終わったか……」

〈昨日、第二次ハフマン紛争は、その幕を閉じた。
この停戦は、国際平和維持機構の最高常任理事国である、ザーフトラ共和国の提案をＯＣＵ、ＵＳＮ両国が受け入れることで成立した。
ハフマン島駐留の両軍部隊は、しばらくの間、平和調停軍として、ザーフトラ共和国の管理下におかれることとなった。
国際世論は、今回のザーフトラ共和国の活動を〈正義の調停〉と讃え、長らくその存在意義を疑問視されつづけた国際平和維持機構に、注目が集まっている。
――ニューヨーク・デイズ紙より――〉

ルーピディスのＯＣＵ軍オフィスについたオルソンの元に、直通電話がかかってきたのは、停戦が決定してから、一時間後のことだった。
受話器を取ると、相手は一方的に、話しはじめた。
〈ここまでは、シナリオ通りだ〉
「ああ……」
〈わが祖国は、失われた地位と名誉の回復への一歩を、踏み出したことになる〉
「……」
〈いいか、おまえの任務はこれからが本番だ。わかっているだろうな？〉

「しかし、彼らはマテリアルとするには、反抗的すぎる」
〈どうした。今頃になって、弱気になったのか？〉
「……」
〈その点は、坂田に、まかせておけばいい〉
「坂田に、だと？」
相手は、オルソンの問いには、答えずに、
〈おまえは、ヤツらを逃がさないよう監視すればいい。そして我が祖国が描いたシナリオを、忠実に実行するのだ。わかっているな〉
「し、しかし」
〈いまさら迷いなど、禁物だ。ミスがあったら、すぐに貴様の首も飛ぶ。それを忘れるなよ、オルソン同志〉
「わかっている」
電話は、切れた。
オルソンは、受話器を置かない。通信音が、響く。
表情が、石像のように、硬い。
サングラスの脇から流れる、一しずくの液体……。
それが汗なのか、涙なのか、定かではなかった。

２２

フォートモーナス市、軍オフィスの作戦司令室だった。

オルソンとキャニオンクロウの面々が、向かい合っている。

「知っての通り、この島の両軍の部隊は、全て平和調停軍に編入された」

オルソンが、言った。

「ってことは、キャニオンクロウの解散式って、わけかい？」

ＪＪが、尋ねる。

「いや。われわれキャニオンクロウは、テロリスト集団〝ハフマンの魂〟の駆逐が、主任務となる」

「われわれキャニオンクロウねえ……」

キースは〝われわれ〟というセリフに、ことさらアクセントを置いて言った。

一瞬、頬を引きつらせただけで、オルソンは言葉をつづける。

「銃を向ける先は変わったが、いままで同様に、任務を遂行してもらう」

「報酬金も、値下げなんてことは、ないだろうな？」

　ＪＪが、尋ねた。
「もちろん。そんなことが、あるわけがない」
「いえね。ザーフトラ共和国が、からんできたって言うから。アソコの連中は、金をもらうのは好きだが、払うのが大嫌いと聞いて……」
　ＪＪの言葉を、オルソンが、打ち消した。
「早速だが、指令だ。この町の北東に、元ＵＳＮ軍の野戦病院がある。そこのブラウンという医者が、テロリストと内通している疑いがある。彼の調査が、次の任務だ。準備を整え次第、出発しろ」
「おい、ちょっと待てよ。連戦つづきで、まともにメシも食ってねえんだぜ」
　キースが、文句を言う。
「以上だ」
　それだけ言うと、オルソンは、あわただしく司令室を出ていった。
「チッ、傭兵部隊は、人間扱いしねえって、ことかよ」
　キースは、テーブルを蹴った。
「隊長……」
　ナタリーが、判断をあおぐように、ロイドを見た。
　ロイドは、静かに、腰を上げた。

「三十分後、発進する。ただし、強制はしない。希望者だけでいい」
それだけ言うと、司令室を後にした。通路を歩く。
「待ってくれよ！」
フレデリックが、追いかけてきた。
「おかしいと、思わないか？　いきなり停戦。待ってましたとばかりに、テロリストと内通している医者の調査。できすぎてるぜ」
ロイドは、立ち止まらない。
フレデリックは、一方的に、話しかける。
「〝ハフマンの魂〟について、いろいろ情報を集めたんだ。ヤツラ、単なるテロリストとは、思えないんだ。民間は絶対に攻撃しないかわりに、サカタインダストリイを目の敵にしてる。何か、思惑か信念があるように、思えるんだ」
「俺は、一傭兵にすぎない。命令に従うだけだ」
ロイドは、歩きながら、言った。オフィスから、外へ出る。
町は停戦を受けて、人でごった返している。
あちこちで、祝杯を上げている者がいた。
「おれには、そうは思えない。命令を無視するなんて、あんた、お手の物だからな」
「……」

「あんた、ただ傭兵部隊という立場を利用しているだけなんじゃないか?」
フレデリックは、執拗に食らいつく。
それでも、ロイドは足を止めない。
フレデリックは、いらだったように、言った。
「恋人の行方を探すことしか、頭にないんじゃないのかい?」
ロイドの足が、止まった。
フレデリックに、詰めよる。険しい目で、睨む。
凄まじい剣幕に、フレデリックは、息を飲んだ。
殴られる――そう覚悟したとき。ロイドは視線を逸らし、
「そうかもな……」
と、つぶやいた。
そのとき、フレデリックは知った。
ロイドの目にあるのは、怒りでないことを。
それは……たとえて言うならば、荒野であった。
枯れ果てた大地に、ただ風だけが吹きすさぶ荒野が、ロイドの瞳にある。
フレデリックは、後ずさった。
ロイドは、視線を合わせようとはせずに、立ち去っていく。

すぐに人混みの向こうに、姿が消えた。

２３

元ＵＳＮ軍の野戦病院は、荒れ果てた大地に、へばりつくようにあった。
建造物ではない。
軍用テントだ。
大小あわせて十近いテントが、点在している。
テントの合間を、走り回る子供たち。話しこむ中年女の姿も見られる。
「話を聞いてくる。皆はヴァンツァーで、待機していてくれ」
ロイドは、ヴァンツァーを下りた。
「一人じゃ、危険だ。もう一人……」
キースは、言葉を止めた。
ＪＪが、言葉をつづけた。
「おれも、行くぜ」
ＪＪが、ヴァンツァーを飛び下りた。

「おれも行く。聞きこみに関しちゃ、プロだからな」
二人の後に、フレデリックが、続く。
すぐにフレデリックは、近くにいた中年に、声をかけた。
「すみません。トキオ・タイムスの記者なんですが、ここにドクター・ブラウンって方がいるそうですね」
緊張気味だった女は、ブラウンの名をきいたとたん、表情を緩ませた。
「ドクターのおかげですよ。うちの子供たちが、元気でいられるのも。ねえ皆」
女が、呼びかけると、とたんに人だかりができた。
人々は口々に、ブラウンのことを、話しはじめた。
「ドクターのこと悪く言う人なんて、ここにはいません」
「あの人、口は悪いが、とってもいい人だよ」
「戦争が終わったから、怪我人は町の病院にほとんど送ったんだ。でもドクターは、なぜかここに、居残ってくれたんだ」
フレデリックは、人々を制した。
「ありがとう。わかりました。あとは直接、ドクターに会って、話をききますから」
「あんた、ドクターのこと悪く書いたら、私らが承知しないよ。ねえ皆」
「そうだぜ。英雄として、派手に書き立ててくれや」



人々は、会話に飢えていた様子だ。
いったん口火を切ると、なかなか止まらない。
「後は、まかせたぜ」
ＪＪはフレデリックに、ウインク。ロイドといっしょに、ブラウンがいると教えられたテントへ向かう。
ロイドと並んで歩きながら、ＪＪがぽつりと言う。
「おれには、わかる気がする。病気や栄養失調で死にそうな老人、子供を抱えている連中にとっちゃ、医者は神様だ」
何かを思い出すような、目つきだった。
辺りを見回し、
「もっとも。ずっと、ヒデえところだったけど……」
と、一人で、つぶやいた。
ブラウンがいると教えられたテントは、小型トラックほどの大きさだった。
「ふうッ。ドクター・ブラウンは、気味悪いくらい、評判がいい」
フレデリックは、汗を拭きながら、やって来た。
失礼……と声をかけて、ロイドは、テントの中に入った。
武器を構えたＪＪ、その後ろに、フレデリックが続く。

白衣の男が、診察台に向かっている。
診察台には、幼い子供が乗っていた。ぐったりと元気がない。
母親らしい女が、子供の手を握っていた。
「ジミー。元気を出して、ジミー……」
涙を流しながら、話しかけている。子供は、反応すらしなかった。
「誰だ？」
顔もあげずに、男が言った。
「ドクター・ブラウンですね？」
ロイドが、尋ねた。
男は、顔をあげた。
名前のとおり茶色の髪と髭。どちらも伸び放題だ。
分厚い眼鏡で、目が二重に見えた。
「何者だ、おまえら？」
「平和調停軍です。あなたに、テロリストとの内通容疑が、かかっています。その調査にきました」
「テロリストだとッ？　バカな」
ブラウンは、激しい剣幕で、

わけなかろう」

「わしは、OCU軍の科学技術将校だった男だ。そのわしがテロリストなんかに、加担する

「しかし」

「出てってくれ。今、診察中だ！」

怒鳴る。取りつく島もない。

「出直そう」

JJが、言う。その目は、苦しむ子供に向いている。

ロイドは、コクリと頷き、テントを出た。

フレデリックが続く。

JJは、無言で、目を閉じた。少年に向かって、誰にも知られず、祈りを捧げてから、外へと出た。

「おれたちはスパイじゃない。調査なんてむりだぜ」

JJが、言った。

「とにかく、おれはもう少し、テントをまわって、情報収集してみる」

フレデリックが、人々のいるテントへ、足を向けた。

その足元が、突然、隆起した。

中から、正体不明のヴァンツァーが、姿を現す。

その数、五機――。
悲鳴。逃げまどう女や子供たち。
「何者だ！」
ロイドが、銃器を構えた。
先頭のヴァンツァーが、言った。
「俺たちは〝ハフマンの魂〟のものだ。ここにいるブラウンを、渡してもらおう！」
「ブラウンに、何の用だ!?」
「ブラウンは、おれたちを裏切った。表では俺たちに協力していながら、裏で平和調停軍におれたちの情報を流しやがったんだ！」
「何だって」
「そこを、退いてもらおう」
「……」
「さもなくば、病院ともども、吹き飛ばしてやる」
敵は勝ち誇ったように言う。
ＪＪが、進み出た。
「ここは、オレが通させはしない」
手にしたマシンガンを連射。

弾はヴァンツァーの合金に、ことごとく跳ね返される。
「ははは。生身でヴァンツァーに立ち向かうとは、時代錯誤のニガーだ」
敵ヴァンツァーは、高笑いしながら、手にしたショットガンを、JJに向けた。
「逃げろ、JJ！」
ロイドが、叫ぶ。
だがJJは、退かない。
「このテントには、入れさせないって、言ってんだ。うわ――ッ！」
絶叫しながら、マシンガンを撃つ。
弾を撃ちおえたとき。
敵ヴァンツァー五機は、ことごとく大破していた。
JJは、無事だ。
ロイドやフレデリックも。
またテントも、他の人々も、怪我ひとつおおっていない。
「かっこよかったぜ。相棒」
キースが、ヴァンツァーの中から、言った。
手にした〝F―3ハンドロッド〟は、べっとりと赤黒く染まっていた。
「まったく無謀なんだから。わたしたちに任せてればいいのに」

ヤンが、笑う。
「見直したよ。ＪＪ」
サカタが、言った。
「暑さにやられたようだ。水でも飲んでくる」
ＪＪは、スッと背中を向けて、歩きだす。
その言葉を、聞いていたのだろう。
辺りにいた子供たちが、いっせいにテントの中に消え、水の入った容器を持って飛び出してきた。
ＪＪに駆けよる。
水の入った容器を、我先にと、ＪＪに差し出す。
「あ～、アチい！」
受け取った器の水を飲まずに、顔にかけた。
顔を水でグシャグシャに濡らしてから、ＪＪは子供たちの突き出す水に、美味しそうに口をつけた。

24

ドクター・ブラウンのテントの中――。
子供は、治療を終えて、すでに別のテントに移っている。
ブラウン以外には、ロイドとナタリー、サカタ。
フレデリック、ヤンとイーヒンがいた。
「あんたやっぱり、テロリストだったの？」
ヤンが、尋ねた。
「ちがう。わしは知らない。いいがかりだ」
ブラウンが、否定する。
「でも、それじゃあ、なぜ〝ハフマンの魂〟に、襲われたりするわけ？」
「それは、わしの方が、聞きたい」
「た、大変だ！」
ハンスが、テントに駆けこんできた。
「どうしたの？」

「あいつらテロリストじゃなかった！」
「何だって!?」
ハンスは、手にした部隊章を、ロイドに見せる。
「これはOCU正規軍の部隊章じゃないか。いったいどこに？」
「あいつらのヴァンツァーの中を探ってたら、出てきたのさ」
ロイドは、OCUの部隊章を見ながら、
「ということは、OCU軍がテロリストを装って、襲撃を……」
「いったい、どういうことなんだ？」
サカタが、言う。
ブラウンが、腰をあげた。
ゆっくりと歩きながら、
「OCU……やつら…とうとう、ここまで追ってきたか……」
「どういうこと？　説明してちょうだい」
ヤンが、いらだたしそうに、尋ねた。
ブラウンは、テントの幕際で、足を止めた。
「わしは……」
ロイドたちに、背中を向けたまま、

「OCU軍の科学技術将校時代、わしは秘密の研究をおこなっていた。それは人工受精によって造りあげた胎児の脳に、情報をインプットするというものだった」
「な、何だって。そんな非人道的な実験を……信じられない」
フレデリックが、言葉を飲む。
「たしかに、ひどい実験だ。しかし当時のわしは、名声を得ることばかり考えていた。罪の意識など、少しも感じていなかったのだ。
しかし、次の段階に進んだとき。さすがにバカなわしにも、やつらが目指す恐ろしさがわかった」
「次の段階って、他にも実験を、行ったのですか?」
ブラウンは、ゆっくりと、ふりむいた。
頷く。とても顔を上げていられない様子だった。
うつむきながらも、懺悔するように、
「わしは、OCUの将校から質問された。成人の脳を制御できるか、と……」
「成人の脳を!」
ブラウンは、頷き、
「わたしは答えた。理論上は可能だと。すると将校は言った。
『それなら、今日から君は、成長し経験のつんだ人間の脳を、記憶装置としてつかう実験に

取り組んでほしい』と。
そのときになって、愚かなわしは、はじめて、自分のしていることの恐ろしさに、気づいたんだ」
「何て、こった。信じられない」
サカタは、握った拳で、自分の膝を叩く。
「それはOCUの単独実験だったんですか？」
フレデリックが、一人冷静に質問した。
「研究バカだったわしには、裏まではわからない。しかし、わしは逃げた。怖くなって、必死に。そしてここまで、たどり着いた」
「だから、町に戻ろうとしなかったんですね？」
「それもある。しかし、わしはここで、人が生きるための役にたとうとした。ここの人々を救うために、命がけで……。
だが、わしの研究の罪をぬぐい去ることはできない。それどころかわしは、ここの患者まで、危険にさらしてしまった。もうここには、いられない……。わしは出てゆくよ」
ブラウンはゆっくりと、テントの入口へ歩む。
垂れ下がったシートを上げた。
そこには、たくさんの人々が、立っていた。

全員、真剣な目つきでブラウンを見つめ、通そうとしない。
「ドクター。あんたは立派な医者だよ。これからも、皆のために働いてくれ！」
頭に包帯を巻いた、男が言った。
「そうよ。いかないで！　いつまでも、私たちの支えになって！」
女が、言った。先ほど治療を受けていた少年の母親だった。
「あんたが、ここをでていくことが、解決じゃないんだ」
JJが、言った。
「ああ……ああ、わかるよ。みんな、ありがとう……」
ブラウンは、眼鏡をとって、うつむく。
「しかし……わしは、いくよ」
顔をあげた。険しい目つきだった。
「OCUは、またここにやってくる。わしを探しにな。そのとき、わしはここにいる人たちを、とても守りきれない……」
分厚い眼鏡を、かけなおす。
「ドクター……」
「心配ない。もう戦争は、終わったんだ。わしがいなければ、もう怪我をおうこともない。あとは、君たちの手で、立派にやっていける」

ブラウンは、歩み出した。
テントの前に、集まっていた人垣が、ゆっくりと二つに割れた。
その間を、ブラウンは、歩いていく。
「どこへ行くんです？」
フレデリックが、尋ねた。
ブラウンは、ふりかえった。
「これ以上、他人に迷惑をかけない場所へ……」
一人一人を、見回す。
眼鏡ごしに、目が潤むのが、わかった。
涙がこぼれる前に、ブラウンは、背中を向けた。
テント村の外れで、ジープに乗る。
ふりかえらず、走り去っていく。
その姿が、まったく見えなくなるまで。ジープのエンジン音が、まったく聞こえなくなるまで。
誰一人として、口も開かず、身動きすらしなかった。
最初に動いたのは、フレデリックだった。
ロイドの前に立つ。

「悪いがおれも、ここで別行動をさせてもらうよ」

「別行動?」

「どうしても、調べてみたいことがあるんだ。この戦争の本当のキッカケを、探りだせそうな気がする」

「もともとお前は、民間人だ。好きにすればいい」

「勝手ばかり言って、すまない」

「おい、ブンヤさん。何かあったら、助けにいくぜ。もちろん有料だけどな」

キースが、言う。

「これを持ってけよ。どこにいても、おれたちと通信できる」

ハンスが、小型の無線機を投げた。

「ありがとう。何かわかりしだい、コレで連絡する」

フレデリックは、自分のヴァンツァーに、乗った。

足早に、消えていく。はじめてあったときと比べると、その操縦技術には、格段の進歩が見られた。

２５

フォートモーナスに帰還すると、すぐにロイドは、その足を軍オフィスへ向けた。
直接、オルソンのいる司令室へ向かう。
いきなり、その扉を開けた。
オルソンは、デスクにすわり、書類に目を通していた。
「いくら傭兵だからといって、ノックくらいの常識は、守ってほしい」
顔をあげたオルソンは、非難をこめた口調で言った。
「説明してもらおうか」
ロイドは、入口のところに立ったまま、言った。
オルソンは、大きくため息をついた。
「まあ、いい。こちらからも、呼び出そうと思っていたところだ」
書類を閉じ、
「かけたまえ」
と、デスクの前の椅子を、指し示す。

ロイドは、動かない。
立ったまま、オルソンを見つめた。
オルソンは苦笑して、葉巻をくわえた。
もったいぶるように、火をつけた。
ゆっくり、煙を吐き出してから、
「ブラウンは、ＯＣＵの機密を知っている。
だからＯＣＵは、彼を消そうとした。テロリストをよそおったのは、ブラウンとＯＣＵのつながりを否定するためだろう。
国際平和維持機構に知られたら、たいへんだからな」
と、他人事のように、言った。
「まさか、あんたの差し金じゃないだろうな？」
オルソンは、心外そうに、
「私は根っからの軍人だ。科学者のすることなど、知ったことじゃない」
と、言下に否定。すぐに話題をかえて、
「そんなことより、お前に会わせたい人物がいる。そろそろ来ているころだが……」
オルソンは、受話器を取った。
二言三言、話して、受話器を置く。

「ちょうど良かった。今、ここに来る」
背中で、ドアが開いた。
痩せた長身の男が、姿を現した。
ロイドの目の前で立ち止まり、曖昧な笑みを浮かべる。
「紹介しておこう。この方は、サカタインダストリイの社長の坂田浩一氏だ」
「いつも弟が、世話になっています」
「弟？」
ロイドは、聞き返した。
坂田は、意外そうに、
「竜二のヤツから、何も聞いていないのですか」
「竜二……まさか!?」
「ええ。あなたの部下のサカタ・リュウジは私の弟です」
「……」
「あいつが家を飛び出して、もう十年になります。行方不明で探していたのですが、いつのまにか軍隊に入って、あなたのお世話になっていた、というわけです」
たんたんと、事実を話している。そんな口調だった。
ロイドは、言葉が浮かばなかった。

サカタとは、彼が入隊以来の仲だ。それなのに……。
いまさらながらサカタのことを、何も知らなかった自分に気づいた。
「ところで、あなたとお会いしたかったのは、そんな話をするためではありません」
坂田は、少しの感慨もなく、話題を変えた。
「実は、あなたを、スカウトしたいんです」
「スカウト⁉」
坂田は、笑みを浮かべた。
いや。笑みと呼ぶには、あまりに感情がこもっていない。
ただ、義務的にそうしているかのように、唇と頬を歪めただけだった。
「社長は、たいそうおまえの活躍を、気に入られたらしい」
オルソンが、言った。
坂田は、機械仕掛けの人形のように、唇をククッとU字形に曲げた。
「そのとおり。あなたをわが社の最新ヴァンツァーのテストパイロットとして、お迎えしたいのです。もちろんテロリスト退治がすみ、〝キャニオンクロウ〟を解散してからのお話ですがね」
オルソンの機嫌を取るように、坂田は言い添えた。
デスクの上の、電話が鳴った。

「失礼」
オルソンが、受話器を取った。
表情が、こわばる。
「よしわかった、すぐ準備させる」
受話器を置くなり、ロイドに言った。
「テロリストと思われる一団が、この町に向かっているそうだ」
ロイドより、先に坂田が声をあげた。
「な、何ですって！」
能面のような顔に、初めて感情が走った。
「ロイド。至急、迎撃してくれ」
「わかった」
ロイドは、部屋を飛び出していった。
「や、ヤツらの狙いは、この私だ」
先ほどまでの落ち着きが、ウソのように、坂田は取り乱している。
「安心してください。キャニオンクロウが、あなたを……」
「イヤ。ヤツらだけでは、物足りない。そ、そうだ。電話をかしてくれ」
坂田は、オルソンの返事も待たずに、受話器を取り上げた。

相手が出るなり、すがりつくような声で、叫んだ。

「わ、私だ。坂田だ！」

〈何を、あわてている〉

「テロリストが来た。私を狙っているに、ちがいない。たっ、助けてくれ！」

〈……〉

「お、お願いだ。私にもしものことがあったら、これまでの計画がパーになる。そうすれば、あんたやあんたの祖国も、莫大なる被害を受けるはずだ。だ、だから……」

〈いいだろう〉

坂田は、受話器を握りしめた。

「そ、そうしてくれ。早く、大至急だ！」

すでに切れた電話に向かって、叫ぶ。

哀れなほど、混乱している。

オルソンが蔑（さげす）むように、苦笑しているのにも気づかずに。

２６

「フォートモーナス市内に入っても、絶対に民間施設には手を出すな。目標はあくまで、坂田一人だ！」

漆黒（しっこく）の闇にも似たヴァンツァーの中で、男が指令を飛ばす。

ヴァンツァー同様、身につけた衣装も、黒ずくめだった。

フルフェイスのヘルメットを被っている。

表情すら、まったく窺い知ることができない。

彼の名はゲンツ・ヴィーザー。

経歴も年齢も不明だ。決して明らかにしようとはしない。

ただひとつだけ、わかっていること。

それは彼が〝ハフマンの魂〟のリーダーであるということだけだった。

サカタインダストリイ社長・坂田浩一が、フォートモーナスにいることを確認。数名の部下を従えて、乗りこんだ。

だがすでに相手は、迎撃体勢を整えていた。

〈オルソンの部隊も、きていたのか〉

　冷たい声が、無線から響く。

　イーヒンが、叫んだ。

「その声は、ドリスコル！」

　ロイドが、訊く。

「イーヒン、知っているのか⁉」

「ええ。ヤツがニルバーナ機関の現場責任者です！」

「何⁉　それじゃ、ヤツがカレンを！」

　——一年前。

　ラーカス事件のとき、ドリスコルと対峙したときの光景が、鮮やか脳裏に蘇った。

　ロイドのヴァンツァーが、疾走した。

　撃退命令を受けた〝ハフマンの魂〟にではなく、ドリスコルのヴァンツァーに向かって。

〈やめろ！　彼はもう敵ではない。協力して敵を撃退するんだ〉

　オルソンの声が飛ぶ。

　だが、ロイドの耳には、入らない。

「隊長。落ちついて！」

　ナタリーが、必死に、押し止める。

「放せ。俺は、あいつを、ドリスコルを、ゆるすわけにはいかない！」
「ロイド隊長！」
ナタリーの絶叫に、銃声が重なった。
ロイドのレッグに命中。
動きが、止まる。
ロイドの前に、ナタリーが立ちふさがっていた。右アームのショットガン、〝キャッツレイ〟の銃口から、煙があがっている。
しかもなお、その銃口を、ロイドに向けて、
「動かないで！」
「ナタリー……」
「彼を攻撃するようなら、わたしはあなたを撃ちます！」
「ナタリー、退け。そいつは、カレンの仇（かたき）なんだ」
「いいえ、退きません」
「なぜだ。なぜ、俺の邪魔をする」
「これは、あなただけの問題じゃないわ。隊長のあなたが、重大な反逆を行えば、わたしたち全員が、処分されるのよ」
〈クソッ。また失敗だ。退却！〉

ゲンツの声。
ロイド、ナタリー以外のキャニオンクロウ部隊が、すでに〝ハフマンの魂〟を、蹴散らしていた。
〈ふふふ。やはり、わたしが出るまでも、なかったようだ。また会おう、ロイド君〉
「待て――――！」
ロイドは、ツィーゲライフルを構えた。
同時にナタリーが、キャッツレイのトリガーを引いた。
ロイドの右アームが、吹っ飛ぶ。
「ナタリー――――！」
「今度は、ボディを撃ちます」
落ち着きと同じほど、情念と決心をこめた声で、ナタリーが言った。
「ち、ちくしょう……カレン……」
悠然と立ち去る、ドリスコルのヴァンツァー。
その後ろ姿を見送りながら、ロイドは唇を噛んだ。唇から真っ赤な血が、ヴァンツァーの中に滴り落ちた。
駆けつけたオルソンは、ロイドを見るなり、いきなり頬を張った。

「いい加減にしろ、すでに戦争は、終わっているんだ」
ロイドは、オルソンを睨み返して、言った。
「俺とカレンの戦争は、終わっていない」
「貴様というヤツは……」
「二人とも、やめて」
ナタリーが、割って入った。
オルソンは、ロイドから、視線を逸らした。
ナタリーに向かって、言った。
「北東のタッカー山地で、テロリストの姿を見たという情報が入っている。君が指揮をとって、至急現場に向かってくれ」
「しかし……」
ナタリーは、ロイドを見やる。
オルソンが、すぐに、
「こいつは、隊長失格だ」
すぐに、サカタが、言う。
「おれは、ロイド隊長の命令にしか、従いません」
「何!?」

オルソンが、サカタを睨む。しかしサカタは、動じない。
「いくら傭兵部隊だからって、秩序ってもんがあるからな」
ＪＪが、言う。
「ボスを無視されたんじゃ、オレたちの立場もねえ」
キースが、言った。
「貴様ら……」
オルソンが、怒りに身体を、震わせた。
その前にロイドが立ち、隊員たちに向かって言った。
「全機、搭乗。大至急、タッカー山地へ向かう」
「了解！」
「オーケー、ボス！」
キャニオンクロウのメンバーは、足早に部屋を出ていく。
ロイドは、オルソンと対峙。
「引き受けた以上は、最後までやる。それが俺の主義だ」
と、言い残し、部屋を駆けだした。

２７

タッカー山中腹。
緑の山肌が削られ、土砂が露出している。
おおざっぱに整地された広場に、古びた建造物が建っていた。
ハフマン島入植開始直後に造られたセメント工場だった。
しかし不便な場所柄から、閉鎖されて十年以上になる。
建物も、あたりの地面も、荒れ放題だった。
「センサーに、微弱な反応……工場の下からだ」
ハンスが、言った。
どうやら、セメント工場跡地の地下に、敵が潜んでいるらしい。
「攻撃するのか？」
ＪＪが、訊く。
「サカタ、ミサイルをぶちこめ！　他の連中は、出てきた敵に攻撃を加えるんだ」
ロイドが、指令する。

サカタは、肩に装備したミサイルランチャー、〝ドンキーＤＸ〟を操作。
「隊長、準備ＯＫです」
「オレたちも、いつでもいいぜ」
キースが、にやけた口調で言う。
「よし。攻撃開始！」
サカタの肩が、破裂した。
いったん上空に舞い上がったドンキーＤＸの砲弾は、その狙いを定め、凄まじい速さで飛んでいく。
わずかな隙間から、工場跡地地下へ侵入。
すぐに火柱が、上がった。
「おーい。戦闘を中止しろ！」
煙のなかから、一機のヴァンツァーが、飛び出してきた。
「よっしゃ、いただき！」
キースが、迫る。ハンドロッドをふりかぶる。
破壊する直前で、踏みとどまった。
「お、おめえ。フレデリックじゃねえか！」
相手を見て、キースが、素っ頓狂（すっとんきょう）な声をあげた。

地下から炙(あぶ)りだされてきたネズミは、フレデリックだったのである。
「どうして、ここに!?」
ロイドが、尋ねた。
「事情は、説明する。だから戦闘をやめるんだ。いいか、絶対に攻撃するな」
フレデリックは、両手を大きく広げた。
フレデリックに続いて、地下から、ヴァンツァーが姿を現した。
どれもブラック一色。
間違いない。〝ハフマンの魂〟だ。
「フレデリック、貴様、テロリストの仲間になったのか!?」
JJが、声を張り上げた。
いつでも跳躍できるよう、身を屈め臨戦体勢だ。
「ま、待て。彼らはテロリストなんかじゃない」
フレデリックは、〝ハフマンの魂〟の前に、立ちふさがった。
「どういう意味だ?」
ロイドが、尋ねた。
「おれのジャーナリストとしてのカンが、当たったって意味さ」
「ジャーナリストとしてのカン!?」

サカタが、訊く。
警戒は、解いていない。ボタンを押すだけで、いつでも二発目のドンキーＤＸを、発射できる体勢だ。
フレデリックは、大声で、絶叫した。
「いいか。思い出してくれ。〝ハフマンの魂〟は、決して民間の施設を襲撃しなかった。なのにサカタインダストリイだけは、しつこく追い回していた。それはなぜか？
サカタインダストリイと、どんな関係があるんだ！」
サカタが、叫んだ。
その問いに、〝ハフマンの魂〟のリーダー、ゲンツが答えた。
「サカタが、この島を食い物にしていたからだ」
「そ、そんな……」
さらにゲンツは、落胆するサカタに向かって、
「調べはついてる。サカタ・リュウジ。おまえはサカタインダストリイ会長、坂田玲二の息子。そして社長の浩一の弟」
「何だって――！」
キースとＪＪ、ヤンとイーヒン、戦闘中はこわがって一言も口をきかないピウィーまでが、いっせいに声を上げていた。



「しかしサカタは、俺たちの仲間だ。サカタインダストリイとは、関係ない」
ロイドが、言った。
「隊長、知ってたんですか」
サカタが、言った。
「先日、聞いたばかりだ」
「すみません。つい言いそびれて……」
「謝ることはない。親兄弟とは無関係に、おまえは俺たちと戦ってきた。それは俺が、一番よく知っている」
「ロイド隊長」
「それならおまえは、サカタインダストリイの陰謀を、何も知らないんだな？」
ゲンツが、言った。
サカタの固唾（かたず）を飲む音が響いた。しかし、そのまま黙りこむことはなかった。
自分から、ゲンツに、尋ねる。
「おれの親父と兄貴が、何をしたというんだ？」
「サカタ！」
ロイドが、叫ぶ。
「いいんです。お前らが知っていることを、すべて話してくれ」

「それほど言うのなら、教えやろう。
……おれは昔、ＵＳＮの工場にしのびこんだことがある。
サカタインダストリイがＵＳＮ、ＯＣＵ両国と手を組んで、新型ヴァンツァーを開発しているというウワサを聞いたからだ。
そこで、おれは見た。その工場は、ヴァンツァーに搭載するコンピューター――機動兵器制御用生体コンピューターのＣＰＵ（中央演算処理装置）に使用する人間の脳を採取するための施設だった。
人工受精により、製造された人間の胎児の脳を、ヴァンツァーの機体を制御する目的で取り出す……」
「それじゃあ、ドクター・ブラウンが言ったことは、おれの親父と兄貴が……」
「なぜ、そんなことをしたと思う？」
「……」
「簡単さ。競合する他のヴァンツァーメーカーに、勝つためだけにやっていたんだ」
「それだけの理由で!?」
「おれたちは、そんなサカタのやり方を、許すことができない！」
「親父、兄貴。そんなことを……」
「特にお前の兄、浩一は親父に輪をかけた狂人だ。
現在、サカタインダストリイの研究は、次のステップに入っている。

Ｂデバイスと呼ばれるタイプ――これは、この島で実験経験を積んだ兵士の脳を使っているんだ」

「兄貴が……」

「どうだ？　これでもおれのしていることが、間違っていると思うか？」

ゲンツの言葉に、サカタは黙りこんでしまった。

「今の話が、真実だと、証明できるか？」

ロイドが、尋ねた。

すぐにゲンツは、答えた。

「もちろんだ。フォートモーナス市の北にあるニルバーナ研究所には、Ｂデバイスの候補となる人間達が、集められている。おもに病院から、誘拐された兵士だ」

「何だって。じゃあ、ニルバーナ機関の目的は――！」

イーヒンが、声を震わせる。

「そうさ。優れた人間たちを集め、Ｂデバイスのマテリアル（素材）にする。……まさに悪魔の研究所なのさ」

「それじゃあ、ぼくの仲間は……そしてアソコにいたら、今頃ぼく自身も……」

「イーヒン。しっかりして」

ヤンが、駆けよる。

「俺の前から、消えろ」
ロイドは、ゲンツに、言った。
「逃がしてくれるっていうのか？」
「今、おまえの言ったことが、もし真実でなければ、すぐ探しだして殺す」
「ウソなものか。おれの身体を流れる、熱い血にかけて誓う」
「それは俺が、この手で調査する。それまで、命はあずけてやる。はやく行け！」
「また、会おう、ロイド。……フレデリック、お前はどうする？」
「おれは、キャニオンクロウに残って、取材をつづける」
「頼むぞ、真実を伝えるんだ」
「わかってる」
「よし、行くぞ！」
ゲンツの掛け声と同時に、〝ハフマンの魂〟は、いっせいに姿を消した。
まるで煙が、宙に消えるような速さだった。
「こ、こんなことは、許されません。隊長、大至急、彼らを追ってください」
ナタリーが、叫んだ。
ロイドは、動かない。
追跡の指令も、出さなかった。

「キース、お願い。敵を追って」

ナタリーが、叫ぶ。

すぐにロイドが、打ち消した。

「その必要はない。責任はすべて、俺がとる」

キースは、無言で、両手を広げた。

「ああ、ロイド。これ以上命令に、背くことはやめて……」

ナタリーの声が、震えている。

「みんなに、迷惑はかけない。全機、帰還！」

ロイドは、引き上げの指令を出した。

「そんな、そんな」

ナタリーは、なかなか動こうとしなかった。

サカタの足取りも、遅い。

帰途するトラックの中は、通夜のように暗く沈んだままだった。

２８

軍オフィスに、オルソンの怒号が、轟いた。
「テロリストのボスを、追いつめておきながら、逃がしただと」
椅子をつかみ、壁に叩きつけ、
「クソッ！　おまえは何を、考えているんだ」
それでも、怒りがおさまらないように、壁を蹴り上げた。
「おまえたちの処分は、追って通達する。それまで、この町から一歩も出るな。もし出たら脱走兵として、即銃殺する。以上だ。さがれ！」
キャニオンクロウのメンバーは、無言で部屋を出た。
オルソンが一人残った部屋から、ガラスの割れる音が響いてきた。
ほとんどの面々が、早足で通路を歩く。
「隊長」
ナタリーが、小声で、呼び止めた。
ロイドだけ、立ち止まる。

二人きりで、通路で、向かい合った。
ナタリーは、ロイドの瞳を、見つめた。
ロイドの瞳の奥が、燃えているのがわかった。
秘めた炎、決して消えることのない炎が、燃えている。
それを確認したナタリーは、熱い思いをこめて、言った。
「大佐は本気よ。今度こそ、命令にしたがってください」
しかし思いは、ロイドには伝わらなかった。
「俺は、本当のことを知ってから、死にたい。それだけだ」
背中を、向けようとする。
「いいえ。ちがうわ！」
ナタリーが、叫んだ。
涙で潤んだ目で、ロイドを見つめ、
「あなたはカレンが、生きていると思っている。カレンが、グレイロックの病院からつれ去られて、ニルバーナで生きていることに望みをかけている」
ロイドは、無言で、ナタリーを見つめる。
「どうして。どうして彼女のことを、そんなにも愛していられるの？　わたしは、わたしは……」
ナタリーの瞳が、唇が、さざ波のように揺れた。

それでも、ロイドを、見つめつづけた。
だが、ロイドの瞳の炎は、消えようとしない。むしろ、静かに輝きを増しているかのようだった。
「ロイド……」
崩れそうになった表情を、精一杯の笑みで隠し、
「いいの。行ってちょうだい。わたしには、あなたを止めることはできない。いつでも、そうだった……」
ふたたび、唇が震えた。限界だった。
それでもナタリーは、笑みを浮かべた。笑みで、自分の本心を隠して言った。
「もうわたしは、あなたについて行くことは、できないわ。……さよなら」
「ナタリー……」
やっと、ロイドが、口を開いた。
ナタリーは、ロイドの呼びかけを無視して、背中を向けた。
背筋を伸ばして、通路を歩く。毅然として、軍人らしく。
角を曲がるまでは。ロイドから、離れるまでは。
そう自分に、言い聞かせて。
息が、できない。息をすれば、心の堰が切れるから。

一度切れたら、自分でも止められないことを、知っているから。
ナタリーは息を止め、努めて悠然と、ゆったりとした足取りで、通路を歩いた。

オフィスを出たロイドは、裏道へ足を進めた。
人目を避けて、ヴァンツァーの格納庫へ向かう。
足音だけが、路上に響く。
思い詰めた表情で。心を決めて、歩く。
と。いつの間にか、もうひとつの足音が、重なっていた。
ふりかえる。
サカタだった。
両手をポケットにおさめ、無言で歩いてくる。
ロイドは、その進路に、立ちふさがった。
「これは、俺個人の問題だ」
ロイドは、言った。
サカタは、鋭い目で、睨み返した。
「違いますよ。サカタインダストリイは、おれの身内ですから。それに……」
「……?」

「あのときもいっしょだったじゃないですか、隊長と、おれと、カレンと……」
「サカタ」
「だから、いっしょに、この結末を知る権利が、おれにもあると思うんです」
ロイドは、見た。
サカタの瞳に、自分と同じ炎を。
二人は肩を並べて、無言で、裏道を進んだ。
それぞれのヴァンツァーに、乗る。
無言で、町を出た。ロイドが、口を開いた。
「命令を破って、町を出た。発見されれば、即射殺だ。だが、今ならまだ間に合う」
サカタが、平然と、
「行きましょう、隊長」
「もう単なる脱走兵だ。ロイドでいい」
「イヤ。ＯＣＵ正規軍、傭兵部隊、脱走兵。名前はかわっても、最後まで隊長と呼ばさせてもらいます」
「サカタ……」
二機のヴァンツァーは、音を忍ばせて、進んでいく。
町から一キロ近く離れたところで、大通りへ出た。

大型のトラックが、疾走してくる。
ＯＣＵ正規軍の最新型補給車だ。
「隊長」
サカタが、ふりかえる。
「もう来たか」
ロイドも、ふりかえった。
「ここは、おれに任せて、先に行ってください」
サカタは、右アームのバズーカ、〝ボア40〟を、セットした。
ロイドは、行かない。
「ダメだ。単独行動は、隊長として許可できん」
ツィーゲライフルを、構える。
補給車は、クラクションを鳴らして、突進してくる。
「見ていてください。一撃で、破壊します」
サカタは、構えた。
照準を、補給車の運転席に、合わせた。
運転手が、泣きそうな顔で、何かわめいている。
サカタは、バズーカを下ろして、言った。

「隊長。ピウィーです」
「何だって！」
「ピ、ピウィーのヤツが、泣きべそかきながら、運転してきます」
サカタの声に、嗚咽(おえつ)が混じった。
二人の目の前で、大型の最新型補給車は、止まった。
ピウィーが、涙をポロポロ流しながら、出てきた。
「わーん。怖かったよお。サカやん、本気で撃とうとするんだもの」
「だったら、逃げれば良かっただろ。逃亡は、十八番じゃないのか」
サカタが皮肉を言うと、ピウィーは真面目に受け取って、
「サカやんのバカ。いじわる。わ～ん！」
と、子供のように泣いた。
「またこっそり、どこかへ行こうとする。悪い癖だよ」
補給車から、ハンスが顔を出した。
ヤンが、顔を出した。
「イーヒンが、行くって言うんだ。ほら、イーヒン！」
ヤンに押されて、イーヒンが、姿を現した。ロイドを見つめて、
「ニルバーナまでの道案内は、ぼくに任せてください」

それを聞いたヤンは、涙を浮かべながら、
「コイツ、弱虫で、いつもわたしが守ってやってたのに。いつの間にか、こんなに男らしくなっちゃって……」
と、イーヒンの腹に、拳をたたきこむ。
「姉さん、みっともないよ」
「うるさい。子供のとき、おもらししたのを後始末したの、誰だと思ってんだ」
「姉さんたら……」
イーヒンは、はずかしそうに、ヤンをなだめた。
「また、従軍記者させてもらうぜ」
フレデリックが、顔を出して、ウインクした。
「みんな、本気なのか？」
ロイドが、尋ねた。
「正確にはみんなじゃないよ。キースとＪＪは残った」
ピウィーが、言った。
「しかし、ピウィー。この補給車、どうしたんだ？」
サカタが、尋ねる。
「かっこいいでしょ。前から目をつけてたんだ。大きさも設備も、スピードだって一番なん

だ。一台しかなかったけど、ぼくじゃなくゃ、乗りこなせないよ。これなら平和調停軍なんてちっともこわくないさ」

ピウィーは、胸を張った。お腹が突き出て、布袋様みたいだ。

ヘッドホン式の無線を、耳に当てていたハンスが、言った。

「お〜っと。軍オフィスが、騒がしくなった。自慢話はそれくらいにして、早く町から遠ざかろう」

「隊長、行きましょう。みんなで！」

サカタが、言う。

「みんな、あり……」

言葉に、ならない。

ロイドは、唇を噛みしめて、頷いた。

２９

フォートモーナスとソレイトの、ほぼ真ん中あたり。

ひっそりとした山の合間に、古びた工場のような建物が建っていた。

「ここが、ニルバーナ機関ＢＤマテリアル工場です」
　イーヒンが、言った。
「よくもまあ、こんな辺鄙（へんぴ）なところへ……。これなら、まず見つからないね」
　ヤンが、驚きの声をあげた。
「ここで、サカタ製デバイスを、製造してたってことか」
　フレデリックの言葉に、イーヒンが、
「ぼくも奥の方が、どうなっているのか知らないけど、おそらく……」
「ハンス。中の様子は、どうだ？」
　ロイドが、尋ねる。
「それが、何も反応がないんです」
「何だって⁉」
「いや。ヴァンツァーが一機。それもすぐ近くに——！」
「待て。おれだ」
　工場の影から、ブラックヴァンツァーが、姿を現した。ゲンツだ。
「来ていたのか」
「ああ、一足お先にな。しかし、蛻（もぬけ）の殻だ」
「逃げられたか？」

「わからんが……」
「よし。フレデリックとハンス、ヤンとイーヒン、サカタは俺と組んで、侵入する」
「ひえ～、一人で置いてけぼりなんて！　サカやん……!!」
ピウィーが、怯えた声で言う。
「隊長、どうしますか？」
サカタが、尋ねる。
ロイドより、先にゲンツが言った。
「よし。サカタはピウィーと、周辺をさぐれ。各機、無線は絶対に切るな」
「ロイド、いっしょに行くぞ」
「了解！」
二機一組で、捜索がはじまった。
だがレーダーにも、センサーにも、反応がない。
「そんなはずはない。集めた大量の兵士たちの身がらを、そう短い時間で、移送できるわけがない」
ゲンツが、つぶやく。
ロイドとゲンツは、地下室へと進んでいた。
「わかったぜ、ゲンツ」

奥に通じる鋼鉄の扉を破壊。中を見たロイドが、言った。
「何だと？」
「来てみろ。ヤツらは必要なものは、ちゃんと運び出していたんだ」
ゲンツが、駆け寄る。
中を覗いたとたん、
「クソッ。あいつら、人間を部品の一部としか、考えてねえ」
と、怒りにまかせて、壁を蹴り上げた。
その部屋には、何百という腐乱した兵士たちの遺体が、廃棄されていた。
しかも、どの遺体も頭蓋骨が切断され、脳味噌だけが持ち去られていたのだ。
「しまった。爆弾だ――！」
ハンスの声。
「何だって！」
「時限爆弾が、セットされている。爆発まであと一分。解除不可能！」
「全機。撤退！……ゲンツ、戻るぞ」
しかし、ゲンツは、動かない。
両手を合わせ、黙禱（もくとう）を捧げている。
「ゲンツ――！」

「わかってる。ここで死んだら、この連中の無念すら、晴らせられねえからな」
ゲンツは、躍動。撤退。
「隊長。早く、あと十五秒です」
補給車には、全員戻っていた。
ロイドとゲンツが、飛び乗ると同時に、猛スピードで発進。
狭い山道を巧みなハンドリングで曲がり、木陰に隠れる。
すぐに天地を揺るがすような、地響きに包まれた。
「工場内に誰かが、踏みいると、自動的に爆弾がセットされる仕組みだったんだよ」
ハンスが、言った。
「目撃者と、証拠を木っ端みじんに……というわけだな」
ゲンツが、唸るように言った。
「証拠って、何か発見したのか？」
フレデリックが、訊く。
ゲンツは、無言で、首をふった。とても言葉にできないようだ。
ロイドが見たままを、告げる。
「ひでえ」
イーヒンが、言った。

「これから、どうするんだ？　平和調停軍はテロリストとして、おまえたちを追いかけまわすぜ」
ヤンは、跡形もなく破裂した工場跡に向かって、両手を合わせた。
サカタが、絶句する。
「親父と兄貴が、そんなことを……」
ゲンツが、ロイドに尋ねた。
「町を出たときから、俺の決心は決まっている。一人になっても、サカタインダストリイをつぶすまでやめない」
「〝おれの決心〟じゃなくて〝おれたちの決心〟でしょ」
サカタが、言った。
「しかし……」
「このままにしておけません。親父と兄貴の責任は、おれの責任でもありますから」
いかにも律儀（りちぎ）なサカタらしい言葉だった。
「わたしたちだって、町を出たときから、いっしょだよ」
ヤンが、言う。
イーヒンも、頷く。
会話が聞こえたのだろう。ピウィーが、クラクションを鳴らした。

「それなら、追われているもの同士。組むか？」
「よかろう」
ゲンツの差し出した右手を、ロイドは握り返した。
「よし、決まりだ。運転手、ルーピディスへ向かえ！　そこに坂田がいる」
ゲンツが、言った。
クラクションが二度鳴り、補給車は発進した。
「しかし平和調停軍は、こっちの動きはお見通しだろう。まちぶせされているはずだ」
フレデリックが、不安そうに言う。
ヤンが、笑った。
「それなら、また戦線離脱する気かい？」
フレデリックは、ムッとした顔つきで、
「そんな意味で、言ったんじゃない。おれだって、とことん付き合うつもりだ」
と、ワイシャツの腕を、まくり上げた。
「ジョークだよ。あんた、はじめて会ったときから比べると、ずんぶんタフになったね」
ヤンは、フレデリックを見る。瞳が、どことなく、艶（つや）っぽい。
ハンスが、ヤンの前に立ち、
「お、おれが思うに、さっきの爆弾は、時限発火式のプラスチック爆弾だと思うんだ」

ヤンは、ハンスをどけて、

「それで……」

と、先を促しながらも、フレデリックを見つめている。

「やれやれ。戦火の中でも、若者たちは、恋の季節ってわけかい」

ゲンツは、吐き捨てるように言って、横になった。

よほど、疲れていたのだろう。フルフェイスのヘルメットの中から、すぐにくぐもった鼾が響いてきた。

３０

「車を止めて！」

ルーピディスに、向かう途中。

突然、ハンスが、叫んだ。

「どうした？」

ロイドが、訊く。

「動力反応発見。近いよ！」

「何だって！」
横になって、しばしの休養を取っていたメンバーたちも、いっせいに反応した。
ピウィーが、補給車を止めた。
補給車の覗き窓から、ロイドが外の様子をうかがう。
とたんに、顔色が変わった。
「こ、ここは……」
「旧ラーカス地区USN軍需工場。もっとも今じゃ、廃工場だがな」
隣の覗き窓から、外を見ながら、ゲンツが言った。
「それじゃあ、一年前の……」
サカタも、外を見た。
表情が、硬い。
「ここにあのとき、ここに来なければ、この戦争も、そしてカレンも……」
ロイドが、唇を噛む。
ゲンツが、静かに言った。
「いや。たとえ一年前、お前らがここに来なくても、戦争は起こっていたさ」
「何だって？」
「ここは、USN軍の軍需工場なんかじゃなかった。サカタインダストリイのBDの工場だっ

たのさ」
「なに——！」
「ここでお前たちが起こした戦闘が、確かに第二次ハフマン紛争のきっかけになった。しかし、結局は茶番だ」
「茶番？」
ロイドたちは、食い入るようにゲンツを見つめ、話の先を待つ。
ゲンツは胸ポケットから、折れ曲がったタバコを取り出した。
一息、大きく煙を吸ってから、
「ここでの戦闘は、サカタインダストリイが計画したものだ。サカタインダストリイは、自社の開発したデバイスを実戦テストする場所が、欲しかった。だからここで……」
「あれが、デバイスの実戦テストだったなんて……」
サカタが、うめいた。
「二大陣営間の緊張が続くこの島は、まさにその条件にぴったりだった」
ゲンツは、大きく煙を吐き出した。
フレデリックが、その言葉を、肯定した。
「それは、おれの取材でも間違いない。ロイドたちは、そのキッカケの〝コマ〟として使われたに過ぎない」

「汚い、連中だね」
ヤンが、目を細めた。
ハンスが、叫んだ。
「危険だ。動力反応が、どんどん近づいてくる」
「各自、ヴァンツァーに搭乗。戦闘態勢に入れ！」
ロイドは真っ先に、自機ヴァンツァーに、飛び乗った。
五秒とかからず、補給車から、飛び出す。
すぐに眼前に、巨大な化け物が迫った。
巨象のような姿で、立ちふさがる。
見覚えがある。忘れようとしても、決して、忘れない姿——。
一年前、ここで出会ったヴァンツァーと同型。いや、そのものだ。
「貴様、ドリスコル！」
「ふふふ。やっときたな、ロイド。必ずここを通ると、思っていた」
ドリスコルは、冷静に言う。
「あ、あれはシーキング型ヴァンツァー！　あいつが、実戦配備されてるなんて」
イーヒンが、驚きの声をあげた。
「知っているのか？」

「サカタインダストリイが、極秘に開発していた超弩級戦闘ヴァンツァーです」
「これで、カレンを……」
怒りに、ロイドの喉が、震えた。
それをあざ笑うように、ドリスコルが言う。
「なつかしいだろう？　ここでお前とわたしは、戦った。一年前のままだ」
「違う。一年前とは――！」
「どうしてだ？　サカタも、そしてカレンもいるというのに」
「な、何だと。カレンが、ここに――!!」
「隊長、ウソだ。だまされちゃいけない！」
サカタが、叫ぶ。
ドリスコルが、声をあげて、笑った。
「ははは。腰抜けの兄貴とは違って、弟の方は、元気がある」
「クソッ――」
サカタが、駆けだす。
「ダメよ。挑発に乗っちゃ」
ヤンが、はがい締めにして、取り押さえた。
「カレン……カレンが、どこにいるというんだ！」



　ロイドが、声を絞り出す。
「まだわからんのか？　ここだよ」
「ここ!?」
「わたしの機械の中だ」
「な、なんだと。まさか！」
　ロイドは、瞳を、見開いた。
　驚愕、疑惑、否定、願望、確信、絶望、怒り――。
　瞬時に様々な思いが、脳裏を駆けめぐる。目眩がしそうなほどだ。
　そんな戸惑いを、楽しみ、さらに憎悪を注ぎこむように、ドリスコルが言った。
「そうだカレンは、サカタ製B型デバイスとして、ここにいる」
「カ……カレン……」
「カレンは、おまえなどには、もったいないほど素晴らしい女だ。彼女の脳を移植した、このコンピューターで、われわれは目的が達成できる！」
「き、貴様ああ――あッッ!!!!」
　ロイドの瞳炎が、紅蓮（ぐれん）と化した。
　飛躍。怒りに、ヴァンツァー全身まで、燃え上がったかのようだ。
「やる気か？　いいだろう。カレンとわたしとで、相手をしてやる！」

ロイド目掛けて。

ドリスコル機の肩のミサイルランチャーが、火炎の渦を噴き上げた。

「カレン――！」

ロイドは、絶叫した。

もし、カレンがいるなら。意識を持っているなら。聞いてほしい。

願いを、こめて。

だが。その思いを打ち砕くように、ロイドのヴァンツァーは被爆した。

百メートル吹き飛ばされ、古びた倉庫に激突。

「気をつけて。大型だが、動きは通常ヴァンツァーの三倍速です」

サカタが、ボア40を撃つ。

頭部に命中。パチンコ玉のように、跳ね返された。

「何て、化け物だ」

「ヤツの弱点は、腹部です。腹部中央は、ほとんど無防備のはず。そこに攻撃を……うわーっ！」

イーヒンを、ミサイルが直撃。

「イーヒン！」

ヤンが、駆けよる。

「ふふふ。その逃げネズミが言ったことは、本当だ。しかし、お前たちのヴァンツァーがわ

たしの下に潜りこめたらの話だがね」
「散らばれ。攪乱するんだ！」
ロイドが、走る。
先ほどの砲撃で、レッグをやられ、スピードが低下している。
「どこから攻めてこようと、カレンがヴァンツァーの反応を察知して、攻撃してくれる。昔の仲間にやられるんだ。お前たちも、本望だろう」
ドリスコルは、この上なく愉快そうに笑った。この上なく、残忍な響きを含ませて。
しかし。その言葉の通り。
ボディに設置された無数の砲台が、的確にヴァンツァーに向けて発砲――。
接近は不可能。反撃すらできない。ドリスコルの攻撃を避けるので、精一杯だ。
またたとえ反撃に成功しても、分厚いボディに、かんたんに跳ね返されてしまう。
――このままでは、死ぬのを待つだけだ。
ロイドの額に、脂汗がうかぶ。
だが、捨て身になれない。
もしも、あのヴァンツァーを破壊したら、カレンが、カレンが消えてしまう……。
「やられた。ダメだ。動けねえ、離脱する」
フレデリックが、言った。

「クソッ、レッグ全壊だ」
ヤンのヴァンツァーは、転がりながら、反撃。すぐに砲弾を受けて、弾き飛ばされた。
「隊長、このままじゃ……」
サカタが、叫ぶ。
ボア40の砲弾が、底をつきかけている。
「姉さん援護して。下にもぐり込む」
イーヒンが、まわりこむ。
すぐに砲弾を浴びて、吹っ飛ばされた。
ゲンツが、反対に回る。砲台に正確に、弾を繰り出され、左アームに衝撃。
「ちくしょう。左腕が、消えちまった」
右アームも破損して、辛うじて付いているだけだ。攻撃手段は、予備で持っていた火炎放射器、〝ホットドッグ〟のみ――。
ぴたりと雷雨が止むように、爆音と閃光が消えた。
ドリスコルが、攻撃を止めたのだ。
「そろそろ。お遊びは、お終いだ。わたしも忙しい身なのでね」
「まだまだ。死ぬまで戦うぜ」
ゲンツが、不敵に笑う。

「そうか。しかし安心しろ。身体は殺しても、脳だけは持ちかえって再生してやる」
「それなら死ぬときは、自分の頭に鉛の弾をぶちこんで、持ちかえっても味噌汁くれえにしか、使えないようにしておくぜ」
「ふふふ。凝りない連中だ。楽しかったぞ」
巨大ヴァンツァーの砲台が、音もなく動く。
それぞれのヴァンツァーに、照準が合う。
「隊長――!」
サカタが、つぶやく。
「カレン……」
ロイドは、口の中で、ささやいた。
ドリスコルの砲台が、火を噴く――その前。
鈍い爆音が、ひとつ響いた。
ドリスコルの真下で――。
「ピウィー!!」
小型バイクに乗ったピウィーが、真上に向けて、バズーカを打ちこんでいた。
「は、早く皆、やっつけて!」
ピウィーが、泣き声で、わめく。

チャフ――細かい金属片を散らしたシートを、すっぽりと被っていたため、察知されなかったらしい。

「く、くそっ」

予想外の攻撃を、弱点に受けて、巨大ヴァンツァーの動きが止まった。

「攻撃だ！」

ロイドが、叫ぶ。

傷だらけのヴァンツァーが、蟻のように潜りこむ。

残りの武器を、いっせい放った。

砲弾が、シーキング型ヴァンツァーのドテッ腹を破壊した。

火を吹き、黒煙を吹く。

「やった！」

「退け――」

潜りこんだヴァンツァーは、蜘蛛の子を散らすように、逃げる。

「でかしたぞ。ピウィー！」

「サカや～ん！」

ピウィーは、サカタのヴァンツァーに、抱きついた。

サカタは、ピウィーを抱えて、退却。

「……おぼえておけ、ロイド」
ドリスコルが、つぶやいた。
「昔から中国に伝わる話を、ひとつ教えてやるよ。『戦いにおいて、過信は隙を生み、敗北につながる』ってね」
ヤンが、言った。
「大きな善行とひきかえに、小さな犯罪は許される。わたしが『罪と罰』から得た教訓だ」
ドリスコルは、静かに、笑った。
「ドリスコル、きさま……！」
ロイドがうなった。
ドリスコルは勝ちほこるように、
「覚えておくがいい。貴様らも、カレンと同じ目的で集められたに過ぎないことを。われわれはおまえたちを、逃がしはしない……」
巨大ヴァンツァーの各部から、炎が上がった。
「カ、カレン、今助ける！」
ロイドが、ダッシュ――何の躊躇（ちゅうちょ）もなく、炎の中に飛びこんでいく。
「隊長！」
「すぐ戻る」

穴の空いた腹部から、中に潜入。
「やばい。爆発しちゃうよ」
「ロイド隊長～っ」
泣きつづけていたピウィーが、泣き声で言った。
と同時に、シーキング型ヴァンツァーが、巨大な火の玉と化した。
その爆風に、乗って、ロイドのヴァンツァーが、飛躍。
転がりながら、地を這う。
「隊長――！」
サカタが、ロイドに、駆けよった。
ロイドのヴァンツァーは、ゆっくりと立ち上がった。
何かを大切に、抱えている。
「それは！」
サカタが、言葉を止めた。
ロイドは、こくりと頷き、
「カレンだ」
と、言った。
決死の覚悟で持ち出したコンピュータ。

〝カレンデバイスBD—6Kr〟と、明記してあった。
「ピウィー。カレンを……このコンピューターを、俺の機体に取り付けられるか？」
ロイドに訊かれて、ピウィーは涙を拭った。コンピューターを見回して、
「うん。規格は同じみたいだから、できるとは思うけど……でも」
ロイドは、手にしたコンピューターを、見つめる。
そして、押し殺した声で、つぶやいた。
「カレン。いっしょに行こう。すべては、俺たちから始まった。だから俺たちの手で、すべてを終わりにしよう……」

３１

フォートモーナスにある元ＵＳＮの軍オフィスは、停戦後、平和調停軍のオフィスとなっていた。
「ついこの間まで、この部屋で会議してた連中を殺してたのに。まったく、敵も味方も、何がなんだかわからねえ戦争だな」
キースが、言った。

「そんなもんさ、戦争なんて」
ＪＪが、言う。
ナタリーは、無言だ。何かを考えこむように、眼前のデスクを見つめている。
部屋には、三人しかいない。
扉が、開いた。
オルソンだった。中に入ろうとしない。
扉のところに、立ったまま言った。
「ヤツらが、ルーピディスの北北東百五十キロの山腹にある、武器商人のキャンプに現れたという情報が入った」
ナタリーが、顔を上げた。オルソンを見る。
「ラーカス地区で騒ぎを起こしたのも、やはり彼らだったようですね」
「ヤツらを逃がした穴埋めをやってもらうぞ、ナタリー」
「……はい、大佐」
「部隊を指揮して、至急発進しろ」
オルソンは、すぐに部屋を出ていってしまった。
ナタリーは、ふたたび何もないデスクに、視線を落とした。
「なあキース。本当に、これでいいのか？」

ＪＪが、ぽつりと、言った。
「いまさら、何だよ。おめえらしくもねえ」
「ただ……」
「金にならねえことが嫌いだから、こっちについたんだろ？」
「それは、そうだが」
「じゃあ、黙ってろ」
ナタリーが、立ち上がった。
「行くわよ」
とだけ言って、部屋を出ていく。
「行くぜ」
キースが、腰をあげた。
「ああ」
ＪＪも、重い腰をあげる。

「この調子だと、あと一時間足らずで、ルーピディスに着くね」
ハンスが、言った。
「いよいよ、坂田と決戦だ。おれは休んでおくぜ」

ゲンツが、ごろんと横になった。
そのとたん。急ブレーキ。
ゲンツは反動で、自動的に立ち上がった。
他の面々も、転んだり、バランスを崩したりしている。
「何だよ。乱暴な運転だな」
「ピウィー、腹でも減ったのか？」
しかし、ピウィーからの返答はない。
かわりに、無線から女の声――。
〈こちらは平和調停軍です。テロリストに告げます。機体を降りて投降しなさい〉
補給車内に、緊張が走った。
「あの声は、ナタリーだ」
サカタが、叫ぶ。
「どうする？」
ヤンが、ロイドを見た。
ロイドは、無言だ。かわりに、イーヒンが、言った。
「どうするも何も、彼女と戦うなんて、ぼくはイヤだよ」
「しかし、向こうが攻撃してきたら、イヤだなんて、言ってられないよ」

ヤンが、叱りつける。
さらに、ナタリーの声が、響いた。
〈勧告に応じない場合は、攻撃を開始します。勧告に応じない場合は……〉
「おれが、事実を話してやる」
フレデリックが、無線に走った。
「待て」
ロイドが、止めた。
「俺が、話す」
ロイドは、無線機には、向かわなかった。
補給車の出口へと、向かう。ヴァンツァーにも乗らずに、生身のままで。
外へ出たロイドは、前方にたたずむヴァンツァーに向かって、歩く。
「ロイド隊長……」
運転席の、ピウィーが、呼び止めた。
「エンジンを止めて。この場で待機していろ」
ロイドは、指示。そのまま歩きだす。
三機のヴァンツァー。
中央にナタリー。左にキース。右側はＪＪだ。

「投降するのですね」

ナタリーが、言った。

ロイドは、ナタリーのヴァンツァーを見上げた。

無言で、首を横に振る。

「ロイド……」

ナタリーは、右アームのショットガン、〝キャッツレイ〟を構えた。

銃口を、ロイドに、向ける。

すべてが、凍りついた。時間まで、止まったかのようだ。

「俺は、投降しない」

ロイドが、言った。

しかし、ナタリーは動かない。

〈どうした？　ナタリー〉

オルソンから、無線が飛ぶ。

「……」

〈撃つのだ。裏切り者を、殺せ！〉

ナタリーは、答えない。

〈撃て。早く！〉

オルソンが、叫んだ。
答えるかわりに、ナタリーの右アームから、キャッツレイが落ちた。
「ナタリー……」
キースが、つぶやく。
「バカだわ、わたしは……」
その声は、涙にむせんでいた。
〈ナタリー。貴様まで、裏切るつもりか！〉
「もうたくさんだわ。こんなこと！」
ナタリーは、絶叫。涙をこらえようともせず、
「わたしは、ずっと裏切っていたのよ。でも、もうダメ。これ以上、仲間を裏切れない。これ以上、自分自身を裏切れないわ！」
〈ナタリーめ。恥をかかせおって！〉
ナタリーは、ヴァンツァーから、飛び降りた。
「キース。意外な展開だ」
JJが、言った。
「そうか？　オレは何となく、こんな予感がしてたぜ」
キースが、言う。ヴァンツァーから、降りた。

「ま、そうかもな」
ＪＪも、ヴァンツァーを降りる。
補給車からの面々も、駆けつけてきていた。
「良かった。こうなって」
ピウィーが、キースに言った。
「ケッ。しょうがねえだろ。部下は、司令官に従うのがスジだからな」
キースは、ナタリーを、見やる。
ナタリーは、ロイドの正面に立ち、ロイドを見つめながら、言った。
「裏切り者は、あなたたちじゃない。わたしだったの」
「ナタリー」
「わたしが、〝キャニオンクロウ〟の副官になったのは、あなたたちを監視するため。お父さまと、オルソンから命令されて」
「お父さまって？」
ヤンが、尋ねた。
「わたしはナタリー・ブレイクウッド。ウィラス・ブレイクウッド将軍の娘……」
「何だって！」
キースが、驚きの声をあげた。

「それに……はじめから。あなたたちが、Bデバイスのマテリアル候補であることも知っていたわ。知っていて、隠していた。ドリスコルのことも、カレンのことも、すべて知っていて……」
「もう、いいんだ」
ロイドが、止める。
ナタリーは、やめない。
「いいえ。殺されるのは、わたしの方よ。仲間を裏切りつづけていたんだから……。わたしを好きにしていい。あなたたちの気がすむように！」
しかし……。
誰も、動かない。
「それなら……」
ナタリーの右手が、動く。
いつの間にか、短銃が、握られていた。
自分の頭に、向ける。
「ナタリー！」
キースが、叫ぶ。
ロイドの右足が、舞う。爪先が、短銃を蹴る。

短銃は、放物線を描いて、飛んだ。
ピヴィーが、あわてて、拾いにいく。背中に隠し、ナタリーに向かって、激しく首を横にふった。
「わたし……」
ナタリーは、ひざまずいた。頭を垂れた。
「ナタリー」
ロイドは、手を差し延べた。
「ロイド……」
「もういいんだ」
「でも」
「いっしょに、来るか？」
「えっ!?」
「この先、生き延びられる可能性は、少ない。それでも、良かったら……」
「ありがとう。ありがとう、ロイド」
ナタリーは、ロイドの手を握った。
支えられて、立ち上がる。
涙を拭いた、その顔に、まぶしい笑みが、浮かんでいた。

「ってわけで、キャニオンクロウ、全員集合ってことだな」
キースが、言った。
「おい、ピウィー。腹減った。何か、食わせろよ」
JJが、言う。
ピウィーはあわてて、首をふりながら、
「食べ物なんて、何にも……」
だが途中で、首を止め、
「しょうがないなあ。夜食にと思って取っといたハンバーガーが、ひとつだけ残ってるから、分けてあげるよ」
と、しぶしぶ言った。
「お〜い。ハンバーガーどころか、運転席の横に、お煎餅(せんべい)にキャラメル、カンパンに缶コーラ、スナック菓子にチョコレートが、どっちゃりとあるぜ」
ハンスが、叫ぶ。
「あっ、ダメダメダメダメ。それは、ぼくの非常食なんだから」
ピウィーは、血相をかえ、お腹をタプタプと揺らして、駆けだした。
久しぶりに、明るい笑い声が、巻き起こった。

32

ハフマン島随一の港町・ルーピディスは、日暮れを迎えようとしていた。
港には、百を越える倉庫が、碁盤（ごばん）の目のように、立ち並んでいる。
岸壁近くに、舗装されていない広場があった。
剝（む）き出しの土壌の上に、廃材や廃棄物が、乱雑に散らばっている。
その片隅。
大型補給車は、車体をボロシートの下に、隠していた。
「け、警備隊が、やってきたよッ」
シートの隙間から、外の様子をうかがっていたピウィーが、おびえた声で言った。
警備会社のヴァンツァーが、やって来る。倉庫のひとつひとつを、探りながら。
ざっと見渡しただけでも、十機は下らない。
「どうやら、サカタインダストリイに、雇われた連中らしい」
無線を傍受していた、ハンスが言った。
「おれたちが、ここにくることは当然、坂田も知っているだろうからな」

フレデリックが、言った。
「自分から、ワナに飛びこんじまったってわけか」
キースは早々に、ヴァンツァーに乗りこんだ。
しかしゲンツは、落ちついた口ぶりだ。
「何。心配はいらんさ。ご覧の通り、ルーピディスはこの島最大の港だ。ヴァンツァーの十機や二十機は、楽に隠せる」
その呑気な口ぶりに、ヤンが、呆れたように、言った。
「ほんと、いきあたりばったりね」
「あ〜、近づいてくるぅ」
ピウィーが、足を震わせる。
「全員。ヴァンツァーに機乗。待機！」
ロイドが、言った。
「ぼくは、どうすれば？」
ピウィーが、ロイドの袖を引く。
「ここで、待機してるんだ」
「でも……」
おびえるピウィーの肩を叩きながら、ロイドはメンバーに向かって言った。

「速攻で倒せ。銃器は、気づかれる。格闘戦に徹するんだ」
「つまり、おれの出番ってわけだな」
ヴァンツァーに乗ったキースが、ハンドロッドを構えた。
「金になんない戦いは、やんない主義なんだけどな」
ＪＪが、言う。
キースが、言葉を返した。
「ケッ、三十秒もかからねえ。戦いどころか、準備運動にもならねえさ」
「行くぞ！」
ロイドの声——。
キース、ＪＪ、ロイド、サカタ、ヤンの順序で、ヴァンツァーが飛躍。
三十秒どころか、十三秒後。
計十五機いた警備ヴァンツァーは、応援を呼ぶ余裕すらなく、壊滅していた。
「ピウィー。もう終わったぜ」
キースが、言う。
「サカタ、キース、ＪＪ。警備ヴァンツァーを、集めてシートの下に隠せ。他は、急いで、空の倉庫を探すんだ」
「はいはい、無給になっても、厳しさはかわらねえな、隊長さん」

「やばい。車がきたぞ！」
フレデリックが、叫んだ。
人けのない道を、無灯の車が、近づいてくる。
「オレがやる！」
キースのヴァンツァーが、疾走した。
「ま、待てよ。無線だ！」
ハンスが、あわてて、キャッチした電波を、各ヴァンツァーに流す。
〈おい、ロイド。君たちか！〉
「この声は！」
JJが、声を上げた。
「攻撃するな！」
ロイドは、キースを、止めた。
車は、ロイドたちの前で、停止した。
一人の男が、降り立つ。
ドクター・ブラウンだ。
「やっぱり！」
JJが、うれしそうに、言った。

「ドクター。どうして、ここへ？」
ロイドが、尋ねた。
「ぐうぜん、この町に流れついたら、おまえさんたちが、こっちに向かってるっていう話を聞いてな」
「カーッ。そんなに広まってるのか！」
キースが、頭を抱える。
「安心しろ。安全な倉庫を知ってる。わしに、ついてこい」
ドクター・ブラウンは、そう言って、車に乗りこんだ。
イーヒンが、疑うように、
「彼。信用できるの？」
「敵と無線を、とっていた様子はないけど……」
ハンスが、言った。
「ロイド、どうするの？」
ヤンが、尋ねる。
ロイドのかわりに、ＪＪが、答えた。
「心配ねえ、ドクターは、信用できる」
ロイドは、それに同意した。

「よし。各機、補給車に乗れ。ピウィー、ドクターの車に続け！」

３３

すでに、陽は落ちている。
点在する街灯が、立ち並ぶ倉庫を、薄暗く照らしていた。
古びた倉庫の脇に、一台の大型車がある。
その姿を闇に隠すかのように、街灯の明かりの届かない場所に止まっていた。
車内灯も、消したままだ。
だが、無人ではない。
運転席と助手席に、二つの人影が確認できる。
「もうすぐ、テロリストどもが、やって来るはずです」
運転席の男が、言った。オルソンの声だ。
助手席の男は、答えない。
ふたたびオルソンが、沈黙を破った。
「ＵＳＮとの共同作戦が、お気にめしませんかな？　それとも、ご息女のことが……」

「よけいなおしゃべりは、慎め」
助手席の男が、叱るように言う。ブレイクウッドの声だった。
オルソンは、無視した。とても上官に対する言い方とは思えない挑発的な口調で、
「将軍。われわれは、国際平和維持機構に対して、今回の件を鎮める義務があることを、お忘れなく」
だが、ブレイクウッドは、感情をかみ殺すかのように、
「わかっている」
とだけ、つぶやいた。
前方の倉庫の一点が、キラッと光った。
「来たようです」
「……」
「将軍は、ここで休んでいてください。私がヴァンツァーに乗って、直接指示をとりますので」
オルソンは、静かに、車を降りた。
すぐ後ろの闇に、ヴァンツァーが置いてある。それに乗りこむ。
「ナタリー……」
車に残ったブレイクウッドが、苦悩するように、つぶやいた。

古い倉庫の前で、ブラウンは、車を止めた。
倉庫の入口に立ち、鉄の扉を引く。
鍵はかかっていない。軋んだ音を響かせて、扉は開いた。
「ここだ」
後方に止まっている補給車に、合図。
ふたたび車に乗り、倉庫の中へと進んだ。
補給車も後に、続く。
「昔の知り合いが、この町にいて、空き倉庫を提供してもらったんだ。もちろん、その男にも何に使うか言ってないから、心配は無用だ」
ブラウンは、入ってきた扉を、閉めながら言った。
「しかし、真っ暗だ。おまけに空気もワリぃ」
キースが、言った。声が、倉庫内にこだまする。
それを受けて、数倍大きな声が、響いた。
「せめて、明るくしてやろう」
「その声は、オルソン！」
「まさか――!!」
四方から、強烈なライトが、照りつけた。

「完全に、包囲されてるわ」
ナタリーが、叫んだ。
五十機近いヴァンツァーが、取り囲んでいる。
「ちくしょう、ワナだ」
キースが、ヴァンツァーに飛び乗る。
「ドクター。まさか、おれたちを売ったんじゃ」
フレデリックが、言った。
「バ、バカ言え。考えられん」
ブラウンは、キャニオンクロウ以上に、あわてふためいている。
「彼は、無実だ。だが連絡に電話を使ったのが、失敗だったな」
オルソンが、言った。
「しまった、盗聴されていたのか。すまん、まさかこんなことに……」
ブラウンが、詫びる。
「サカタ、ドクターを保護しろ。散らばれ、狙い撃ちされる」
ロイドはツィーゲライフルで、照明を撃破。
ふたたび、漆黒の闇に包まれた。
敵ヴァンツァーに、動揺が走る。

闇の中を、キャニオンクロウは、疾走した。
数えきれない修羅場を、くぐってきた傭兵部隊だ。
敵の発するわずかなセンサー反応だけを頼りに、一機ずつ、確実に撃破してゆく。
あわてた敵ヴァンツァーが、ミサイルを放った。
自軍のヴァンツァーに命中。炎上した。
「バカ者。屋内戦のノウハウも、知らんのか！」
オルソンが、怒鳴る。
「オレたちキャニオンクロウに関わっているより、正規軍のトレーニングをした方が、正解だったかもな」
キースが、笑った。
「通信兵。増援を呼べ」
オルソンが、叫ぶ。
「了解……ウッ、うわあ～っ！」
通信兵ヴァンツァーのボディが、大破。
キャニオンクロウの仕業ではない。
いつの間にか、開いた倉庫の扉のところに、一台の大型車がいる。
その車両に設置されたショットガンが、狙い撃ちしたのだ。

「将軍。何を……」
オルソンが、目を見開く。
ブレイクウッドは、きっぱりと、
「増援を要請する必要はない」
「どういうことです、これは!?」
ブレイクウッドは、オルソンの問いには、答えず、
「ロイド。わたしだ。ブレイクウッドだ。君たちを、支援する」
と、断言した。
「将軍！」
「お父さま――！」
「おのれ、ブレイクウッドめ、裏切ったな!!」
オルソンのヴァンツァーが、跳躍した。
ブレイクウッドの乗った車両に、突き進む。
その進路を、ナタリーが塞いだ。
「ナタリー。私が、あれだけ目をかけてやったのに、歯向かう気か」
オルソンが、唸る。
ナタリーは、答えない。かわりに右アームのキャッツレイが、火を噴いた。

一撃でオルソンの右アームを、撃破。やっと口を開いた。
「鍛えられた技を、あなたに見てもらえて、うれしいわ」
強烈な皮肉だった。
オルソンの顔が、怒りに硬直。いびつな笑いに、頬を引きつらせ、
「残念だな。おまえたちなら、最強のデバイスになったろうに！」
ナタリーは、目を見開き、
「そ、それじゃあ、わたしも……」
「そうさ。ロイドたちといっしょに、改造するつもりだった……ウッ！」
キャッツレイが、ボディ中央部を貫いた。
「あなたは、すべてを裏切った。本当の卑怯者だわ」
ナタリーが、憎しみをこめて、言った。
「ふふふ。すべてを。私は、はじめから、祖国以外に忠誠は誓っていない」
「祖国!?」
祖国などという言い方は、すでにOCUでもUSNでも、死語になっている。
「オルソン、あなたはいったい……」
「ナタリー、そしてロイド。だれが死んでも、この計画は終わりはしない。ふふふ、ハハハ。ハハハハハハハハハハハ！」

「あぶない」
キースが、ナタリーに、覆いかぶさる。
同時に、オルソンの乗ったヴァンツァーが、自爆した。
「皆、急げ。坂田は君たちの襲撃を恐れて、この島を離れようとしている」
ブレイクウッドが、叫んだ。
「何だって！」
サカタが、聞き返す。
「十六番デッキから、船で逃亡する気だ」
しかし、残った敵ヴァンツァーも、必死だ。
抜け出す隙はない。
しかもオルソンをやられ、全員血迷っている。
「裏切り者め！」
ミサイルが、ブレイクウッドに向けて、飛ぶ。
ナタリーはヴァンツァーごと、車におおいかぶさった。
ミサイルが、背中に命中。ボディが大破した。
「ちっくしょう」
キースが這い、ミサイルを発射したヴァンツァーを、一撃で仕留めた。

「ナタリー!!」
ブレイクウッドは、車のドアを開ける。
「危ない。お父さま、中にいて」
ナタリーが、止めた。
「しかし……」
「わたしは、だいじょうぶ。これくらいでやられるようじゃ、キャニオンクロウの副官は勤められないもの」
「ナタリー」
「でも、どうして、お父さま?」
「……」
「どうして、あれほど軍に忠誠を、誓っていたはずなのに?」
「自分でもわからん。しかし……」
ナタリーは、父親の言葉を待った。
ブレイクウッドは、ウインドー越しに、ナタリーのヴァンツァーを見上げて言った。
「しかし、何かが間違ってる。そう感じるんだ」
「お父さま……」
ナタリーのヴァンツァーが、しっかりと車に寄り添う。まるで父親にすがりつく、娘のよ

うに。
「敵部隊、全滅！」
「タダ働き、完了」
キースとＪＪが、言った。
「皆、無事か？」
ロイドが、尋ねる。
各自、あたりを見回す。ヤンが、叫んだ。
「サカタが、いないわ！」
「何ッ！」
「そういえば、戦闘中、おれの横を抜けて、外へ飛び出していったっけ」
ＪＪが、思い出すように、言った。
「サカタが、戦線離脱!?」
「信じられん」
「ハンス。サカタの反応は、あるか？」
ロイドが、尋ねた。
「ちょっと待って」
ハンスが、センサーを操作。

「いたいた！　フルスピードで、港の方へ移動してる」
「何だって」
「あの……」
ピウィーが、倉庫の中に、入ってきた。
いつの間にか、倉庫の外へ、出ていたらしい。
「ぼくが外で……逃げたんじゃないよ。外で補給車を守ってたんだ。ドクター・ブラウンだって、ぼくが補給車に乗せて、無事だったんだし」
「わかった。それで」
ロイドが、先をうながす。
「サカやんが、走っていくんで『どこ行くんだよー？』って聞いたら『親父と兄貴と、話をつけてくる』って」
「そうか！」
「あいつ、一人で乗りこんでいったのか」
「ケッ、いまさら、なにを話すってんだ」
「ぼろぼろのヴァンツァー一機で、敵の懐に飛びこむなんて……」
「もしかして、死ぬ気!?」
「全機、十六番ドックへ急げ！」

ロイドのヴァンツァーが、先頭を切って、駆けだした。

３４

十六番ドックには、一隻の船が、横たわっていた。
すでに錨は上がり、いつでも出航できる体勢だ。
開いた後部ハッチ目指して、一台の車が走ってきた。
「止めろ」
ハッチに乗りこむ寸前。ドックのコンクリートの上で、車は停止した。
「どうしたんです、会長？」
運転していた浩一が、助手席の玲二に尋ねた。
玲二は、答えずに、車を降りた。
「気分でも、悪いんですか？」
浩一も、車を降りる。
車体を挟んで、向かい合った。
玲二は、無言だ。

「心配はいりません。もともと開発本部は、ロングリバース島にあったわけですし、計画は続行できます。それより、早く船に……」

浩一は、あたりに、目をやる。態度に落ち着きが、なくなってきている。

そんな浩一を、ジッと見つめて、玲二がつぶやいた。

「もう、やめよう」

「はあ？　今、何と？」

「浩一。このプロジェクトは、中止するんだ。すべて、失敗だ」

「何を言っているのです、会長。Ｂ型デバイスの研究も、完成しつつあります。加えて開発中のＳ型が、完成すれば……」

「Ｂ型もＳ型も、おまえとあの国が、勝手に開発したものではないか」

「人工的に培養した胎児の脳を使うことの方が、成人の脳を使うことよりも人道的だとおっしゃるつもりですか？」

「……」

「ばかばかしい。われわれの技術は、すでに神の手をこえたのですよ。これ以上、何を恐れる必要が、あるというのです？」

「すべてが、間違っておったのだ。わしは、この歳になって、やっと気づいた。自分で進めているときには、気がつかなかったが、おまえを見て、やっとわかったんだ。すべてが間違

いだったと」
浩一は、苦笑して、
「いまさら、何を……」
玲二は、浩一の言葉を止めて、
「わしはすべてを、世界に向けて公表する」
「会長」
「おまえとあの国……そして、わし自身の過ちを、世界に向けて懺悔するのだ」
「もう遅いですよ、お父さん」
何年ぶりのことだろう。浩一が、父親をそう呼んだのは。
「浩一。おまえだけじゃない、わしが間違っていたんだ。おまえに、こんな悪魔の真似事をさせた、わしが！」
「ダメです。ダメなんですよ、お父さん」
「確かに手遅れかもしれん。だが計画を止め、あの国の野望を、止めることは可能だ」
「いいえ。ダメなんです！」
「浩一！」
玲二は、息を飲んだ。
浩一の手に、銃が握られている。

「ダメなんですよ、お父さん。もう後戻りできないところまで、きてしまったのです」
浩一の瞳から、涙がこぼれた。
頬を、アゴを伝う。ほろりと地面に落ちたとき、乾いた音が、辺りに響いた。
玲二は、目を見開いて、浩一を見つめる。
「親父、兄貴――!」
サカタの叫び声が、飛んだ。
「りゅ、竜二……」
玲二が、うめく。
「さよなら、お父さん」
浩一は、玲二を残して、車に乗った。
急発進で、船に乗りこむ。ハッチが締まり、船は発進してゆく。
「親父――!」
ヴァンツァーから降りたサカタは、倒れている玲二に駆け寄った。
胸から広がった血が、コンクリートを赤黒く染めている。
「親父、しっかりしろ。親父!」
「竜二、ひさしぶりだな」
玲二は、サカタを見上げて、笑みを浮かべた。

「親父、もうしゃべるな。今、病院に運ぶ」
サカタは、玲二の身体に、腕をまわす。
「いや。降ろしてくれ」
玲二は、サカタを、押し止め、
「わしは、もう駄目だ。それより、竜二。よく顔を見せてくれ」
「親父……」
「わしは、バカなことをした。人類を不幸にすることに、命をかけていた。死ぬ間際になって、わかるなんて、おろかなものだ……」
「……」
「だが、あいつは、まだ気づいていない」
玲二は、サカタの手を、握りしめた。
「竜二。浩一は、ロングリバース島へ向かった。地下に、開発本部がある」
「……」
「あとを、あとを、頼んだぞ……」
「親父!?　親父――ッ!!」
サカタの絶叫が、港に悲しく、こだました。
ロイドたちが、十六番ドックに駆けつけたとき。

船は出港し、どこにも姿は見えなかった。敵の姿も、見られない。
父親の亡骸を抱く、サカタだけがいた。

35

「行きましょう。隊長」
サカタが、立ち上がった。
父親の亡骸を、抱えて。
ブラウンのところへ歩く。
「ドクター、親父をしばらく、預かってください。すぐに迎えに、戻りますから」
「わかった」
父親の遺体を、ブラウンの車の後部シートに、横たえた。
「親父、行ってくる」
静かに、黙禱。
ロイドの前に、立つ。
正面から見つめて、言った。

「サカタインダストリイの開発本部は、ロングリバース島です。坂田浩一は、今そちらに向かっています。行きましょう、隊長！」
瞳に、炎があった。
ロイドとは、違う。しかし、ロイドに負けないほど、熱い炎が。
「わかった、サカタ」
ロイドはサカタを見つめ返し、しっかりと頷いた。
「ドックの外れのヘリポートに、私が乗ってきた軍用ヘリがある。それを使うといい。だが、パイロットが……」
ブレイクウッドは、言葉を詰まらせる。
ピウィーが、涙を拭いながら、言った。
「ぼくに任せて。車だけじゃなくて、ヘリも、飛行機だって操縦できるんだから」
「将軍、あなたは？」
フレデリックが、尋ねた。
「私は、ここに残る」
「でも、お父さま……」
ナタリーが、駆けよった。
「心配するな、おまえたちに味方したのも、私自身が選んだ道だ。ナタリー、おまえは自分

の信じた道を行きなさい」
「お父さま……」
ブレイクウッドは、娘から視線を逸らした。
「ロイド、娘を頼んだぞ」
「わかりました。……全機、ヘリポートへ直行。ロングリバース島へ飛ぶ」
「了解！」
キャニオンクロウ全員が、呼応した。

３６

「おまえを処分するよう、本国から命令された」
不気味な声が、辺りにこだました。
「まっ、待ってくれ。Bデバイスの問題は、加速剤と精神抗性剤の調整だけで、すぐにでも解決するんだ」
浩一は、血相を変えて、叫んだ。
「もう、その必要はない。Sデバイスが、完成した今ではな」

「そ、そのS型を製造したのも、わが社だぞ」
「いや。開発したのは、わが祖国、ザーフトラ共和国だ。サカタインダストリイは、その試作品を造ったにすぎん」
「そ、そんな……」
「結局、おまえは、われわれの要求を満たすものを、造れなかっただけだ」
突き放すような、冷酷さを帯びた声だった。
「た、助けてくれ。おねがいだ。この通りだ！」
浩一は、恥も外聞もなく、土下座した。
「ふふふ。哀れなヤツだ。それほど、助かりたいのか？」
「何でもする。だから、命だけは……」
「最後のチャンスをやろう。キャニオンクロウが、ここに向かっている」
「な、何だって」
「おまえが開発した、そのグローニングでロイドを殺せ。そうすればB型デバイスの開発は成功と判断して、命は助けてやる」
「ロイドを……」
「やるか。それとも、今すぐ死ぬか。道は二つに、ひとつしかない」
「わ、わかった。やる。ロイドを殺す」

「それでは、ジックリと、観察させてもらおう。ふふふ、ふはははは……」
聞くものの心を逆撫でする笑い声だった。

「ロングリバース島の地下に、こんな施設があったなんて。信じられない」
ハンスが、あたりを見回す。
「人間が入って来れなかったからこそ、ここまででかい基地が造れたということだな」
JJが、言った。
豊かな自然におおわれた、ロングリバース島。
環境保護区に指定され、立ち入り禁止となっている。
その地下に造られた、秘密工場の内部だった。
だだっ広いフロアーに、ゆうに直径一メートルを越える鉄柱が、無数に立っている。
鉄柱どうしの間は、十メートルと、離れていない。
極めて見通しが、悪かった。
人影は、見られない。
シンと、静まり返っている。
「おかしいわ。わたしたちが追ってくるのは、承知しているはずなのに」
「罠かもしれないよ」

イーヒンが、言った。
「うん。可能性はある」
ヤンが、表情を強張らせた。
「全機。戦闘態勢を崩すな」
ロイドが、言った。
全機、ゆっくりと前進する。
「おや!?」
前方、鉄柱の影が、かすかに揺れた気がした。
先頭を進んでいたサカタは、鉄柱を凝視（ぎょうし）した。
やはり影が、動いた。
銃器の先だ。狙いが、ロイドに向かっている。
「隊長、危ない！」
サカタは、ダッシュした。
銃器の先から、火炎――！
寸前のところで、ロイドはかわしていた。
サカタは、鉄柱をまわりこむ。敵ヴァンツァー発見。
通常のヴァンツァーをパワーアップした改良型である。

右アームに構えたマシンガン、〝アールアッソーSP〟を連射した。
キースが駆けつけ、〝F―4ハンドロッド〟で、レッグを撃破する。
舞い降りたJJが、頭部に〝ダスラークロウ〟アームの肘を、のめりこませた。
一般的なヴァンツァーなら、一撃で壊滅している。
だが、大きく変形しながらも、辛うじて原型をとどめていた。
「しぶとい野郎だ」
JJは正面に立ち、ライフル、〝アイビスⅢ〟を向けた。
「ま、待ってくれ！」
敵ヴァンツァーが、叫んだ。
「安心しな。すぐ楽にしてやる」
JJは照準をボディ中央に定めた。敵ヴァンツァーはおびえきって身動き一つ出来ない。
「待ってくれ！」
サカタが緊迫した様子でJJの前に立ちふさがった。
「どうしたんだ、サカタ？」
JJは、構えを解いた。
サカタは、それには答えず、敵ヴァンツァーに向かって、
「兄貴……？」

「リュ、竜二！」
「やっぱり兄貴！」
「助けてくれ、竜二。殺さないでくれ！」
浩一の乗ったヴァンツァーは、武器を足元に捨てて、ひざまずいた。
あわれなほどみじめにひれ伏す。
サカタはそれを複雑な表情で見おろしながら、
「兄貴。なんで親父を殺した――!?」
とつぶやいた。すぐに浩一は顔を上げ、
「わ、私は、あいつらの言いなりに、なっていただけだ」
と、弁解する。
「あいつらだって？」
「あいつらとは、誰のことだ？」
ロイドが、尋ねた。
「ザーフトラ共和国だ」
「何だって!?」
「ザーフトラ共和国は、弱った国力を取り戻すために、サカタインダストリイ社に、あのデバイスの開発を命じ、そしてハフマン島を実験場に……！」

宙を裂く音――

浩一のヴァンツァーのボディに、大きな穴が開いていた。

そこから、多量の血が、流れだす。

「兄貴!」

サカタが、駆けよった。

かすかな声が、聞こえた。

「リュウジ……私が、まちがって……」

「兄貴、兄貴――!」

サカタは、言葉の続きを、聞きたかった。

だが二度と、浩一の声を、聞くことはなかった。

兄は弟の腕の中で絶命していた。

「兄貴……」

サカタはぴくりとも動かない兄を見つめた。

その肩を小刻みに震わせながら、押し殺した声でつぶやいた。

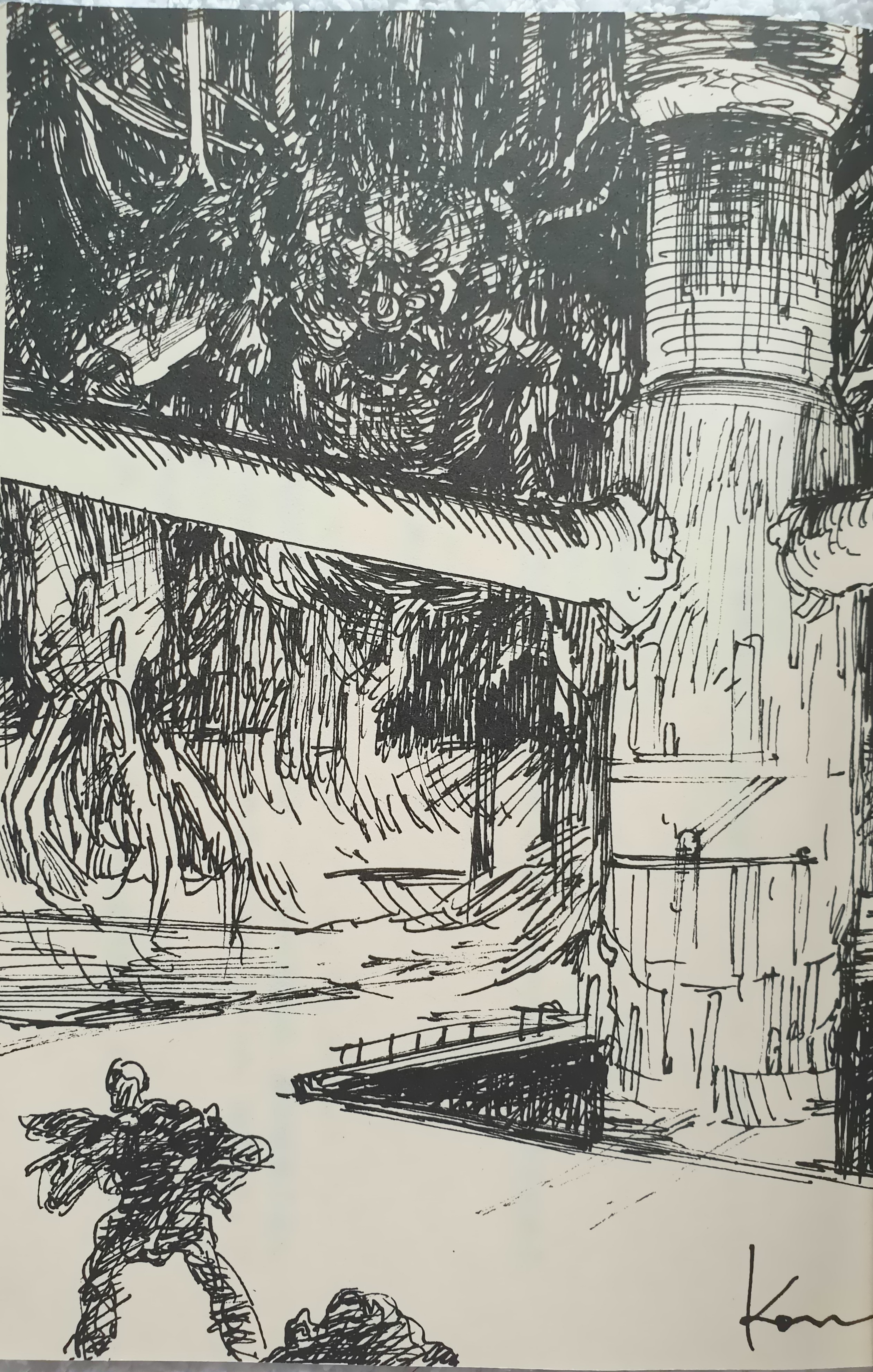
「許せない。親父を、兄貴を狂わせ、そして奪った連中を、おれは決して……」

「敵がいる。用心しろ」

ロイドが、叫んだ。

それぞれのヴァンツァーが、鉄柱に身を隠す。
だがサカタだけは、倒れた兄のヴァンツァーに、寄りそっている。
「サカタ。ここは危ない」
ロイドが、駆けよった。
「隠れることはない。そいつは、用が済んだので、始末しただけだ」
巨大な地下室全体を揺るがす、不気味な声が響いた。
「あ、あれを見てよ！」
イーヒンが、フロアーの奥を指さす。
「な、何。あの、悪趣味なモノは」
ヤンが、声を上げた。
フロアー奥に、合金で造り上げた巨大な獅子の像が、そびえ立っていた。
高さは五十メートル近い。
その表面には、筋肉のごとく、無数の配線が張りめぐらされている。
瞳は鋭い輝きを讃え、生命を持っているかのようだ。
「すごい動力反応だ」
ハンスが、言った。
「動くのか、あれが？」

JJが、言う。
それに答えるように、獅子の瞳が赤く燃えた。
一筋の紅の光が、JJのヴァンツァーを貫く。
悲鳴あげる間もなく、JJは、倒れた。
「JJ！」
キースが、動きを止めたJJを、鉄柱の影に隠す。
「……キース……おれの金を……国の家族に……」
それがJJの最期の言葉だった。
ライトのスイッチを切るようなあっけなさ、JJは絶命していた。
「JJ、ウソだろ。からかうなよ。おめえが、死ぬわけ、ねえじゃねえか。そうだろJJ、JJ、JJ――！」
キースはJJのヴァンツァーを抱きしめ、絶叫をくりかえす。
「フフフ。運が悪かったな。わたしが動く証明を、しただけなのに」
超合金の獅子の怪物は、牙をみせた。
「貴様……まさか、ドリスコル⁉」
ロイドは、目を見開いた。
獅子の口が、いっそう大きく牙をむいた。



「そうだ、ロイド。わたしは、死ぬことなどない。おまえとの戦いの後、自らの脳をヴァンツァーとつなぐS型デバイスとして甦ったのだ」

「な、なんだと……」

「これが、真の答えだ。パイロットとコンピューターを融合させることこそ、最強のヴァンツァーを生み出す方法だったのだ。これで、わが祖国ザーフトラ共和国は、再び世界の権力者となれる。フフフフフフフ。フファハハハハハハハハハハハハハハ――!」

「バカな」

ロイドは、唾を吐くように、言った。

「何だと!?」

獅子の目が、赤黒く光る。

「この島で起きたことは、何もかもバカげている。その象徴が、ドリスコル。そのおまえの姿だ」

獅子の目から、紅色の光の玉がほとばしった。

「ロイド、危ない!」

ヤンが叫んだ。

ロイドの前の鉄柱が、飴のように溶ける。

身を伏せて、何とか避けた。

しかしロイドは、言葉を止めなかった。
「こんなバカげたことのために、数えきれない人々が犠牲になった。何が、祖国だ。何がザーフトラ共和国だ」
「黙れ。わが祖国を侮辱することは、許さん」
ロイドは、身を起こした。
獅子に向かって、歩く。その瞳を、見つめながら、
「貴様を、生かしておくわけにはいかない。今の俺には、貴様を殺すことしか、考えられない」
と、つぶやいた。
「面白い。やってもらおうか、ロイド!!」
「隊長、危ない！」
「危険だ、戻れ！」
「戻って、ロイド。お願い！」
だが、ロイドは、足を止めない。
平然と、しかし強靱な意志をこめて眼前の敵に迫っていく。
その双瞳は、獅子の赤眼以上に、燃えていた。
〝カレン。俺は、こいつを倒す。
君のため。俺自身のため。このバカげた戦闘の結末をつけるため。

すべてに俺が、この手で、きっちりと結末をつける。
見ていてくれ、カレン。
カレン、カレン、カレン――!!
「カレン、カレン、カレン、カレン、カレン、カレン――!」
ロイドは、絶叫した。
「隊長、一人では、行かせません。親父と兄貴のカタキをこの手でうちます」
サカタが、身を起こした。
「JJ、最後まで、いっしょに戦おうぜ」
キースはJJを抱きかかえ、後に続く。
「これがわたしの信じる道。だから、わたしは逃げないわ」
ナタリーが、歩みだす。
「おれはこの島へ来て、ロイド……おまえたちと会って、本当の人間の姿を教えられた気がする。本当に人間を愛することの意味を、おまえだちに教えてもらった気が」
フレデリックが、腰を上げた。
「結局コンピュータや武器を動かすのって、人間なんだよな。人間の熱い心なんだよな。おれも教えてもらったよ。あんたらに会って」
ハンスが、歩を進めた。

「もうガキじゃないんだ。怖くて、脱走兵になったんじゃない。犬死(いぬじに)が怖かったけど、ぼくだって、ぼくだって……」

何かをふりきるように、イーヒンは立ち上がり、歩きだした。

「イーヒン、あんた一人じゃ行かせないよ。皆、わたしを置いて行かせないからね」

ヤンが、歩く。目に笑みさえ、浮かべて。

「どうやら、おれが命をかけてやって来たことは、間違ってなかった。先に往(い)った同志たちにも、胸を張っていえるぜ」

ゲンツが、大股で進む。

「みんなと、みんなといっしょなら、怖くないや。ぼくだって、ぼくだって、みんなに、本当に大切なものを、いっぱい、いっぱい教えてもらったんだから」

ピウィーが、進む。

足が震えても、逃げない。唇が震え目が震えても、泣かずに。

「ふふふ。バカどもめ。手間が省けるというものだ。一人一人、嬲(なぶ)り殺しにしてやろう。祖国ザーフトラ共和国復興の生贄(いけにえ)としてな」

「待った！」

声が、飛ぶ。

「若造だけには、まかしておけん」

ロイドが荒れていたころ、闘技場で戦った老戦士・アルダーだ。
「神も見ていらっしゃいます。さあ勇気を出していきましょう」
グレイロックの町で市民救出に当たっていた牧師・ポールだ。
「おれをはじめて、倒した男についてくぜ」
キースを半殺しにし、ロイドに破れたグレゴリオ・マイアス、通称コングだ。
「ロイド、オレ、いっしょに、戦う。この島の、自然守るため」
ポルンガだ。
「おれらしくもねえが、ポルンガの熱意に押されてな」
ボビーだった。
「き、貴様ら。何者だ。なぜ、ここへ――!?」
ドリスコルの声に、動揺が走る。
ポールが、口を開いた。
「港で、出会いました。全員、同じ夢を見ていたんです」
「同じ夢だと!?」
「金髪の白人女性の夢でした。夢の中で、彼女が言いました。
『ロイドを助けて。みんなの気持ちを合わせて、いっしょに戦って。みんなの気持ちが、揃えば、必ず勝てるから』と……」

「カレンが、みんなを呼びよせたんだよ!!」
ピウィーが、叫んだ。
「バ、バカな。茶番は終わりだ！」
獅子の目から、赤光の熱線(レーザー)が、飛ぶ。ロイドをまともに直撃した――。
だがロイドはびくともしない。逆に熱線(レーザー)の方が、ロイドの気迫におそれをなしたかのように乱反射してしまったのである。
ロイドは、まったくの無傷であった。
「ど、どうしたというのだ」
さらに熱線を連射。
だがやはり、鏡に当たった光のごとく、跳ね返ってしまう。
「オ〜ッ、ソーリー。夢の中で、その女性は、もう一言いっておりました」
ポールが、思い出したように、
「『三つ目の力を、ロイドのために、使うときが来た』と……」
「カレン――！」
ロイドの脳裏に、生前カレンが言った言葉が、はっきりと浮かんだ。
〝だってわたしの超能力は、三回しか使えないんだもの。
三度目は、あなたのために使うわ。

あなたがとっても困ったときのために、大切にとっておくの……〟
「カレンは、生きている。今、ここにいる。そして俺たちといっしょに、戦っている」
ロイドの身体に、力があふれた。
「ほざくな！」
ドリスコルが、叫ぶ。
サカタに、ナタリーに、キースに、フレデリックに……。
赤光色の熱線が飛ぶ。
しかし、ロイド同様。
その身を貫かずに、反射してしまう。
「こ、これは、どういうことだ」
「人間を機械と、同じように考えた。お前の負けだ」
ロイドが、言った。
「な、何だと——！」
「人間には、機械と違って〝心〟がある。〝魂〟がある。今も俺の中で、カレンの心が魂が、俺たちといっしょに、戦っているんだ」
「バ、バカな」
「もう一度、俺を撃ってみろ」

ロイドは、胸を張って、目を閉じた。
――カレンだけに、戦わせはしない。俺の〝心〟と〝魂〟で、ドリスコルの脳を破壊する。
そう、強く念じて。
「よおし、望み通りに……！」
獅子の目から、ロイドのボディ中央に、熱線が飛ぶ。
「ギアアアア――！」
悲鳴は、ドリスコルのものだった。
熱線が、正面に反射して、獅子の額に当たったのだ。
ロイドは、カッと目を見開いた。
「〝心〟こめろ。〝魂〟をこめて、ドリスコルに撃ちこむんだ」
「了解！」
「オーケー！」
「まかせてと！」
「オー、ジーザス」
全員が心をこめて。魂をこめて。
武器を構えた。
そして、獅子の額、めがけて。撃つ――。

「ギアアアア――ッ、ググググ――――ズッ!!」
あたりを揺るがす。悲鳴。
獅子の身体に、放電が走る。火炎が上がる。スパークする。
そして。破裂――。
巨大な獅子は朽ち果てたように、ボロボロと崩れ落ちていく。
「か、勝った」
「化け物を、やぶった」
「キャッホー!!」
ロイドを中心に、歓声があがる。
歓声を、不気味な笑いが、打ち消す。
「勝ったつもりか」
フロアーに転がった、コンピューターから、歪んだ声が響く。
「おまえたちは、しょせん歴史の小さな〝コマ〟でしかない。おまえたちのしたことが、世界に与える影響など、何もないのだ」
その言葉を、ロイドは力強く、否定した。
「いや、人間は〝コマ〟ではない。〝歯車〟だ。
俺たち一つ一つの〝歯車〟が互いに重なり合い、そして次の時代の〝歯車〟をまわす。俺

たちが、回らなければ、決して次の時代の〝歯車〟は、回らない。

俺たちは、ここハフマン島で、時代という〝歯車〟を回し、そして狂った〝悪夢〟を終わらせたのだ」

「〝悪夢〟が、終わるものか。またどこか別の場所で、必ず始まる。おまえは、それをすべて、消し去ることができるのか？　ロイド……」

「次の〝悪夢〟は、次の〝歯車〟が、消す。俺は、目の前の〝悪夢〟を消すだけだ」

ロイドは、ツィーゲライフルを、コンピューターに向けた。

トリガーを引く。

コンピュータは、一撃で四散した。

内部から、ゲル状の物体を飛び散らせ、かすかに腐臭（ふしゅう）を発しながら。

３７

「終わったぞ、ＪＪ。安心しな、おまえが命がけで稼いだ金は、オレが責任持って、おまえのアフリカの家族に届けてやるからな」

キースが、言った。

「アフリカの家族だって?」
フレデリックが、訊く。
「ヤツは十二人兄弟の長男だった。親父は死んで、お袋は病気。妹弟たちは、今でも貧困のどん底で生活しているんだ……」
「それで、傭兵に」
「あいつの口癖だったよ。『必要な金が入ったら、アフリカの家族のところに帰る。オレは、おまえとは違う。必要のない金のために、人は殺せない』ってね。
おっと、すまねえ、JJ。二人きりの秘密だったっけ」
キースは、抱えた亡骸(なきがら)に、詫びた。
「隊長、おれ、この島を離れようと思います。親父と兄貴を連れて、故郷に……」
サカタが、つぶやいた。
「ルーピディスで別れた父が、心配だわ。きっと父の行為は、反逆罪として扱われるでしょうから……」
ナタリーが、言った。
ゲンツが、口を開く。
「おれは、この島を本当に人の暮らせるところにする。おれの戦いは、まだまだ終わっちゃいねえ」

ロイドに向かって、
「どうだ。いっしょに？」
と、訊く。
しばらく思案するように、沈黙した後。
ロイドは、つぶやいた。
「すべては、この結末をつけてからだ」
崩れた獅子の像、散らばったドリスコルのコンピューターを見やってから。
ロイドは、指令を飛ばした。
「ここを爆破する。全員、ヘリまで急げ！」

〈国際平和維持機構のメルディフスキー事務局長は、昨夜未明に起きたハフマン島フォートモーナス市から約50キロメートル離れた沖合に浮かぶ、ロングリバース島での爆発について、ハフマン島のテロリスト組織〝ハフマンの魂〟が、密かに本拠地としていたロングリバース島で、集団自決を行ったと語り、これによりハフマン島の問題は、すべて解決されたと公言した。

――ニューヨーク・デイズ紙より――〉

３８

ハフマン島から、帰国して、半年になる。

フレデリックは、自室でパソコンに、向かっていた。

壁際には、先日受賞した、世界ジャーナリスト大賞の賞状が飾ってある。

それは、従軍記者として、ロングリバース島の爆発と第二次ハフマン紛争の真相について発表した記事によって、受賞したものである。

この記事は国際的な反響を呼び、世界各国で真相を突き止めようとする運動が、さかんとなった。

高まる国際批判の中、ＯＣＵ・ＵＳＮ両国は、報道された内容の一部が、事実であったことを認めた。

記事発表の直後メルディフスキー氏は、国際平和維持機構の事務局長を辞任している。

しかしザーフトラ共和国は、この記事の内容について強硬に、否認を続けていた。

また、記事を発表以来、何者の仕業か正体はわからないものの、「トキオ・タイムス」には、様々な有形無形の圧力があったもの事実であった。

そのせいもあるが、現在、フレデリックは長期休暇をとっていた。
この休暇の目的は、二つあった。
ひとつは、ハフマン島での体験を、一冊の本にまとめること。
いま、パンコンに打ちこんでいるのも、その原稿だった。
『祖国達の島』と、タイトルを決めていた。
冒頭の献辞は、次のような一節からはじまる。

〝この本を「キャニオンクロウ」のロイド・クライブ隊長、隊員たち、そして亡き親友パク・イルに捧げる。
この真実の物語は、彼、彼女らの激しい怒りと、深い悲しみから生まれた。
現在彼らの一部は、ハフマン島全土を国境も民族差別もない独立国家にするための活動を始めている。
彼らの願いが、全世界の人々の心に届くことを、わたしは祈り続ける。
フレデリック・ランカスター〟

しかし、そこまでしか、原稿は進んでいない。
ふと目を閉じると、ハフマン島での出来事が、生々しく思い浮かぶ。

その渾然とした体験を、どこからほぐして、文章という一本の糸にしてゆくか。
思案している最中だった。
「パパッ！」
ドアが開き、ナオミが駆けこんできた。
旅立つ前までは、部屋には鍵をかけ、立ち入り禁止にしていた。
今は、違う。
鍵は、開けたまま。来るものは、拒まずの姿勢だ。
何といっても、ここは仕事場ではない。
大切な家族と暮らす、家庭なのだから。
「どう、仕事の具合は？」
ナオミが、訊く。
「なかなか、まとまらなくてね。困ってるんだ」
幼い娘に、仕事のことを、ありのままに話す。
これもハフマン島へ行く前なら、考えられないことだった。
「そう言うときは、気分転換に、散歩をするといいのよ」
「そうだな……。つきあってくれるかい？」
「うん！」

ナオミは、満面の笑みを浮かべた。
手をつないで、部屋を出る。
「わたし、先に行ってる」
ナオミは、玄関に走りだす。
「ダメだぞ。道路に出ちゃ」
「うん。庭でタローと、遊んでる」
フレデリックは、リビングへ行った。ハンガーから、ブルゾンを取って羽織る。
「あら、お出かけ？」
キッチンから、サユリが顔を覗かせた。
「ああ。ナオミと散歩に行ってくる」
「そう。いま、クッキーを焼いてるの。帰ってきたら、みんなでお茶にしましょ」
サユリが、微笑んだ。
フレデリックは、微笑みを返しながら、サユリに近づく。
「ありがとう」
と言って、唇に軽くキス。
「あなたったら……」
サユリは、頬をほてらせ、甘く微笑んだ。

窓の外で小鳥が鳴いた。
「あら、何かしら？」
「めずらしいな、ヒバリだ」
「ヒバリ……」
「何か、欲しいものがあったら、買ってくるけど？」
「ううん。いいわ。明後日から、留守にするんだし」
「そうだな」
明後日から、モルジブ諸島へ旅立つ。
親子三人。のんびり、海を見て、過ごすつもりだ。
予定は一週間だが、気が向けば、もっといてもいいと思っている。
「パパ、はやく！」
庭から、ナオミの声がする。
「じゃ、行ってくる」
フレデリックは、背中を向けた。
「あなた」
サユリが、呼び止める。
「なんだい？」

フレデリックは、ふり返った。
「ううん、何でもない。気をつけてね」
サユリは、やわらかく微笑んだ。
心の底から、和む笑顔。
一年前には、絶対にフレデリックに向けてくれなかった笑顔である。
フレデリックも、笑みを返した。
サユリに負けない笑顔。
仕事が第一と考えてたときには、絶対にできなかった笑顔。
この笑顔こそ、休暇をとった二つめの、そして最大の目的であった。

エピローグ

山道。
茂みの脇に、二機のヴァンツァーが、身を潜めている。
山間の間から、軍用トラックが、走ってくる。
「情報どおりだ」
一機が、言った。
「あの輸送車の中に、核兵器が？」
もう一機が、訊く。
「そうだ。どうあってもヤツらは、この島を食いものにする気らしい」
「よし、いくぞ！」
二機のヴァンツァーは、駆けだした。
「将軍、現れました。テロリストです！」
トラックを運転していたＰＭＯ兵士が、後部座席に向かって叫んだ。

「現れたか。こちらの流した情報とも知らずに。よし、ヴァンツァーを起動させろ！」
トラックは、停車。
中から、ＰＭＯ——平和調停軍——の戦闘用ヴァンツァーが、飛び出した。
その数、二十機を越える。
「ちくしょう！　核兵器じゃないぜ」
黒ずくめの、傷だらけのヴァンツァーが、叫ぶ。
「ハメられたようだな」
もう一機は、古びたツィーゲライフルを、構えた。
「敵はたったの二機だ。いっきに潰せ！」
ＰＭＯの将軍が、兵士を鼓舞する声が、響く。
「やばいぜ、ロイド」
黒ヴァンツァーが、呻いた。
「おちつけ、ゲンツ。死ぬも生きるも、運命だ」
そう口では、言ったものの、敵は最新兵器をまとった兵士たちだ。
こちらは、二人。
しかも連日のゲリラ戦で、ヴァンツァーも肉体も、疲労の極致に達している。
目を閉じ、自機ヴァンツァーに、心の中で、語りかけた。

〝どうやら、これまでのようだ。カレン……〟
爆音。振動――!
「な、何だ?」
ゲンツの、驚きの声。
攻撃は、受けていない。
ロイドは、おずおずと、目を開けた。
PMOのヴァンツァーの間を、ハンドロッドを手にしたヴァンツァーが、風のように疾走している。
「楽しくやってるじゃねぇか。抜け駆けはなしだぜ」
「キース!」
山頂からブルーのヴァンツァーが、最新式ミサイルランチャー、〝ドンキーDX2〟を放った。
一発で、PMOのアタッカーが、粉砕した。
「サカタ!」
「隊長、気づいたんです。この島から、背を向けて生きていちゃダメだって。死んでいった親父と兄貴のためにも。そして、おれ自身のためにも」
真紅に染まるヴァンツァー。手にしたキャッツレイが、火を噴く。
「ロイド。この島の問題は、あなた一人で背負うには、重すぎるわ」

「ナタリー、君まで……」
「おっと、ロイド。感激するのは、まだ早いよ！」
「ヤン！」
「姉貴と話したんだ。おれたちだけで、幸せになっちゃいけないって。それに、以前のおれみたいなヤツが、利用されるのを見てらんないんだ」
イーヒンが、マシンガンを連射。見違えるような逞(たくま)しさで、敵に向かっていく。
「くそっ。増援を要請しろ」
ＰＭＯ将校が、叫ぶ。
「だ、ダメです。無線が通じません」
「何だと！」
「へへへ。おあいにくサマ。この辺りで無線は、使えないようにしておいたよ」
「ハンス！」
「まったく見てらんないなぁ。ロイド、戦争は情報が命だよ」
ハンスが、笑う。
「情報だけじゃないよ。物資の補給だって、必要だろ～ッ！」
大型補給車が、粉塵(ふんじん)を上げて、疾走してくる。
「ピ、ピウィー!!」





「最新兵器を、どっさり仕入れてきたよ。もちろん食料もね！」
ピウィーが、うれしそうに、言った。
「お前たち、いいのか？」
「なぁ～に、金はたっぷりと稼いだ。残りの人生、おまえらに預けるのも、面白いかと思ってな。きっとJJだって、同じことをいうぜ」
キースが、舞う。
「この島で死んでいった人たちのために」
サカタが、砲撃。
「そして、この島で生きていく人たちのために――！」
イーヒンが、戦う。
「ヤッホーッ。キャニオンクロウの再結成だねッ！」
ピウィーが、叫んだ。
「ロイド、隊長。次の作戦を？」
ナタリーが、指示をあおぐ。
ロイドは、目を閉じた。
〝カレン。もう少し待っていてくれ。俺には、まだやらなきゃならないことが……〟
――いいえ、わたしも、いっしょよ。あなたと、あなたたちと！

どこからか、カレンの声が、聞こえた気がした。
「カレン……！」
目を、見開く。
瞳が、熱く燃えていた。
ロイドは無線に向かって、力をこめて叫んだ。
「キャニオンクロウ。全機前進――！」

『フロントミッション～最前線報告』完

ご意見、ご感想をお寄せください。

ファンレターの宛て先

〒151-24　東京都渋谷区代々木4-33-10
株式会社アスキー　ログアウト編集部

飯野文彦　先生
天野喜孝　先生
横山　宏　先生

フロントミッション 最前線報告

一九九五年七月二十二日　初版発行

著者　飯野文彦
発行人　塩崎剛三
編集人　浜村弘一
発行所　株式会社アスペクト
〒151-24　東京都渋谷区代々木四-三十三-一〇
電話　〇三(五三五二)八一九一
振替　〇〇一八〇-八-五六二七二
編集・制作　アスキー出版局
デザイン　青山範子
CTS　東京書籍印刷株式会社
印刷　図書印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

ISBN4-89366-375-5

ログアウト冒険文庫

ヴァンパイア

MIDNIGHT FLYER

いさき玲衣　　イラスト　土屋杏子

ダークストーカーたちの
しれつなバトルが、いま始まる!!

アーンスランド家はオゾムの差し向けたザベルとビシャモンたちによって壊滅の危機にさらされていた。当主ウェインズは執事とともに立ち向かうのだが、パイロンの放った力によってプラズマ球の中へ封印されてしまう。ウェインズの娘モリガンは父を救うべく、戦いの旅にでる。

定価590円　ISBN4-89366-376-3

ログアウト冒険文庫

真・女神転生if…

久保宗雄　　イラスト　金子一馬（アトラス）

超人気RPG完全ノベライズ化！

突如襲った激しい衝撃と共に、私立・軽子坂高校は異界に飛ばされていた。必死に脱出口を探す二年生の仁と由美。「体育館に行けば謎がわかる」という一年生の玲子の言葉に、体育館に向かった二人は、禍禍しい魔法円（マジカル・サークル）の上に浮かぶ巨大な幻影を目撃するのだった──。

定価540円　ISBN4-89366-390-9

ログアウト冒険文庫

ウィザードリィ・サーガ 上

狂王の血脈

野間逸平
伏見健二 共書

イラスト　神村幸子

ADWIZの壮大な物語の始まりだ!!

月光はおろか、星明かりすら地上には届かない暗い夜、戦乙女（ヴァルキリー）のデュカは、虚空より燐光にくるまれて落ちてきた少年フリンと出会う。アインシュタットの王子フリンは自分が気づかぬうちに父であるアンシュラーク王によって、名も知らぬ街ヴァンクールに放り出されたのだった!!

定価630円　ISBN4-89366-391-7

ログアウト冒険文庫

仮免巫女トモコ2

裏切りの玄武院

南原　順　原案
工藤　治　作
イラスト　近永早苗

**心を捨てたのか、玄武院!!
それは裏切りだ！**

邪星修祓寺院でも指おりの実力を持つ霊能戦士の玄武院が妖怪と結婚!?　相手は魔性の妖怪虎飛車。日本中の妖怪が集まる阿雲村の謎のコロシアムで婚姻の儀式が始まる。その陰に隠された妖怪たちの恐ろしい野望とは？　兄弟子・玄武院に立ち向かうトモコたちに勝算はあるのか!?

定価640円　ISBN4-89366-392-5

ログアウト冒険文庫

遊んでて悪いか!!

火浦　功　　本文イラスト　米田　裕

スチャラカ作家の日常生活！?

原稿が遅い。書かないことで、日本一のスチャラカ作家を自認する火浦功が、ログアウトの第一号からまる三年間、奇跡の持続力でその赤裸々な日常をつづった日記。どうして原稿が書けないのか？その秘密を解く「鍵」は本書にある。ギョーカイの人および火浦ファン必携の書。

定価560円　ISBN4-89366-393-3